方正友好交流の会　会報 31 号　2020 年 12 月刊

星火方正

～燎原の火は方正から～

＜方正へ　そして方正を後にして＞　引間　政好
―「開拓団」の家族としての体験―
初めての肉声　驚き、怒り、未来への危惧　星野　郁夫
戦後の中国で、流転８年の私の軌跡　新宅　久夫
幼少期の錦州・奉天・引揚げと故郷再訪　大野　正夫
PTSD の日本兵と家族の交流について　黒井　秋夫
甦らせたい！　伊丹万作が遺した言葉　大類　善啓

中川村開拓団犠牲者の招魂碑（埼玉県秩父市の武州日野駅近くにある）

本号掲載の引間政好さんが体験され、逃避行の末に犠牲になられた人たちの霊を慰める招魂碑が上に見える。記された招魂碑という字は時間が経ち汚れ、また風食によるのか見えにくい。また前面にあるのが犠牲者の名前が記載された碑である。引間さんの遺族、また本誌に手記を掲載した高橋章さんの遺族の名前が隣に並んで記されている。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第 31 号　2020 年 12 月刊）　～燎原の火は方正から～

目　次

＜方正へ　そして方正を後にして＞ ―「開拓団」の家族としての体験―	引間　政好	1
初めての肉声　驚き、怒り、未来への危惧	星野　郁夫	18
高橋章さんとの出会い	大類　善啓	21
＜満蒙開拓団 忘れてはならぬ記憶＞	高橋章さんを紹介した朝日新聞記事	23
元中川村開拓団の慰霊碑は何故二つあるのか	高橋　章	24
残留孤児「最後の養母」死去	読売新聞	28
戦後の中国で、流転８年の私の軌跡	新宅　久夫	29
「満蒙開拓」と私	加藤　まり子	33
幼少期の錦州・奉天・引揚げと故郷再訪	大野　正夫	35
国内各地の「満蒙開拓慰霊碑」の保存を	寺沢　秀文	41

「満蒙開拓」慰霊碑　都内に点在、地図作成　毎日新聞　48
―元高校教員、異郷での悲劇伝え―

「満州」移民関係の二冊の本　先﨑　千尋　49

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

PTSD の日本兵と家族の交流について　黒井　秋夫　54

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

戦後 75 周年『今に想う』出版に際して　大島　満吉　58

井出孫六先生の御逝去を悼む　寺沢　秀文　62

金丸千尋さんを偲ぶ―日中友好文化交流に一生を捧げた人―　新宅　久夫　64

金丸千尋―中国・東北との友好に駆けた男　大類　善啓　65
『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』2003 年刊より転載

中国人の寛大さと慈愛心　『星火方正』５号 07 年 12 月刊より転載　金丸　千尋　69

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「一篇の詩が内包する歴史」　柳生　じゅん子　71

黄砂現象　〃　74

忘れ去られた、あの日から　千秋　昌弘　75

ゆりっく＆るりっく　渡部　通恵　76

未完ドキュメンタリー映画『10 間だけの祖国』のこと　吉川　雄作　78

愛新覚羅浩夫人の書簡を紹介　末広　一郎　79
―軟禁中のお世話をした山下（甲斐）香都さん―

甦らせたい！　伊丹万作が遺した言葉　大類　善啓　86

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

不安が生む分断 繰り返すな―満州のペスト禍 85 歳が警鐘―　東京新聞　93

戦後 75 年　群馬と満蒙開拓　（7 回シリーズ）　朝日新聞（群馬県版）　94

記憶のなかの「満州」（上）　見学旅行で知った〝母国〟との違い　しんぶん赤旗　101

記憶のなかの「満州」（下）　地べたをはうように逃げて　〃　102

日中のはざま　残留孤児３代の物語　朝日新聞　103

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

――「方正友好交流の会」へのお誘い――　方正友好交流の会　104

報告／編集後記　105

「開拓団員」、引間政好さんの体験を聞く

＜方正へ　そして方正を後にして・・・＞

聞き手：大類善啓（方正友好交流の会 理事長、本誌編集人）

＊本稿は 2020 年 7 月 26 日（日）、方正友好交流の会・第 16 回総会後に行われた＜引間さんの体験を聞く＞会での記録です。当日司会をした森一彦（本会・事務局長）がテープを起こした記録を基に大類が校正し、また引間さん及び引間さんを方正の会に紹介された新宅久夫さん、引間さんの小学生時代の同級生であり、同じ「開拓民」の一員の高橋章さんらの修正を受けました。文中の注は、各位の意見を取り入れましたが、とりわけ名前を記しませんでした。改めて各位に感謝します。しかしなお、誤りがあるかもしれません。ご指摘をいただければと思います。

○引間政好（ひきま・まさよし）さんのプロフィール：

1934（昭和 9）年、四男二女の末っ子として、埼玉県秩父市中宮地に生まれる。1940（昭和 15）年、その中宮地から一家は現在の黒竜江省（旧三江省）樺南県閻家中川村に「開拓民」として渡満する。

敗戦時、11 歳の引間政好少年は、土地を奪われた近隣の中国人などから襲撃を受け、家族と離ればなれになりながら方正を通過して、徒歩で 430 キロを踏破して現在の黒竜江省尚志県（当時は浜江省珠河県）にたどり着く。

1946（昭和 21）年 8 月 22 日、尚志県から最終の列車に便乗し、ハルビンへ移動する。

1948（昭和 23）年 6 月、八路軍（後の人民解放軍）の手配でハルビンから牡丹江へ移動。

1949（昭和 24）年 8 月 28 日、牡丹江から瀋陽の招待所へ入居後、瀋陽日本人小学校に入学し寄宿舎に入居、寄宿舎で新宅久夫氏と出会う。日本に帰国するまで、長兄が無事、秩父に帰った事を知らずに戦災孤児として生活した。

1953（昭和 28）年、引揚船で舞鶴港に帰国する。

写真右・大いに語る引間さん、左・大類

大類：今日は「開拓民」の一員として渡満され、さまざまな体験を経た引間政好さんにお話を伺います。引間さんには、現在のコロナの危機状況のなか、お越しいただきありがとうございます。

まず初めに、引間さんをご紹介くださった方が会場にいらっしゃる新宅久夫さんです。新宅さんも中国からの引揚げの方ですが、お父さんが満鉄関係にいらして、いわゆる開拓民の一員ではありません。新宅さんは国際善隣協会のメンバーで、私も3年前に誘われて国際善隣協会という、戦前に満洲交友会という名前で作られた会があります。新橋に国際善隣会館を有していて、そこの会合で新宅さんと会った際、満洲で苦労された引間さんという方がいらっしゃると伺いました。

それで私は、ぜひ原稿をお願いしたいとお伝えしたのですが、原稿を書くのは少々億劫だとのことで、それではインタビュー形式でお話を伺いたいと引間さんを説得していただき、本日の引間さんとの出会いとなりました。今日私がどこまで引間さんのお話を引き出せるか、語っていただけるか、非常に特異なというと失礼かもしれませんが、いろいろなご体験をお聞きしたいと思います。

引間さんは秩父の中川村の開拓団の一員として満洲へ行かれましたけれども、満洲の記憶はいつ頃からありますか？

引間：昭和16（1941）年4月です。学校に入るその年です。満洲の記憶はそこからです。

大類：ご両親は中川村の分村ということで行かれたのですか？

引間：うちは秩父の市内に居ました。機屋だったんです。あんまり景気が良くなくて、周りの人がうまいこと言うものだから、親父が近所にお茶を飲みに行ったところ、満洲へ行ったらいいんじゃないかということで、家族を連れていくような話になっちゃったんですよ。

大類：そうですか、中川村の分村という形で行ったけれど、言ってみれば「にわか中川村」の村員になったということですか？

引間：そうです。秩父祭に中宮地の宮地屋台（注：人が引っ張るお祭り用の屋台。屋台は、太鼓を叩いたり踊れる舞台でもある）という屋台がありますが、うちは宮地屋台の小屋の近所です。

大類：中川村の分村という形で、中川村以外の方で参加されたのは、引間さんの一家ぐらいですか？

引間：違います。もっといました。荒川村と中川村が合併して中川村となり、今はまた合併して秩父市ですが、中川村の神社まで半分満洲へ持って行きました、神社も昭和18年に建てました。結局、分村という形ですから、次男三男が中心で、長男は残して行ったという形ですね。

大類：そうすると中川村っていうけれども、まあ少数の人たちがたまたま中川村じゃないけど参加されたと。そこで違和感というか、それはなかったですか？

引間：それはないですね。ないです。

大類：それじゃあ気持ちよく、というとおかしいですが、行かれたわけですね。

引間：そうですね。

「朝鮮の子供たちと仲良しだった」

大類：それで中川村在満国民学校に入学されたわけですね。この国民学校では生徒は何人くらいですか？

引間：全校で 126 人です。その頃は朝鮮族と一緒でね、高等 1 年、高等 2 年の上級生では朝鮮の人が 13、4 人いました。

大類：昔は尋常小学校というのがあって、その次が高等科ですよね。その在満国民小学校のなかに、高等科というのがあったんですね。高等科のなかに朝鮮族の方もいたと。いわゆる中国人というか、満人はいなかったですか？

引間：いなかったです。

大類：その小学校には 1 年生で入って、朝鮮族の人たちとは、仲良くやっていましたか？

引間：もう最高に良かったですよ。芸も達者でね、向こうの人は。学芸会で盛り上げるのも朝鮮の人で、日本語もうまいし、子供でもみんな芸の持ち主なんですよ。

大類：その時代には「五族協和」という言葉がありましたよね。いつ頃から引間さんの頭のなかに五族協和という言葉が入っていましたか？

引間：小学校 1 年ですね。先生から習いました。

大類：学校で五族協和と習ったわけですね。日本人、漢人、朝鮮人、満洲人、蒙古人、仲良くやるんだと。でも実際はそうではない。それは具体的に感じましたか？

引間：いや、それは子供だったからね。後では分かったけれども、極端には感じませんでしたね。朝鮮の子供たちとも仲良くやっていましたし。

大類：それで、6 歳で入学して、まあ楽しく過ごしていらしたということですね。それで学校以外で、いわゆる満州人、中国人との付き合いはあったのでしょうか？

引間：あんまりないですね。

大類：そうすると学校行って家に帰りますよね。帰っても中国人との付き合いとか、蒙古人との付き合いとか、朝鮮人との付き合いとかそういうのはなかったですか？

引間：ほとんどなかったですね、子供だったから。

大類：ご両親は、その辺のお付き合いはありましたか？

引間：それはまあ、どの家もお手伝いさんというか、苦力（クーリー）を使っていました。地所を区分けする仕事は多いから、一人ではやりきれないんですよ。畑を耕せない。最初は団長から十町歩を与えられました。十町歩だってちょっとできないですよ。だから、苦力を使わざるをえなかったんですよ。

大類：苦力は一家に 1 人か 2 人くらいですか？

引間：いやいや、もっとです。うちは 2 人いました。年齢は 40 ぐらいの男性、中国人です。当時は、彼らを満人って言ってましたね。

大類：その人たちとは、お話するということはあまりなかったですか？

引間：ありますよ。彼らは、日本語は喋れないです。どっちもできないから、まあまあって感じですよね。中国語の勉強もしましたけど、通じる中国語はどうも日本人は下手ですから、だめですよね。国民学校でも多少中国語の勉強はありましたけど、週 2 時間もなかったですね。先生は日本人です。ほとんど、授業のなかには入ってなかったですね、中国

語は。当時何しろ日本が負けると思ってないから。一週間に1時間もなかった。そこにいるから、自然に覚えた感じです。お互いカタコトで喋りあったっていう感じですね。

「一番の思い出は我が家が建ったこと」

大類：小学校に入って6歳、敗戦まで4年半ですか。このなかで一番印象深い出来事、強烈に思い出すという何かありますか？

引間：昭和18年の年が引間家は一番儲かったんですよ。農業が豊作で。それで家を建てました。そもそも入植した現地の中川村は10集落があり、そのうちの6集落は、もともと中国伝統の部落形式で、10軒ぐらいの家が、土と草で練った高さ2.5mの土塀で囲み、外側に水堀があり、匪賊の侵入を防ぐ門があって夜間は門を閉ざしていました。残りの4部落が日本から来た開拓民です。

そこに家を建てたのは昭和19年ですけど、儲けたのは18年です。当時大きなソリで、材木を35、6 km 先の大石頭橋（だいせきとうきょう）っていう大八浪開拓団（注：長野県の泰阜村開拓団）の近くで、もっと東の方にあった山に木を伐りに行って、その材木で19年に建てたんです。間口4間、奥行き5間、20坪です。それを元の開拓団でもらった家に、そのまま増築した感じですね、東側にね。大工じゃないけど、兄貴が建てたんです。中国人は器用ですから、手伝ってもらって家ができるんです。そのことが一番印象深かったですね。

大類：いままでよりも広い家になったということですか？

引間：以前は馬小屋とお風呂がなかったんです。お湯で体を拭いていたんですよ。初めて五右衛門風呂っていう板を沈めるやつ、あれに入れるようになったんです。それまでお風呂がなかった。他の家も間取りは同じだから、お風呂はないんです。子供はたまには、たらいで浴びたりしていたけど、大人はどうでしょう。うちは牛を飼っていたんですけど、牛がズラッと並んでね。夜の世話焼くのが、寒いところを通らなくても家の中を通って行けるから楽になったんです。

大類：引間さんのところは新築で家が建ったけれども、隣とか近所のなかには相変わらず昔の家のままっていうこともあるわけですね？

引間：全員“既製品”の家そのままですよ。

大類：羨ましがられたり、ちょっと風呂を貸してくれとか、ありませんでしたか？

引間：それは分かりません。記憶にないですね。

大類：そうすると、今のは一番の良い思い出ですね。あまり思い出したくないことだと思いますが、辛かった思い出は何かありますか？

引間：戦前はね、開拓団に入って生活がいいので楽しかったんですよ。昭和19年頃からかな、学校へ行ってもあまり勉強しないで（注：3年生以上はほとんど勤労奉仕だったという）、よその家に草取りに回されたんですよ。二列に並んでね。「火筒(ほづつ)の響き遠ざかる～」なんて昔の歌を歌いながら、草刈りを立ってするんです。＜除草（チューツァオ）＞っていう草刈りなんですけど、担いで。「今日は誰々の家に行きます」なんて言ってね。夏は大陸性気候で暑いんですよ。暑い時間にやらされるのが嫌でした。草刈りは構わないんだけど、なにしろ暑い。大陸性気候っていうのは、寒暖の差がものすごく激し

いんですよ。冬は零下 40 度とかね。外套着て防寒帽かぶって授業ですよ、寒いんで。暖房設備は教室にだるまストーブひとつ。

大類：自宅の暖房はどうでしたか？

引間：自宅はオンドルがあって、裏の部屋がオンドルで、南側の部屋は板の間で、その中間にペチカがあるんです。ペチカは、おかずを作る小さな釜の煙が通って上にいく。オンドルはこっちのご飯炊く大きな釜から暖を取ってるんです。

大類：そこは元々中国人の家ですか？

引間：中国人の家があった所をね、満拓（満州開拓公社）が半強制的に安く買って、先遣隊が行って建てたんですね。昭和 16 年はもう先遣隊じゃないですから。中川村は早く、昭和 14 年頃から行ってましたから 。

大類：もともとオンドルっていうのは朝鮮族の家ではないんですか？

引間：もともとその場所には家があって、それを半ば奪ってしまった。そこに建てたわけです。大陸性気候には、三寒四温というのがあってね。一週間のうち 4 日暖かくて、3 日は寒い。寒い時は仕事に出ないんです、4 日暖かいうちに仕事してね。冬場ですけどね。

ソ連参戦時は？

大類：当時、ご一家は何人だったんですか？

引間：うちは 8 人かな、行ったのは。（当時の写真を見て）この写真は昭和 16（1941）年 3 月の秩父神社の前で、行く前に撮った写真です。渡満記念でね。

1941 年 3 月、引間さん一家が渡満記念に撮った写真（年齢は撮影時）

前列左から順に右へ。長姉・ヒロ江、19 歳、1945 年 8 月 15 日、三家子屯で死亡。次姉・ヨシ江、16 歳、ジャムスより引揚げ。母・ハナ、51 歳。大羅密で死亡。次兄・善市、14 歳。21 歳の時、ハルピンで死亡。本人・政好、7 歳。三兄・敬二、10 歳。1946 年 12 月、伊漢通で死亡。

後列左が長兄、24 歳。1945 年現地招集されシベリアへ。政好少年が帰国した時には、すでに秩父に帰っていた。その右が、父・幾蔵、51 歳。1946 年 12 月方正で死亡。

大類：皆さん、写真見えますでしょうか。お父さん、お母さん、お兄さんが 3 人、お姉さん 2 人、合計 8 人で皆さん正装した写真があります。このなかの方々から何人もお亡くなりになられました。非常に厳しい気候のなかでも、楽しく過ごされていたわけですね。そして、ソ連が参戦する 1945（昭和 20）年 8 月 9 日ですが、何か違うなという雰囲気とか、感触というのはいつ頃から感じられましたか？

引間：それは昭和 20 年に入った春頃から、私は 5 年生でしたが、変だなと思い出したのはその頃ですね。学校の上に戦闘機の後ろに長いロープをくっつけて、後ろに白いスポンジみたいなでかいやつ、吹き流しみたいなのを引っ張って、日本軍がこちらからダダダダと撃つ練習するんですよ。そんな近くで練習するのは今までなかったんです。平和だったのに、学校の近くでそんな練習をやるようになった。戦争が近場になってきた、そんな感じです。ソ連が来るのはもっと後ですよ。

大類：それまでは戦闘風景っていうのが身近になかったんですね。それでおかしいと。

引間：おかしいっていうよりは、随分賑やかになってきたなあ、「いよいよかな」みたいな話ですよね。子供ながらに思うようになった。戦争が身近に見えるようになってきた。それから、昭和 19 年の夏に日本軍 3 人乗りの戦車が、うちの庭に一週間留まっていたことがあるんです。東側の望月さんとの間に便所があるんですけど、そこの戦車の横にテントを張って泊まっていた。3 人乗りなんですよ。戦車のなかには入らなかったけど、「すげーな、すげーな」なんて言って乗っかってね。一週間泊まっていましたよ。何なんですかね。帰る時にじゃあどこへ行くんだろうって見てたら村道を南の方へ、学校へ行く方ですね。子供たちは追いかけて行ったけど、向こうはくたびれないもの、途中で走れなくなっちゃってギブアップ。戦車の兵士とも何か話しましたけど、内容は忘れました。

大類：それでは、ソ連の参戦の時をお聞きますけど、8 月 9 日に国境を越えて侵攻してきましたよね。それはどんなふうに感じましたか？

引間：ソ連が参戦したと私が聞いた時は、もう負けた戦後のことですね。二枚羽根の飛行機が偵察には来ましたよ。本部の上を旋回して、ソ連機です。それはすぐわかりました。そうしつこくはやってなかったですね。羽根が 2 枚ある飛行機だから。特に怖くはなかったですね。当たらないと思っていたから。その時には、もう家族はバラバラになっていました。

最後の召集令状が 8 月 10 日です。18 から 45 歳までね、みんな召集されて。その時に召集されたのは、先ほどの写真のお袋の隣、次兄です。

一番上の長兄は 5 月 9 日に東寧の国境守備隊に入った。次兄は牡丹江へ命令で行きました。ハルピンの道裡で昭和 22 年 3 月 23 日に亡くなりました。3 番目の兄貴は、終戦時は高等 2 年です。あの年の 12 月 19 日に亡くなりました。あの方正に祀ってある伊漢通開拓団のなかに入っているわけです。親父は 55 歳だから招集されなかった。

大類：そうしますと、8 月 15 日の敗戦時ですが、引間さんは日本が負けたと思いましたか？

引間：うちの部落には電気もラジオもなかった。しかし、一人で逃げた時に、直感で日本が負けたというのは分かりました。目の前で日本人が殺されているんですよ、槍で。普通じゃないですよ。こっちも殺されそうになっているから逃げたんです。親父とお袋と兄が

いたんですが、親父は自分の家だから、なかなか家を出なくて、私はもどかしくて、同じ家族でも我慢できなかったんです。それで一人で逃げたんです。

自分が本部まで歩いて行って、その夜にお寺に人が集まったんですけど、これは負けたんだぁなって。

８月 15 日の夕方ですね。一人で山の中へ逃げたんです。中国人が雄叫びあげて東門の方に集まっていました。槍で突かれると痛いですから逃げたんです。一人でもろこし畑のなかを逃げたんです。中国人は同じ集落に住んでいたので、隣の家に襲いに行くようなものです。門の広いところで気勢を上げるのが聞こえたんです。日本人を襲うんだとわかるんです、直感的に。親は家を捨てて逃げるのは、なかなか大変だという気持ちがあったと思うんですけど、そんなのはさておいて私は一人で逃げた。そこからずっと一人になってしまった。

大類：中国人が襲ってくると、すぐわかったのですか？

引間：すぐわかりましたよ。次兄が８月 10 日に召集されて牡丹江に入った直後で、もう空気が全然違っていた。苦力の家に豚６頭と牛７頭、それと農器具をすべて、あげたんです、前もって。15 日の前ですよ、10 日と 15 日の間ですね。親もわかっていたのでしょう、もうやばいって。全部くれちゃったんですよ。わかっていた、言わないだけでね。逃げるのだって、建てた家捨てて逃げるんだから、実際は相当苦しんだと思いますよ。

大類：お父さんたちはどこへ逃げたかわからなかったんですか？

引間：わからない。そうしたらね、17 日に偶然会ったんです、親と。西にあった読書（よみかき）開拓団の一番外れの所で、17 日の朝ですね。目の前にいるじゃないですか。またすぐに別れてしまったのですが。歩いていても、長い列で誰がどこ歩いているか分からないんですよ。そこへバンバンバンと襲撃が来るでしょう。そうすると散らばって逃げる。またゴソゴソ歩き出す。逆に逃げる人もいるしね。そういう状況のなかで別れちゃったんです。だからほとんど一緒には歩いてないです。一緒に逃げようなんていう雰囲気じゃない。

大類：お父さんはお父さんで逃げたのですか。

引間：親父は、お袋と兄ちゃんと兄貴の嫁と、逃げたらしいです。後で聞きましたが。長姉は槍で殺されました、15 日に。死んでたから。肩からやり刺されて。26 歳です。８月 15 日に三家子屯で。裏門から来ると、一番近い家だったんですよ。16 年に結婚して、隣の集落にいたんですね、２㎞ほど離れた。子供は槍で殴られて一発で終わり。おしめを取り替えていて、それを終えて逃げようとしてたら、後ろから上から刺されて殺された。傷口からごはんと、粟や血のあぶくなどが出ちゃってたそうですよ。

大類：そうですか。お母さんは翌年に亡くなられた？

引間：お袋は翌年の６月 28 日に亡くなりました。伊漢通で何も食べてなくて。伊漢通は方正の８ キロ東にあるんです。

殺された子供たち　依蘭から方正への逃避行

大類：そうですか。引間さんは、樺南県の中川村から逃避行されたのですね。８月 15 日から９月２日までですか？　開拓団の本部へ行って、そこからどうされたんですか？

引間：方正に着いたのが、人によって記憶が違って、9 月 1 日という人もいれば、2 日という人もいれば、6 日という人もいます。まあだいたいその辺ですね。

開拓団の本部から西にある公心集読書（こうしんしゅうよみかきむら）開拓団は、ハーモニカみたいな細長くなっているんです。北が七虎力河、南に倭肯河という二つの河があって、中国の河は独特で、流れは小さいんですけど、周りの湿地帯が数キロにわたってあるんです。丘の上に開拓団があって。ハーモニカみたいに部落も細長くあったんです、道が一本でね。最後は道がなくなって、その道を七虎力河を渡って北へ降りて行って、太平鎮から依蘭へ行く国道が走っています。千振（注：本来の現地名は七虎力、チーホーリだが、日本人には言いづらく千振がチフリになったと言う）から土龍山を通る道で、依蘭へ行く道ですが、まっすぐ行けば方正へ行きます。それをまたまっすぐ行けばハルピンです。

大類：そうしますと、引間さんは、まず依蘭に行かれたのですね？

引間：これは、団長が言ったのか、誰が言ったのか分かりませんが 4 つの開拓団、大八浪、七虎力、中川村、読書村の 4 つで合流して歩いたんです。依蘭の手前の団三子という集落まで行ったら、ロシア兵が依蘭にいるからそちらへ行かずに、西へ行かず南東ですね、逆に開拓団に戻る方向へ歩き始めた。そして三道崗というところまで来たんですけど、遠くを見たら 20 キロくらい先に学校の近くの山が見えるんです。だから、一週間何やってたんだって。ぐるっとまわっただけだった。

中国人はバンバン撃って来るしね、こちらも撃つ。当たれば死なないわけにはいかない。河を渡るのに、小さい子供の首絞めたり、河に流したり。開拓団の人は老夫婦ばかりだし、5 歳以下の小さい子供は歩かないんですよ。背負うのは重たいし。赤ん坊はともかく、下の子はほとんど殺されたと思いますよ。自分の家の人に。足手まといになるって。太平鎮に行くまでに、皆さんがそういう体験をされたんです。それで着いたのが太平鎮。そこまでに七虎力河と八虎力河という２つの河があるんです。その湿地帯を歩いているときにそのようなことが行われたんです。

大類：その時は何人ぐらいだったのですか？　逃避行の時にも中国人との撃ち合いがあったのですか？

引間：その時移動していたのは 1500 人くらいですね。４つの開拓団ですから。逃避行でも中国人が撃って来ることがあるんです。日本人も鉄砲を持っている人がいて応戦しました。その前に、開拓団に鉄砲を全部出せっていう命令が来て、鉄砲を供出した時期があったのです。終戦前の昭和 19 年だったか。うちも出しました。鉄砲は、ノロとかキジ撃ちするのに鉄砲があった。散弾銃ですよね。ガチャンって折るやつですね。あれを出してしまって、うちには鉄砲がなかったんです。中には供出しない人もいました。

たどり着いた方正で

大類：1500 人の集団が鉄砲を撃ち合ったり、子供を殺めたり、いろいろありながら、最終的に方正に着いたのはいつ頃ですか？

引間：方正に着いたのは 9 月 1 日だったと私は思います。どう計算してもね。その時に何人着いたかは分からないですね。当然、1500 人もいなかったです。方正には伊漢通開拓団

がいたんですね、沖縄県人で、十三次開拓団ですから遅く行った人たちです。中川村は八次で早かったから、まだ学校の運動場も出来上がっていなかった、花壇があるくらいでね。

大類：そうすると、伊漢通開拓団に合流した感じなのですね？

引間：そうですね。そこへ、本では 5000 人も来たなんて書いてあるけど、確かに大勢いました。

大類：この時は、食料はどうしてましたか？　餓死した人も多かったと聞きますが。

引間：そうです、それが問題なんです。炊事場なんてないです。なかの普通の家も含めて全部が収容所ですから。学校ひとつではなくて部落全部だから。炊事場がまずない。自分で穴掘って、拾ってきた鉄兜を逆さにしてね、飯盒にする。小さい穴が 3 つ開いているんで、そこに包帯を釘で強く詰め込んでね。高粱に水をたくさん入れてお粥にして、高粱粥です。それもまともにあるわけではないです。まだ暖かかった頃ね、9 月に伊漢通の港に行って稼いできたから、それをもらって食べた。その後はもうなかったです。何も食べないでいるから、十日も食べずにいれば死にますよね。そうやって死んでいったんですよみんな。目の前で何人も死んでいます。

大類：死体置き場がすぐ一杯になったとも聞きましたが・・・。

引間：行って一週間くらいで、死体置き場の穴を掘ったんですよ。私らは下級生だから掘らなかったけど、高等科の人たちは手伝ってね。冬は凍っているから。この会場のね、1/4 くらいの幅かな。長さは 10ｍちょっとですか。その穴が一杯になっていきました。昭和 21 年 1 月 7 日に私はそこから出たんですが、その頃にはその穴が死体で一杯になっていました。翌年の 1 月ですね。それまで学校にいました。ほとんどもう人もいなかった。ムシロの中に 4 人くらいいたかな、硬くなってね、死んでる人を持っていく人もいなくてそのまんま。

1 月 7 日の夕方、中国人の人が来て、長男の嫁をもらいに来たんです。それに付録として、お袋と私がくっついて、ソリに乗って布団を掛けられてね、外が見えないまま、1 時間くらい走って向こうの家に着いたんです。

「満妻」になった日本女性たち

大類：1946 年 1 月 7 日ですね。自分たちが生きるには中国人の家に行くのが一番いいと。最終的にそれを判断されたのはどなたですか？

引間：最終的に判断したのは長兄の嫁です。

大類：そこの中国人の家は何人家族だったんですか？

引間：おばあさん、倅が 2 人、妹が 2 人、5 人家族でしたね。

大類：それは快く迎え入れてくれたんですか？

引間：まあ悪くはなかったですよ。長兄の嫁が、その家の次男のところに嫁に入った。私らは付録ですから。行けば飯は食える。いわゆる満妻（マンツマ）ですね。満洲の妻、満妻になった人が 1200 人くらいいたそうです、伊漢通でね。

大類：中国人の家庭に入って、1 月 7 日から 3 月末までそこにいらしたのですね。そこを離れた理由は？

引間：居候はね、居づらいですよ。ただ飯食ってね、いくら姉さんが担保に入っていても、最初の一週間はいいとして、居られないですよ。これは出るしかないと、それを悟ってね。何も言われはしなかったけど、居ちゃまずいと子どもでも感じます。それで、お袋と逃げる計画を立てて、星の位置とか尖山っていう尖った東にある山の位置を見て、あっちに行けば開拓団の方だとか頭をひねっていたんです。それで、夜の真っ暗な時に、お袋と 2 人で逃げたんです。

大類：逃げて、どこへ行かれたのですか？

引間：方正の部落へ戻った。元々いた学校にはもう誰もいなくて。部落の一番西の角に中川村の人が 17、8 人寝て生きていました。そこに辿り着いた。そしたら、向こうも向こうで、「引間さんのような満人の所へ行ったようなヤツは寝るところないぞ」なんて言われた。最初っから。それで、こりゃあダメだと思ったけど、今逃げて来たばかりだから、さあその先考えてなかったから。2 日そこで考えて、また開拓団の方へ戻ろうとなって、2 日しか居なかったです。

それで戻って、大羅密（注：松花江と萬宝山の中間の山の中にあり、不便な場所だが交通には重要な場所）まで行ったら、開拓団から 30 キロもあって、一日じゃ歩けないよね、飯食ってないんだから。それで二日かかって、お袋以外にも何人か一緒でした、誰かが。お袋は大羅密に着く前に、もう歩けないって言って、しゃがみ込んじゃった。見たら、熱が出ててね。その熱が取れないまま、6 月まで寝ていて死んでいった。55 歳でした。

母親の死

大類：お母さんは大羅密で、55 歳で亡くなられたと。お母さんを看取られてから、引間さんはどうされたのですか？ 11 歳くらいで、肉親は誰もいなくなってお一人になられた。

引間：中国人はね、人が死にそうになると、座敷から土間に移して死んでもらう。そこで息を引き取ってもらう。昔からそうらしいんです。お袋が死んで、一人になりました。中国人のオヤジが一人でいた家だったんだけど、お袋が死んだら、一週間で引っ越していなくなった。肉屋だったんです。肉屋っていってもそんな立派なものではなくて、匪賊が通って、歩けなくなった馬を下請けでもらうようなタイプの店です。まだ生きてる馬をね、お前殺せって言われて、横になっている馬を長い包丁でひきさいてね。冷蔵庫がないから、特別なでかい釜があって、何度も煮るんです。煮て煮て煮て、毎日煮ているから腐らない。それを売りに行くの。南に 1 キロくらいの所に部落があって、しょっちゅう売りに行かされました。肉をかついでね、戸別訪問ですよ。現物を見せてどうですかって。中国語がまだ分からないから、お前日本人の子かって言われながら。

大類：「日本鬼子」とか言われたんですか？

引間：そうですね。子ども同士ではよく言われましたが。

大類：そういう生活はどのくらい続きましたか？

引間：7 月に入ったらハルピンの方へ、延寿県通って方正通って珠河県まで歩いて。そこから汽車に乗って、ハルピンへ行きました。珠河県っていうのは今の尚志市です。

大類：何日くらいかかって珠河県に着いたのですか？

引間：方正を出発してから 6 日目に着きました。その時は 30 人くらいいたかな。

大類：そうして、珠河県から引揚げ列車に乗られた？

引間：珠河県からその日に汽車に乗って、なかなか乗れなかったんだけれど待ってて、薄暗くなるころに汽車に乗れて、その日の夜にはハルピンに着きました。何時だか忘れたけど。

大類：引間さんはまだ11、2歳ですよね。誰が引き連れて移動したんですか？

引間：リーダーが宮崎県の人で中村さんという方がいたんです。51歳だったですけどその方がリーダーでした。そもそも私が頼みに行く前に、向こうからぞろぞろと店の前を20人くらいで通ったんですよ。日本人が来たと思って、一緒に連れて行ってくれるかって頼んだのが私なんです。いいよと言われて、牡丹江からハルピンに行く列車に乗った。引き揚げ列車ではないですよ。無蓋車ではなくて、普通の客車ですけど、私は連結のガシャガシャする場所に乗ってました。一緒に乗り込んだのは30人くらいです。他のお客さんは全部中国人でした。当時は工人服なんてまだ流行っていなくて、皆シナ服ですね。胸にボタンじゃなくて紐丸めたみたいなもので止めている服です。ハルピンまではそんなに長い時間じゃなくて、阿城県を通って、４時間くらい乗ったのかな。

大類：既に乗っていた中国人から「乗って来るな」とか言われませんでしたか？

引間：そう言われたことはなかったです。連結の上で怖かった、それだけです。

大類：ハルピンに着いてどこへ行かれたんですか？

引間：ハルピンの駅の広い待合室でかたまって一晩明かして、そんな所にいても邪魔だからね。翌朝、係の人が来て、道外（注：ハルピンの中心地から外れた地）という所まで歩いて、ぞろぞろ移動しました。自動車修理工場跡みたいなところで、避難所みたいなところに一週間入れられて、そこから改めて道裡の沙曼一道街の日本人民会（注：道裡街の国際ホテルにあり、日本人難民収容所の看板がかかっていたという。人民会の主だった人々は八路軍の捕虜になった人たちで解放連盟とも言っていた）に移されました。中国側の手配だったと思いますが、八路軍ではなかった。市の手配だったんじゃないですかね。

国共内戦の中で

大類：1946年6月からの国共内戦、つまり中国共産党軍と国民党軍との内戦が始まるんですが、そんな感じはありましたか？

引間：ありました。私たちは軍事部に入りましたから、もろに影響を受けました。日本人民会はハルピンでは知らない人はいないですよ。道裡の沙曼一道街にあったんです。ハルピンに来る人は皆そこにやっかいになるんです。誰が作ったのでしょうか。

大類：八路軍が東北では勢力をもっていましたよね？

引間：その頃はまだ八路軍は関係なくて、その少し前の話です。

大類：日本人民会は大きな事務所を持っていたのですか？

引間：日本人民会は元ホテルで、ビル一棟そのままです。地方からハルビンに来る日本人は人数が多いから、そこに集めて生活させた場所ですね。私は18号室に泊まっていました。2階に炊事場があって、どこから提供されたのか分からないけれど、食事はありました。覚えていないけど一日2食くらいだったか。高粱のお粥ですね、やっぱり。南満は高粱が多くて、北満はもろこしが多い。街でご飯っていうと高粱なんですね、もろこしでは

なく。田舎に行くともろこしですけど。たいしたおかずもないですよ。みそ汁はありましたね。一回滑って、みそ汁をかぶってしまって。その日はおかずがなくなったですね。

大類：その時に日本人民会には何人くらいいたのですか？

引間：分からないけど、部屋が 21 室ありました。10 人くらいずつ入っていたんじゃないですかね。200 人、そのくらいはいたかな。

大類：そこにはいつ頃までいたのですか？

引間：昭和 21 年の 12 月初めまでいました。それから道外の住み込みの工場へ行きました。日本人がたくさんいました。羊の毛とラクダの毛と 2 種類あって、ふわふわしたやつを梳かして、自分でクルクル回して糸を作る。朝から夜まで。

大類：それは誰に言われてやったんですか？

引間：誰って、自分で食べて行くしかないから、誰に言われたかわからないけど、全員日本人民会にいた人たちです。皆知っている人たちでした。翌 22 年の 5 月頃までいました。

その頃には、「三一五」（注：三・一五事件のこと。1928 年 3 月 15 日、日本共産党系の活動家らが治安維持法などで検挙された事件）とか言って赤旗持って集会があって、集まったりしていました。日本人の中で、です。メーデーって何だ、みたいに初めて参加して、何だか分からないけど旗持って一日歩いて参加すればいいんだくらいですよ。深くは考えてなかった。日本人の大人も子供も参加していました。中国人はいなくて日本人だけです。

大類：その後、八路軍の工場に入られた？

引間：その後です。22 年の 5 月頃までいて、そこが終わってしまって、同じ道外のたいして離れていないところです。浜江駅ってあるんですよ。簡単に言うと北駅と書いて「ベイジャン」って呼ぶんですが。そこの前に八路軍のいわゆる軍事工場があった。それで初めて、八路軍だというのが分かるようになった。全員住み込みです。紡麻工廠と言ってね、麻の縄を作っている工場で、中国人の布靴の底を麻の紐で縫うんですけど、その麻の紐を専門に作る工場です。物が麻になっただけで、その前の工場とまったく同じような仕事でした。日本人の大人が 85 人くらいいました。私は少年班に所属して、男性班・女性班というのもありましたね。

大類：ここでどのくらい過ごされたのですか？

引間：ここにいたのは一冬ですね。昭和 23 年の 5 月いっぱいくらいまでですね。6 月から内戦がひどくなって、蒋介石軍が第ニ松花江を渡って来たみたいな噂が立って。この会社もやばいから牡丹江へ移動しますと言われて、23 年 6 月初めに汽車に乗って牡丹江へ移動しました。

大類：昭和 23 年というと 1948 年ですか。国共内戦が身近になって来たのですね。

引間：そうですね。最初は蒋介石軍の威勢が良かったんですよね。だいぶ苦しんでいたみたいですけど、第ニ松花江を渡れば一気にハルピンまで来ますからね。それで牡丹江へ逃げたのでしょうね。八路軍の工場でしたから。

大類：蒋介石軍が北上してきたのですね。その状況のなか、牡丹江ではどのくらい過ごされたのですか？

引間：昭和 23 年の 6 月から、24 年の 8 月まででですね。牡丹江では同じく麻の紐を編んでいました。

大類：国共内戦で、八路軍が徐々に盛り返した？

引間：その頃には好転して、蒋介石軍がどんどん台湾へ逃げたから。工場のなかに中国全土の地図が貼ってあって、優勢になったところに紅い三角の折り紙の旗を刺すんですよ、いっぱい。工場の食堂だったか、壁に貼ってね。解放された都市に紅い旗を立てる。だんだん南の方まで紅くなってきて、最後は海南島なんて言ってね、そんな感じでした。

人民政府の成立へ

大類：そこにいた日本人たちは、国共内戦で国民党が敗北して、共産党が勝利しつつあるというのは分かったのですね？

引間：共産党が勝利しつつあるのは分かりました。

大類：日本にいた中国人のなかには国民党が勝つだろうと思って驚いていた人もいたようですが、日本人としてはどんな感じだったのですか？　引間さんはまだ少年でしたけれど。

引間：私個人としてはその日、その週を生きるのに精一杯ですよ。一カ月に 126 万くらいもらっていた。円だか元だか忘れたけど（笑）。お札でね。大金じゃないですよ。お札持って市場へ行ってラーメン一杯食べたらなくなってしまう。お金の価値がなかった。とにかく大きな風呂敷持っていかないと給料もらえないんだから。一週間じゃなくて一カ月だったかな？

大類：なるほど。そうして、牡丹江から今度は瀋陽に移られますね。これは八路軍から言われたのですか？

引間：そうです。もう蒋介石軍を破って勝ったから、軍事工場もいらないわけです。だから、日本人全部が余剰人員になってしまった。それで、いくらか引き揚げという話もからんで、どうして瀋陽だったか分からないけれど、瀋陽まで送られた。そして、瀋陽の東北人民政府民生部招待所というところに入れられました。

大類：皆さんご存知の様に、中国共産党が最初に支配権を握ったのは、中国の東北部、旧満洲ですね。瀋陽の招待所で、1949 年の 8 月まで過ごされたのですね。何人くらいいましたか？

引間：そうですねえ、私たち牡丹江組は第四廠（工場）なんですよ。ハルピンが第一廠で、被服工場の日本人たちです。一日二日違いで瀋陽で合流しました。日本人が百何十人かはいましたよ。少年は少ないですけど、大人がです。そうですね、100 人ではきかないですね。招待所は 3 階建てのビルでした。北五馬路の民族街の角にあってね。そこに来て 10 日くらいで、ばらけましたね（注：分散の意）。まだ内地（日本）へ帰れないから、再就職ですよね。ほとんどの人が鶴岡炭鉱へ行きました。八路軍に働くように言われてね。私も行くつもりだったんだけど、少年だから一人じゃ就職できなくてね、大人の誰かと組まないと。弟とかという名目でね。「誰でもいいよ、引間」、なんて言われて。私は仕方なくてアライさんという人に仕方なく付いたんです。そしたらアライさんは胸が悪くて、

ダメだと言われて残留になって、私は行けなかったんです。後の人は全部行って、いなくなってしまった。残ったのは数人だけです。

大類：引間さんは取り残されて、どうされたのですか？

引間：取り残されて、まだ若かったですから、学校があるから学校へ行けと言われた。もう 4 年半も働いていたんですよ。4 年半働いて、16 歳にもなって、小学校 5 年生ですよ（笑）。学校だから朝早くて、北五馬路から南八馬路までまっすぐなんですけど 1 時間かかるんです。小さい子も一緒だから。炊事場の人が子供のために早く起きないといけないから、寄宿舎に入るようにって、誰かが頼んだんです。それで寄宿舎に入ることになった。入ったところに、今 、前に座っている新宅さんと出会ったんです。それが昭和 24 年 11 月頃ですかね、寄宿舎に入ったのが。それまでは歩いて通っていたから。

大類：同じ年の 1949 年 10 月 1 日に、中国の人民政府が成立しました。それはどういう形でお聞きになりましたか？　天安門広場で毛沢東が宣言したことが、リアルタイムで耳に入りましたか？

引間：それはもう既にそういう教育だったから。小学校においても、自然にそういう教育でしたから。紅い旗持ってね、その時はみんなで万歳しましたね。

大類：そうですか。ここで、お話に出た新宅さんにも少しお話を伺いましょうか。新宅さん、今引間さんから、瀋陽の小学校に入られて、寄宿舎で新宅さんと出会われたというお話を伺いました。新宅さんの家は開拓民ではなかったと思いますが、寄宿舎に来られた経緯を簡単にお話いただけますか？　こちらの引間さんの横に座っていただいて。

新宅久夫さんの証言

新宅：私は昭和 10 年の早生まれで、9 年遅生まれの引間さんと学年は一緒なんです。敗戦のときに私はハルピンにいて、親父は満鉄病院に勤めていました。1946 年 4 月 15 日にソ連軍が一斉に引き上げて、交代で八路軍が入って来た。しばらく内戦があって、満洲に 100 万人くらいいた日本人を帰そうとなって、1946 年の 6、7 月から始まって 10 カ月足らずで日本人は帰ったのですが、3 万人くらいが残された。鉄道関係の技術者とか、病院の関係者とか、飛行機のパイロットとか、発電所の技術者とか、各分野の技術者ですね、日本人がいないと何も動かせない時代でしたから。留用ということで残された。

引間君の話にもありましたが、第二松花江の近くまで国民党の軍隊が来ていて、留用になってすぐ、慌てて汽車に乗れと言われて、貨車にレントゲン機材とか設備を積み込んで、日本人も何家族か乗せられて、ハルピンから一週間かかって着いたのが蓮江口だった。今回の方正の会会報「星火方正」（30 号）の表紙に蓮江口のトーチカの写真があって、懐かしかったです。蓮江口から佳木斯はすぐなのですが、松花江の橋を日本軍が撤退するときに爆破していて、歩いて渡った。うちは父母と兄弟 5 人いて、落ちてる橋の上に板をおいて下見たらぞっとするような所を渡りました。

佳木斯は大きな街で、日本人が集められていましたが、マイナス 40 度にもなる冬を 3 年過ごしました。鶴岡炭鉱の石炭は非常に良くて、簡単に火が点いた。瀋陽には立派な病院がいくつかあって、父は瀋陽が解放された 1948 年 11 月に、家族は半年遅れて 1949 年 5 月に行きました。

瀋陽では、日本人の子どもが大勢いて、日本人の学校を作ろうという話になった。経験のある人や学歴のある人を「にわか先生」にして始めた。瀋陽だけではなくて、撫順とかあちこちに日本人技術者がいましたから、子供を一カ所に集めたのですね。私が先で、半年くらいたって、引間さんが入って来ました。

会場からの質問

大類：それでは、この辺で会場から質問があればいかがでしょうか？

質問：中国語やロシア語を勉強している者です。中野区の仲間と訪中しましたが、旧満洲や撫順炭鉱にも行きました。詳しいことが分かる年代ではなく、ソ連軍が入って来て、その後で国民党軍が入って来て、その後で毛沢東軍が入って来た、そんな感じですか？

新宅：ハルピンは、非常に大きな街で関東軍が治安維持のために 8 月 20 日頃まで残っていたのですが、関東軍が武装解除して、ソ連の戦車隊が一斉に入って来た。翌年の 4 月 15 日に、ソ連軍は一斉に引き上げました。八路軍と交代して。ですから、国民党軍はハルピンの近くまでは来ましたが、一回も入って来られなかったという状態でした。しかし、国民党の特務機関や旧満洲国国軍もいるし、治安が悪い時期があった。そんな中に、地方から日本人が逃げ込んで集まって来るので、日本人の自治会みたいなものが出来て、難民のお世話をしたりしていた。ハルピンは複雑で、東北全体を統括しようと、延安から李兆鱗という偉い人が来たのですが混乱のなかで暗殺されて、今でも名前の付いた兆鱗公園があります。

質問：終戦前の話ですが、旧満洲には通貨が 1 種類でしたか、それとも日本人用と中国人用と 2 種類ありましたか？

新宅：満洲国の通貨が一般的でした。日本円とか朝鮮銀行の紙幣は、直接は使えず、銀行で満洲国の通貨に換えて使っていました。お札を印刷する技術者も残されて、私の友人の父親が、佳木斯で人民元のお札を印刷していました。引間さんが話したようにインフレになり、満洲国紙幣は紙屑同然になり、ロシアの軍票と日本円は割と値打ちがありました。紙幣は紙屑になって、物々交換になりましたね。瀋陽には貨幣博物館がありますが、私が今も持っている紙幣は、上には中国人民元と書いてあるのに年代は中華民国になっていて、博物館にもないようなお宝です（笑）。

大類：最後になりますが、引間さんは 1953 年に引揚げ船に乗って帰国されましたが、引揚げ船が出るという話はどこからお聞きになりましたか？

引間：東北人民政府民生部からです。招待所は後に休養所にもなったのですが、瀋陽の民主新聞社（注：瀋陽市にあった日本語新聞で日本人居留民向けの週刊新聞。正式名は東北民主新聞と言った）と関係があって、ニュースはすぐに招待所に伝わるようになっていました。そうして知りました。この話が出たのは昭和 27（1952）年の頃ですね。朝鮮戦争が始まった頃はまだ引揚げの話はなかったんです。1953 年 3 月の第一次興安丸で、秦皇島から出航しました。

大類：新宅さんも同じ船ですか？

新宅：私は別で、高砂丸で第三次、天津からでした。日本に着く港はすべて舞鶴でしたが。

大類：わかりました。引間さんは 1953 年 3 月の第一次興安丸で帰られたと。定員 700 名くらいの船なのに大勢乗船していたようですね。

引間：2008 人乗っていました。タタミ 2 畳で 3 人です。定員の 3 倍近くですね。未成年者は少なかったです。

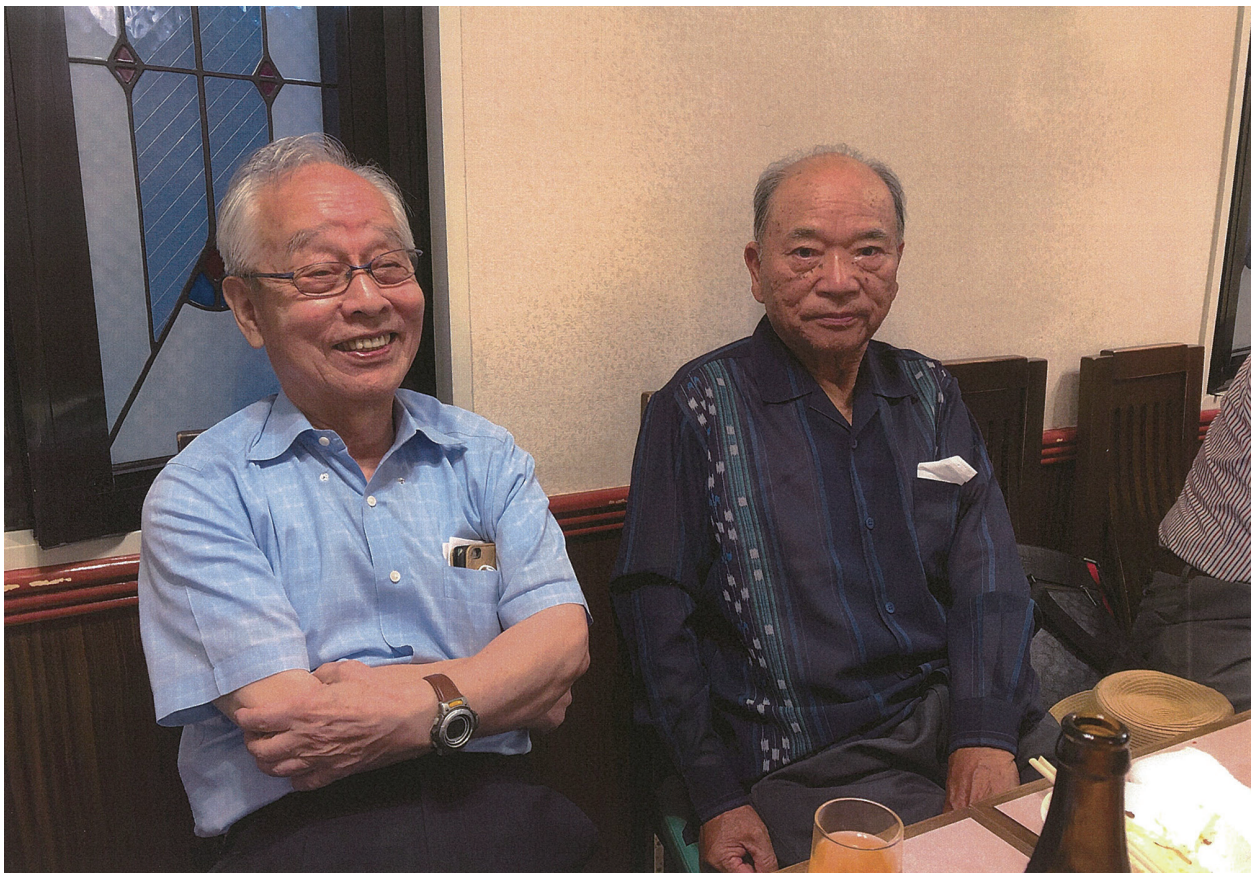
大類：舞鶴に着いた時のご感想はいかがでしたか？

引間:良かったね～！（笑）日本という国が緑に見えたの。中国は世の中全部が赤茶けているんですよ。一週間経ってこんな緑の所に来たという、そこがまったく違った。
舞鶴に着いて、お風呂の前の天井に誰かがいて、人間にＤＴＴをぶっかけるんですね。その後風呂で洗って、舞鶴には 3 日いました。そうして臨時列車で秩父へ帰りました。秩父に帰ってみたら、死んだと思っていた長兄が生きていたんです。長兄はシベリアへ抑留されて、昭和 22 年に引揚げていた。

大類：新宅さんは天津から引揚げたのですね？

新宅：同じく 1953 年ですね。引間さんに比べたら苦労はしていませんが、帰って来た感激はありました。

大類：もっといろいろ聞きたことはありますが時間ですのでこの辺で終わります。今日は長時間にわたって、引間さんありがとうございました（拍手）。また新宅さん、そして会場の皆さん、ありがとうございました。



懇親会での新宅久夫さん（左）と引間さん（右）

「今が最高に幸せだ！」

―後日、改めて引間さんに会う―

大類　善啓

方正の会の後、引間さんから『我的故郷』（私の故郷の意味）という自分で書かれた小冊子が送られてきた。その後、自宅がある我孫子市の天王台に行き、原稿の確認を含めて補足取材を行ったのでご報告したい。

引間さんは日本の敗戦後、多くの日本人たちが鶴岡炭鉱に行ったが、前に記したように鶴岡に行かず、学校へ行った。小学校５年生である。引間さんは 16 歳で、同級生の中で最高齢だった。その後、卒業して瀋陽十二中学に入った。ちなみに新宅さんは七中だった。日本人は六人。女子二人、男子は四人だった。中国人は 2000 人いたという。教室が少なく、午前と午後の二部制だったという。

二年で中退して帰国。秩父一中に入ったが、長兄から日本語をちゃんと覚えないと就職もできないから日本語を勉強しろ、と強く言われたという。中学を卒業後、浦和の職業訓練校の板金課に入り、卒業後赤羽のスチールサッシ工場に就職するも、社長から「赤だと」と言われ、馘になってしまう。引間さんに言わせると、溶接を間違えて火を出して失敗したことに社長から難くせをつけられ、辞めさせられたと言う。

引間さんのように「中国帰り」の人は、よく「赤だ」と言われ、就職先の会社に警察の人が現れて馘になってしまったという話は前から聞いたこともある。引間さんもその例ではないかと思ってしまう。

その後、厨房の仕事についた後、同僚だった一人を誘い、1959（昭和 34）年、ブリキ店として独立した。帰国して６年後のことである。その後はずっと板金工業の世界で生き、多くの住宅建設の仕事をした。今ではブリキ店を息子に任せ、家庭では曾孫もいて、昼間は畑仕事を楽しみ、今日まで幸せに暮らしている。

「生涯ずっと孤児だった俺が家族を持ち、こうやって幸せに暮らしている。最高だ。もう 86（歳）、いつ死んでもいい（笑）」と語る引間さんだった。

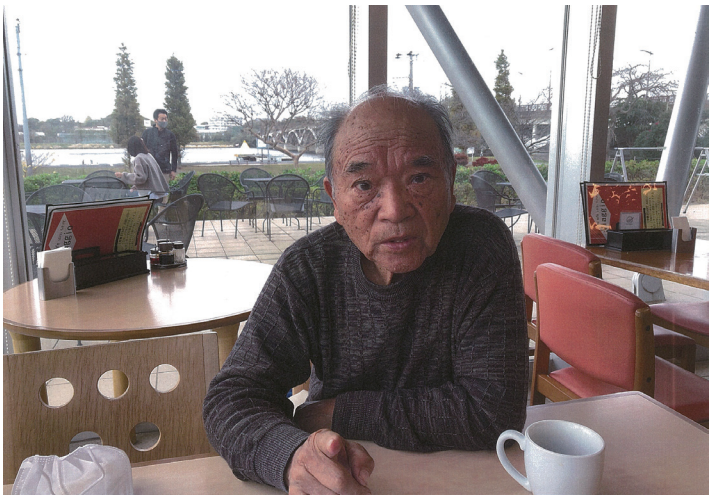


写真　11 月 20 日、我孫子市天王台での引間さん

初めての肉声
驚き、怒り、未来への危惧

星野　郁夫

１．満州逃避行者の肉声を初めて耳に

私は、コロナ禍の中で、満洲から帰られた人の肉声を初めて聞いた。７月 26 日、「方正の会」が企画した「旧満州での体験を聞く会」に参加してのことである。昨年は、丹羽宇一郎さんの貴重なご講演をお聞きした。今年は、満洲から生命からがら逃げ帰った「引間政好」さんの肉声をお聞きし、交流するというものであった。

実はこれまでも満洲、満洲と幾度となく耳にもし、口にもしたことはあるが満洲からの帰国者のお話は初めてのことなのである。それだけに期待は大きかった。

最初は、「方正の会」の大類理事長のインタビューによる引間さんの時を刻んだ満洲体験が語られたが、会場の後方にいたため、正直に言うとわかりにくかった。それでも夕食をとりながらの交流会で、引間さんをじかに見ることが出来、大変充実した時を過ごさせていただいたと、感謝している。私が 79 歳になった今、もう二度と体験できないかも知れないからである。

第二次世界大戦（太平洋戦争）が終わってから今年で７５年が経ち、引間さんも私も、時というレールの上を乗っており、とくに私の戦後の記憶は少しずつ薄らいで行くことは確かだ。それでも引間さんを見て、赤銅色の皮膚、引きしまった表情から強烈なオーラが発せられるのを見て、改めて驚かされた。このオーラは生命力にあふれ、たくましさがある。それ故に今日があるのだと思いながら、妙に安心もした。あの言うに言われぬ苦難を生き抜かれたことに対する、尊敬と安心が同時に私の心を支配したからである。

間違いなく８月９日、ソビエトが日本との開戦に踏み切った後の出来事に、引間さんが当時を思い出すように語った。「実際にソ連の参戦を聞いたのは、もう負けた後のことです」。二枚羽根の飛行機が爆弾を落とし、銃で打たれた人が、死んだまま横たわっている。

朝になると、跡形もなく亡くなっている、と言うのだ。なぜかというと、狼が死体を食べてしまっているからなのだと云う。引間さんは、当時 11 歳。戦乱といっても、満洲に駐屯していたはずの関東軍は、敗戦を知る前に逃亡するかのように南方方面に移動してしまっている。

家族がバラバラになりながら、ハルピンに着けばなんとか日本に帰れると思い、430 キの道のりを、とにかく歩き続けたようだ。

中国人の襲撃をおそれ、足手まといになる子どもは、首を絞めたり、川に流したりしてほとんど殺した。満妻（マンツマ）になった人もいる。母は 55 歳の時に亡くなった。その途中で国共内戦も中国建国も経験している。

現代でいえば、小学校 6 年生ぐらいの年頃で、現実の生活感覚からして正直、実感はわかないだろう。430 キロといえばマラソンコースを 10 回歩いたことになり、それこそ誰も真似が出来ないことだからである。そこで私は、今は亡き大正 15 年生まれの兄と比較してみ

た。

群馬の尾瀬の麓に生まれた兄は、足尾銅山の関係のある山地に、出稼ぎに出た父母のもとへ、夏休みに祖父に連れられて会いに行ったと聞いたことがある。猪や熊が出没する山道を通るわけだが、40〜50 キロぐらいの道のりではなかったかと想像する。兄はともかく引間少年の逃避行は、言語を絶する困難さであったとことは言うまでもない。

引間少年は、昭和 20（1945）年〜28（1953）年までの 9 年間をもって、ともかくも苦難の逃避行を終わった。当時の状況を知る由もないが、「ほんとうによく帰って来られましたね」と云う以外、他に言葉はない。

２．戦後は終わらない

国際法の世界では、昭和 26（1951）年の米国との片面講和、日米安保条約の締結で戦後処理が済んだと言われているが、果たしてそうであろうか。今でも朝鮮の北との講和は未だに成立せず、国交も樹立していない。ロシアとの国境線の画定も未処理のままだ。

1995 年、戦後 50 年ということで出されたいわゆる「村山談話」で日本が引き起こした第二次世界大戦敗北までの侵略戦争の惨禍、苦痛に対するお詫びはあったものの、心がほとんど通じていない。それもそのはずだ。2015 年安倍総理は、村山談話を薄めるための新しい談話を出した。国の政治家はもとより国民の多くは、心の底からお詫びしていないからである。

歴史を遡れば、戦争直後の中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国の成立、その後の米国の世界戦略の劇的な転換も影響していることは確かだ。日本も戦後の復興で 10 年余を過ぎたころ、1956（昭和 31）年の経済白書で「もはや戦後ではない」と宣言するまでになった。良くも悪くも戦争を過去のものとしようとしたのである。

だが、しかしである。戦後 75 年たった今年の 8 月 12 日、戦後処理問題の解決を求める 4 つの関係団体が国会の近くに集まった。空襲被害者、沖縄戦民間被害者、韓国・朝鮮元 BC 級戦犯者。未だ戦争の被害者たちが、救済と名誉回復を求めて苦悩している現実を忘れてはならない。それ以上に朝鮮、中国を含めた人々に対するヘイト・スピーチは、益々激しくなっていることも大いに気になるだけでなく歴史の逆流が、民衆レベルで進んでいることを大きな重しと感ずるからである。

未だに日本人も外国人も、戦争で尊い生命を失った人々に対する公立の墓地は、定まっていない。戦争犯罪人を美化する靖国神社に参拝する与野党の国会議員が、増えていることも見逃すことはできない。

３．新な戦前がはじまった

中国のハルピン市の郊外に、日本の 5 千人近い人たちが眠る「日本人公墓」のことを、方正友好交流の会のリーフレットが知らせている。引間少年と違って故国に帰れず、現地で息が絶え、尊い命を失った人たちの墓である。当時、現地の中国人には、日本人に対する憎悪と怒りが渦巻いていたに違いない。このような極めて困難な状況下で、最終的には当時の周恩来首相の温かく冷静な決断で公墓の建立に至ったようだ。

周首相は、現地に残留した日本人の願い出に、「あなた方も日本軍国主義の犠牲者である」

と思い、公墓建立を決めたという。平和・友好は、他者（他国）に思いを致すことに他ならない。ナショリズムを超えるインターナショナリズム（国際主義）が希薄に見える今は、当時の周首相の態度と言葉は、決して忘れてはならない言葉である。核をふくんだ軍拡に血道を上げる世界の指導者が是非とも学んでほしい焦眉の課題であるからだ。

私はとくに、未来への危惧について、触れておきたい。今米国は、大統領選の渦中にある。その結果如何を問わず世界は対立と分裂が拡大の一途をたどる。対立は極限まで行く危険性を増している。

危険性は、米国内にとどまらない。対立は地球の隅々だけでなく、宇宙にも拡大している。世界は、軍縮ではなく核を含めた軍拡が進み、地球環境の悪化による人類絶滅への危険な流れは止まらない。まさに人類が戦争か平和か、ミサイルか福祉か、富の巨大資本への集中か再分配か、などの二極分解への流れである。

日本は日米基軸を掲げる安倍政権から菅政権へと権力が移動した。菅政権は言葉の軽さは引き継いだが、インテリコンプレックスの現首相に、哲学はない。唯一よりどころとなるのは、八百屋のように表看板で安売り（携帯電話）を掲げ、裏では権力操作（マキアベリズム）でマスコミや教育を支配しようとする姑息な手法だ。

学術会議の委員選任は、マキアベリズムの見本と見てさしつかえない。外交の場で、「価値感を共にする」諸国の連携を説いたとしても、所詮、世界のリーダーからはフィロソヒーなき、レベルの低い言葉遊びと見られるのは明白だ。まずはこの姿勢、手法では短命に終わると断じてさしつかえないであろう。

実は、最も危険と思われるのは、一層の軍国主義への傾斜である。2015 年の安保法制の改悪で、日本は世界のどこでもいつでも、戦争ができる体制に近づいた。憲法を変えなくても、既に戦争のできる日本になってしまっていることは言うまでもない。

それを典型的に示しているのはイージスアショアの配備を断念したものの、「敵基地先制攻撃」を改めて言いだしたことだ。これはつきつめていえば、真珠湾攻撃と同質だからである。そこには、防衛と攻撃の区別はなく、防衛を口実に侵略を繰り返したあげくの果てに、敗戦に至ったいつか来た道がある。そのことは、明治の日露戦争から第二次世界大戦敗北までの一連の流れと経験からして、極めて現実的なことであることを理解せねばならない。

もうすでに憲法という「タガ」は外れたに等しい。それに、日本も世界の政治家も劣化が進んでいる。加えてここで立憲民主党や共産党などの野党に、更なる奮起を期待したい。

二度と引間少年のような犠牲者を出さないために。そして戦後処理を放ったらかしにしたまま進む新たな戦前の逆流を止めるためにも。

（ほしの・いくお:1941 年生まれ。埼玉県鴻巣市在住。元社民党全国連合常任幹事、社会文化会館館長。地域で自治会活動を通して自治分権、福祉活動に携わる。現在、現代史研究会、古代史研究会に参加。「村山談話を継承発展させる会」の元代表）

高橋章さんとの出会い

本誌　大類　善啓

2020 年 7 月 26 日(日)の「方正の会」総会と、その後の「引間政好さんの体験を聞く会」には、コロナ禍の中、30 人を超える人たちが集まってくれた、その中に、高橋章さんがいらした。初対面である。高橋さんは引間さんとは旧満洲の小学時代の同級生だという。また、金丸千尋さんとも知り合いでもあり、また金丸夫人のキヌ子さんとは小学生時代の同窓生だと自己紹介された。

その後の懇親会では、中川村開拓団の団長の行動を糾弾する言葉も出た。その折り、「あの団長への恨みがあり、死ぬわけにいかないと今日まで生きてきたんだ」と発言もされ、高橋さんの「満州体験」の強い思いが伝わった。

後日、高橋さんにも体験の一端でも書いていただければと申し上げたところ、パソコンも壊れ、原稿を書くのは難しいからと『元満州中川村開拓団―私の敗戦回顧録―』を送ってくださった。

それは４章から成り立っている。その構成は、≪１、生い立ちと　何故満州に渡ったか　２、中川村開拓団へ　敗戦崩壊までの二年　３、敗戦　八月十五日　そして、４、中川村開拓団逃避行　私見≫であり、その最後の＜私見＞は、≪元中川村開拓団の慰霊碑は何故二つあるのか≫という文章である

実は、満蒙開拓平和記念館館長の寺沢秀文さんが書き続けている≪満蒙開拓つれづれ草≫にかつて、秩父になぜ二つの慰霊碑があるのか不可解だと記されていたのを思い起こし、改めてその項を読み、高橋さんの言葉を寺沢さんに伝えたところ、「そうですか。やっと了解できました」旨のメールの返信をいただいた。

その後、中川村開拓団の慰霊碑を表紙写真にするべく秩父市まで出向いて、高橋さんの車で案内していただき、その招魂碑を写真に収めた。またその後、堀口団長らが建てた拓霊芳魂塔も見た。

「この頃はこちらの方への参拝者が多いのだ」と高橋さんが話された。確かに、市内の中心地に近い清雲寺の境内にあり（当初は慈眼寺に建てられたが、今は清雲寺にある。この経緯は高橋さん自身の手記、『なぜ二つの慰霊碑があるのか』を読んでいただきたい)、また枝垂れ桜が咲く場所でもあり、花見のついでに出かけてこの塔を見る人も多いだろうということはわかる。その多くの人たちは、この塔が「開拓民」を置き去りにした張本人が率先して建てたということを今では知らない人が多いだろう。この塔には国策で中国へ「開拓した」反省もなく、多くの人たちを送り出した旗振り役で、戦犯とされた加藤完治の言葉が記されている。これには本当に驚いた。

戦後も「満州国」や「満蒙開拓」を肯定し、反省もない加藤完治がおめおめと大手を振って生きてきたところに、日本人の反省の無さ、戦後の日本の戦争についての反省がこの程度だったというか、本心からの反省がないことの表われだと言っていいだろう。

堀口団長は多くの人たちから疎んじられ、つまはじきにされたという。それは当然の報いだったろう、と思う。それにしても、その反省の無さは、常軌を逸していると思うのは、私が戦後育ち故だろうか。

ついでに言えば、昭和天皇の敗戦を告げる、いわゆる「玉音放送」を聴いた加藤完治は、別室に行き号泣したという。周囲はてっきり自殺するのかと思ったようだが、自殺もせず、戦犯に指定された。しかし、1950（昭和 25）年の朝鮮戦争を契機に、それまでの流れを否定するような動きに呼応して、戦争協力者の解除も始まり、加藤も再び公に活動した。

高橋さんが糾弾する堀口団長らが建立した塔には、＜満洲国の理想＞や＜五族協和＞などが

肯定的に記されている。高橋さんにこの経緯について聞けば、当時まだ帰国していなかったので、詳細はご存じではない。それにしてもひどい話だ。

巻末に掲載した拙文『伊丹万作が遺した言葉』は、このような反省なき日本人への批判を、自己の体験に根差して書いた伊丹の言葉を多くの人たちに知ってほしいと掲載した。ぜひお読みいただきたい。

そんな折り、自分が毎日使っている手帳の最後の頁に、朝日新聞のコラム「天声人語」(2019・4・25) のコピーが張ってあった。これは大事だと張り付けたのだった。それは、こんな内容だ。

「敗戦の年の夏のことを、作家の坂口安吾が苦々しく書いている。『国民は泣いて、ほかならぬ陛下の命令だから、忍びがたいけれども忍んで負けよう、と言う。嘘をつけ！　嘘をつけ！』われら国民は戦争をやめたくて仕方がなかったではないかと」(「続堕落論」)

天声人語子は書く。「日本人のそんな振る舞いを安吾は、『歴史的大欺瞞』と呼んだ。死にたくない。戦争が終わってほしいと切に欲していたのに、自分たちでは何も言えず、権威の行動と価値観に身をゆだねる。自らを欺く行為に等しいと、安吾には映った」

そしてこうも書いている。「天皇が元首だった当時とは違い、象徴と位置づけられる現代である。それでも似たような精神構造をどこかで引きずってはいないだろうか。(中略)

世襲に由来する権威を何となくありがたがり、ときに、よりどころにする。そんな姿勢を少しずつ変えていく時期が、来ているのではないか。」

改めて読んでも、なかなかよくできた文章だと思う。

なお次頁には。朝日新聞記者の大久保真紀さんが書いた高橋さんの記事があるので転載した。大久保さんは「方正の会」が創立した会にも取材に見えた方であり、先日は中野ポレポレで『日本人の忘れもの　フィリピンと中国の残留婦人』の上映後のトークイベントに監督の小原浩靖さんと共に参加され、久しぶりにお会いした。

上写真：犠牲者名簿碑に立つ高橋さん。名簿碑には高橋さんの父親、次姉の名前、また引間さんの父親、次姉の名前もある。

満蒙開拓団 忘れてはならぬ記憶

戦後75年

戦争体験者の証言

慰霊碑に刻まれた父と姉の名前を指さす高橋章さん＝6月、埼玉県秩父市、大久保真紀撮影

75年前の夏のことは、いまでもはっきりと覚えている。満蒙開拓団として入植した中国東北部（旧満州）で、現地の中国人に襲われ、命からがら逃げ惑った。埼玉県秩父市の高橋章さん(85)は、自分たち開拓団は被害者だが、加害者でもあったことを忘れてはならないと思う。

1943年、8歳の時に父母ときょうだいの家族7人で中川村（現秩父市）から開拓団として中国東北部に渡った。「開拓」とは名ばかりで、入植したのは現地の中国人が何代にもわたり耕し、家族を養ってきた土地だった。開拓団員たちはそうした中国人を「苦力（クーリー）」と呼んで働かせていた。

父はうちの苦力（クーリー）の許さんをたたかなかった。だからか、旧正月は許さんの家に呼ばれギョーザを食べた。

45年7月、18歳から45歳の男性が召集された。父も応召し、二度と帰って来なかった。旧満州の部隊の所属になり、シベリア抑留に向かう列車の中で死亡したと戦後、聞いた。

8月に入り、苦力の雰囲気が変わった。畑に出てこなくなり、馬を返しにこなくなった。ソ連軍の侵攻を知り、日本の敗戦を中国人は予感していたと後に知った。そして、同月15日。苦力が鎌を手に村を襲ってきた。母親ら5人と逃げ出したが、約450人いた開拓団員のうち46人がこの日に死亡したと聞いた。

翌16日。開拓団員が一団となって逃げるなか、途中

中国人の家に火「殺し殺され、心がまひ」

の中国人集落に偵察に行った警察署長が撃たれ、夜を徹しての銃撃戦となった。10歳の高橋さんは200発の弾をもち、14歳の少年と組んで銃撃に参加した。

開拓団員らは中国人の家に火をつけ、逃げ出す黒い影を撃った。夜が明けてみると、死体はほとんどが女性と子どもだった。焼け跡から中国人の老夫婦が手を合わせて命乞いをしながら出てきた。だれかが「殺してしまえ」と叫んだ。年配の男性がおじいさんの首に刀を振り下ろした。おばあさんは女性たちにやりで代わる代わる腹を突かれた。

みんな気がおかしくなっていた。殺したり殺されたり、心がまひしていた。

歩き続けた。湿地帯に入ったところで、前後から弾が飛んで来て、身動きがとれなくなった。「病人、歩けない人、5歳以下の子どもは全員処分せよ」という団長の命令が伝えられた。

「おれの人生はこれで終わりか」。そう思ったとき、母が2歳の末弟の首を手ぬぐいで絞めて殺し、5歳の妹を川に放り投げた。鬼となった母の目はつり上がっていた。だが、妹は水面まで届かず、岸の草につかまってはい上がってきた。

母はほうけたようになった。我が子を手にかける母親が大勢いた。狂気の沙汰としかいいようがない。

姉は、5日後突然倒れて力尽きた。

逃避行の生き地獄と言える状況は、日本の植民地支配の犠牲となった現地中国人の恨みや憎しみの矛先が、敗戦をきっかけに国と（旧満州で独裁的権限をふるっていた日本陸軍部隊の）関東軍に見捨てられた開拓団の女性や子どもに向けられた結果だ。

9月3日、ソ連軍に拘束され、敗戦を知った。収容所に入ったが、食べるものはなく、8歳の弟と妹を中国人に預けた。

高橋さんは八路軍（中国共産党軍）に加わり、58年に帰国。都内でトラックやタクシーの運転手をした。母は49年、日本に引き揚げ、93歳で亡くなるまで仏壇に手を合わせ続けた。高橋さんは最近の憲法9条を変えようという動きに危機感を覚え、あったことを話さなくてはと心に決めている。

戦争が終わっても一般人の私たちは戦い続けた。戦争とはどういうものかを伝えたい。日本が二度と戦争をしないためにはどうすればいいのか。お上の言うことをうのみにするのは危険だ。一人ひとりがしっかりと考えないといけない。

（編集委員・大久保真紀）

◇

「戦争体験者の証言」は毎月、中旬をめどに掲載していきます。

高橋さん（右端）一家の写真。祖母（左から2番目）を除く7人で中国に渡った＝本人提供

満蒙開拓団

1931年に関東軍が満州事変を起こし、翌32年中国東北部（旧満州）に「満州国」が建国された。日本政府は農業移民政策として「満蒙開拓」を展開、20年で100万戸を移住させる計画を立てた。45年8月9日にソ連が参戦。頼りの関東軍は一斉に南下し、開拓団はソ連国境に置き去りにされた。ソ連軍や中国人らに襲撃され、「集団自決」などもあり、逃避行は悲惨を極めた。その後の難民生活も飢えや寒さで死亡する人が後を絶たず、その中で中国残留婦人や残留日本人孤児が生まれた。

元中川村開拓団の慰霊碑は何故二つあるのか

高橋　章

元中川村開拓団犠牲者の慰霊碑が二つもある訳は、元団長堀口辰三郎氏の個人的な自己弁護にあります。

多くの開拓団を犠牲にした自分の行為を隠蔽し、正当化するため、札所十三番「慈眼寺」に二つ目の慰霊塔を建立したのだ。

敗戦時に多くの犠牲者を出した原因のすべてを、堀口団長個人の責任に帰するつもりは毛頭ない。だが団長には、団員の生命の安全を守り団員を無事に避難させ、祖国へ連れて帰るという考えが少しもみられなかった。

開拓団を送出した元村の中川村には一九五五年、村から送り出し、犠牲になった団員の霊を慰めるため、「昭和三〇年」元村武州日野に建立された。

元中川村は、貧困のために経済復興支援の指定村となり、国からの復興支援を得るためには開拓団を組織することが条件となった。村人や近隣の市町村から総勢六百七人を誘致し、帰国できたのは半数にも満たない人数だった。しかし昭和二十一年と二十二年に帰国できたのは二十人にも満たない幸運な人達だった。団長はその中の一人で、大部分の人は大陸の奥地へ残されたままだった。方正の難民収容所で、団員は団長の約束を信じて死と隣り合わせの生活をしながら救援を待っていた。

埼玉県庁と村では、連れて行った団員を置いて妾と二人で帰った団長を非難した。中川村で建立した満州開拓慰霊碑の建立にも、団長は疎外された。

敗戦時における団長の行為は、犯罪行為と断言できる行動指揮ぶりだった。団長は自分の過去の行為を隠蔽し、正当化するために、終戦直前に軍に召集され、終戦時の開拓団で何が起きたか、「現地人の襲撃と団長の行動」の事実を経験していないシベリア帰りの元団員を中心に、１９６１年（昭和三十六）に、札所十三番「慈眼寺」に、二つ目の拓霊芳魂塔を建立した。これはまぎれもなく、終戦時における団長としての自分の行為の偽装で、反省もなく正当化しようとする行為だ。しかも開拓団の組織した戦犯の加藤完治を除幕式に招待したのは、相変わらず戦前と変わらない思想の持主であることを自ら証明した。当時、開拓団の国民小学校の五年生だった自分が体験した、団長の間違った犯罪行為は六回ある。

第一、八月十二日、樺川県知事は中川村開拓団に避難命令を発令した。中川村開拓団団長は、知事の避難命令を無視し、団員にこの命令を伝えなかったばかりか、泰阜村、読書村団員が避難列車への乗車を妨害し、元村へ追い返した。このために十五日、各部落原住民の一斉蜂起に遭い、中川、泰阜、読書、七虎力の四個団は、思いもしない悲惨な逃避行となり、多くの尊い命を失うことになった。

第二、逃走に邪魔な子供を殺そうとした。15 日、団、各部隊が現地人の襲撃に遭い、団の指導者の移住する本部へ、または別方面に避難した。私の家族は裸足で逃げ出し、山を越えて本部の団寺「日進寺」にようやく避難することができた。しばらく休憩している時、ソ連軍の飛行機が来襲し、偵察に来た。団長が本部より駆けつけてソ連軍の爆撃と判

断し、「大人は裏山に避難せよ、子供は寺の中へ入れ」と私を含めて二十人位の子供を寺の中へ閉じ込めて、団長自ら外から門を下し、裏山へ逃げてしまった。団寺日進寺付近に目立った建物はなく、私には団長の意図は直に感じ取れた。敵と戦って死ぬのなら納得するが、現地人の襲撃から命からがら逃げてきたばかりの自分が、最大の味方である団長に殺されるのは納得できない。弱い人を助けるのではなく、足手まといの子供をソ連軍の手をかりて処分し、身軽に逃走しようと考えていたと。

第三は、無差別殺人を容認。十五日の夕方から一晩中歩き、十六日の正午に公心集「長野県読書村」地区に入り、読書村の人達と合流し、四個団で逃避行となり、前進して二時間ぐらい歩いた時に、前方の小高いところに現地人の部落があり、団長と警察署長が馬に乗って偵察に出かけて行き、突然警察署長が乗馬もろとも狙撃され、弾丸が左胸部貫通の重傷を負った。中川の団長は一人で逃げ帰ってきた。署長は読書むらの男性たちにより救出された。村との激しい鉄砲の撃ち合いとなった。私たちにとっては初めての体験する戦闘だった。重傷を負いながらも、署長は前方の部落は高台に位置し、戦闘が長引けば我々が不利であり、犠牲者が多くなると判断して、別に攻撃隊を作り、部落の後方からも攻撃するように指示をだした。中川村の十四歳から十七歳までの約十人と、地元読書村の約十人で部落を迂回し、後方から部落に侵入するため部落の西側に回り、突入する機会を覗っていた。やがて夕日が地平線に沈み、暗闇が迫ってきた。町田忠義さんの証言によると、南側の土塀を乗り越えて、多数の部落住民が逃げ出した。それを見て指揮者（誰か氏名不明）の指示で逃げ出す影を狙い、どんどん撃てと指示され、黒い影を狙い撃ちまくった。相手からの反撃が無くなったので、部落へ侵入し、取っ付きの家に放火し、後方より発砲しながら突入した。不意を突かれた抵抗者の逃走で戦闘は終わった。また夢中で撃ちまくった黒い影は、女性と子供ばかりだった。塀の堀に重なって倒れていた。町田さんは大変な衝撃を受け、昭和二十八年に帰国して、以降は二度と中国には行きたくないと言っていた。団長は見て見ぬふりをして止めなかった。また救命を懇願する老夫婦が、我々の方へ合掌しながら近づいてきたが、無抵抗の老夫婦の、お爺さんを日本刀で首を切り、お婆さんは皆で代わり代わるに槍で度胸試しに突き刺し殺した。つい三日前までは、日満協力、五族協和を声高らかに叫んでいた姿は何処へ。この時の体験を自分達、開拓二世は未だに心の傷として一生背負って行かなければならない。

第四は、不必要だった切り込み。逃避行の四日目、十九日依蘭県の柞木台にて、湿地に入り込み前方と後方から攻撃されて窮地に追い込まれた。この時は「切り込み」を指示し、「五歳以下の子供、病人、妊婦、歩けない人」は殺せと指示をした。このような指示や命令は、団長以外に出す人はいない。

そこここに、異常な今迄に経験したことのない、一生忘れられない風景がくりひろげられた。団長は、シベリア出兵の経験がある在郷軍人を自任したが、戦闘経験のない、小心者の、忠君愛国を叫ぶだけの虚勢を張る、くだらない人だった。必死の思いで我が子の首を絞めた母親の気持ちを思うと、この時の団長命令は許せない。

第五に、大羅密の惨劇、団長の裏切り。二十九日ごろ、方正県の大羅密鎮で団長は、なりふりかまわず本性を現した。飲まず喰わず、森林地帯から人の住む耕作地帯に出ることができた。そこは元鹿児島県開拓団の跡地で、既に日本人開拓民は避難して人影は無く、元住民が放置して行った豚や鶏が畑にはなされていた。

山から出てきた我々は、体力の限界を誰もが感じていた。中川村の十六歳から十八歳の少年達七人はこの状況を見て、畑に遊んでいる豚を撃ち、豚汁を作り、団員にご馳走すれば体力も回復すると相談し、七名が元開拓団の日本人小学校に、町田、三上の両名を見張りに残し、五人で豚撃ちに出かけた。五人が畑の中を二百メートルばかり北東方へ進むのを確認した時に、西方よりソ連兵が馬に乗って学校に近付いてきた。見張りの三上、町田の二人は、学校の中の屋根裏に隠れて、ソ連兵が通り過ぎるのを待って屋根裏から降りて、五人の仲間の方向へ行くソ連兵を見て、仲間に早く知らせねばと焦ったが、知らせる方法がなかった。そのうち偶然に、五人が後ろを振り返り、ソ連兵が一人馬に乗って自分達の方へくるのを発見し、待ち伏せした。

学校の中から見ていた町田さんによると、ソ連兵は五人には気が付かない様子だったが、最初に五人の誰かが一発発射したが当たらずに、次々に単発の銃声はしたが誰も命中はしなかったようだった。そのうちソ連兵の自動小銃の連続音が響き、単発の発射音が止んだ。まだ若い五人は、昭和二十年八月二十九日、人生を終えた。

木林真照十八、福村祐次十七、加藤喜代作三十一、諸　文蔵十六、諸　茂助四十五（諸さんは親子だった）

それを遠くから見ていた、もう一人の朝鮮籍と思われる人がいた。彼は両手を頭の上に高く挙げ、町田、三上の両氏に近づき、「日本は既に負けました。戦争は終わりました。皆さんは町にいるソ連軍に降伏した方が安全ですよ。貴方の開拓団は中川村ですね。団長さんは堀口団長ですね」と驚いたことに全部知っていた。町田、三上の両名は、急ぎ開拓団の後を追いかけて、堀口団長にこの顛末を報告し、朝鮮人からの警告も団長に報告した。この時の団長の態度に、町田さんは大変に驚き、落胆した。団長は戦闘帽を脱ぎ、黒い頭巾を頭にかぶり、「今から俺は団長ではなく坊主だから」といきなり変身した。今までの行動の一切の責任から逃れようとした。団長としても、人間としても絶対許すことの出来ない行為だ。今まで一体何だったのだ。

六つ目も絶対に、許せない裏切り行為だ。九月三日にソ連軍に捕まり、方正伊漢通の難民収容所に収容された。収容所に管理者は居なかった。九月も中旬になると霜が降るようになり、食糧の配給もなく、衣服も八月十五日に逃げ出した儘の半袖シャツ一枚で、到底満州の冬を越すことはできない。今を生きるのも限界で、明日の朝を迎えることができるか、誰もが生死のさかいを不安と絶望の中を生きていた。九月の半ばのある日、堀口団長が、中川の団員全員を集め「この儘では越冬ができない。日本にも帰れないので、私が救援隊を呼んでくる。」従って救援資金が必要だ。「皆さんの持ち金を出して貰いたい」と。これから先、助かりたければ有り金の全部出してくれ、という意味だった。

或る人は自分の娘を生かすために、中国人に譲った（売った）金まで団長に出した。そして団長は妻子を残して姿を消し、二度と団員の所には戻って来なかった。昭和二十一年、団長は団員を放置して、早々とお妾さんと二人で秩父へ帰ってきた。

後で訳を聞くと、ソ連軍に連行されたとの事だが、二十一年に帰ったと言うことは早くに釈放されたと言うことだ。だとすると如何にして団員の救出の手立てをしなかったのか。彼はその事に対しては一切の弁明をしていない。いまだ皆さんから集めた救援資金についても、一切の説明もなかった。

昭和三十年に中川村の本村に、開拓殉難碑が建立されてから六年後に公職追放された戦

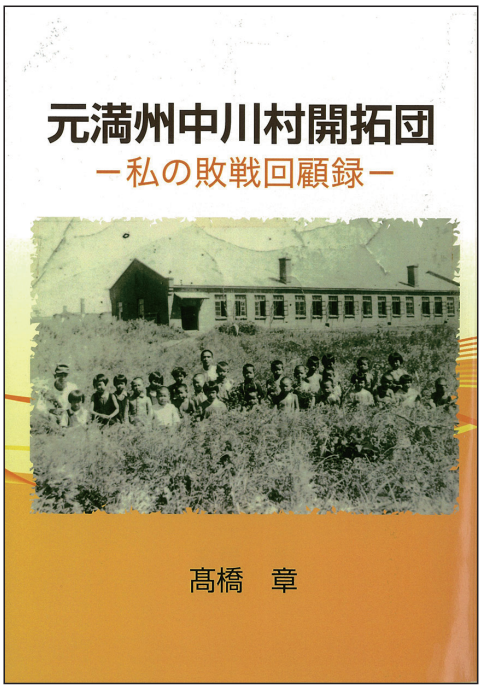
犯の加藤完治を除幕式に招待し、二つ目の慰霊碑を建立した堀口辰三郎氏は、開拓団について何らの反省をしていないばかりか、責任も感じていない。自分の行為を正当化するための演技だ。正直個人的には不愉快だった。今回、慰霊にして終わりにするのは良いことだと思う。

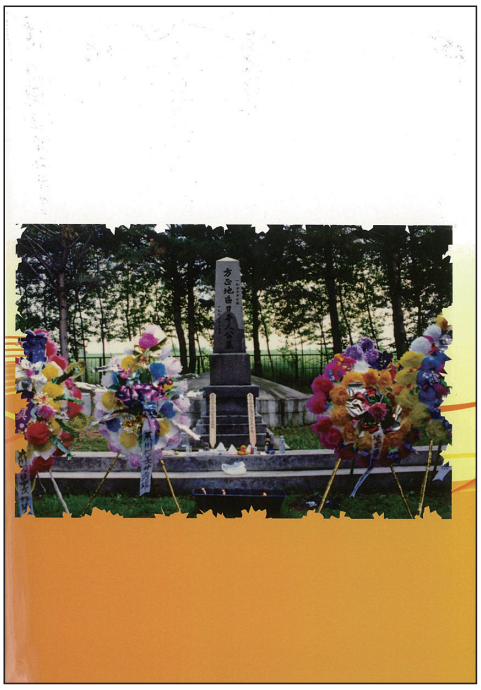
（大類注：二つ目の慰霊碑は当初、慈眼寺にあったが区画整理のため、清雲寺に移されたが、当初、高橋さんは壊してもいいと住職に言ったところ住職は、そうもいかないと清雲寺に移されたという。その直前、高橋さんは中国から帰国された。高橋さんの母親は、堀口団長への怒りも薄く、高橋さんは世代の違いによる意識の断絶に慨嘆されている。そして清雲寺に移された際、慰霊祭が行われ、高橋さんも参加。そして前述の＜今回、慰霊にして終わりにするのは良いことだと思う＞ということになったようである）

最近まで私たち開拓二世は、中川開拓団の事に対しては、「餓鬼どもに何が分かるか黙ってろ」という雰囲気で、発言を無視されていた。敗戦時の体験者の大部分は、開拓二世だ。彼らは、昭和二十八年にようやく祖国へ帰国することができた。

真実は曲げられない。元村の名誉や開拓団の誇りなど、我々二世には関係ない。現在開拓一世の殆どの方はなくなり、二世の私達も後期高齢者となり、満州開拓団の敗戦時に何があったのか語る人が居なくなっている。戦争は嫌だ、反対だ、と口では簡単に語れるが、二度と私たちが経験した悲惨な思いは、子や孫には経験させたくない。私たちが経験した戦争の悲劇を二度と繰り返さない思いを伝えるのは、俺達、私達だと思う。

二〇一一年八月七日　　高橋章





表紙に写っている生徒の半数は帰国できず。　　裏表紙は方正日本人公墓

なお、この『回顧録』を高橋さんは最近、増刷された。お読みになりたい方は送料込み1000円で扱っているので、以下、高橋さんにご連絡されたし。

368-0054　埼玉県秩父市別所79－7　高橋章　電話0494－24－8915　まで

読売新聞　2020年11月1日（日）付から転載

この記事を知ったのは支援者の新潟県村上市の野田尚道さんからである。石金楷さんが送ってくれたという。記事を書かれた川瀬大介さんは瀋陽に赴任する前に事務所に訪ねてこられ、二時間近くお話をした。「方正の会」を立ち上げた経緯などを聞かれ、ノートにメモを取られていた。近年、瀋陽支局に赴任される読売、朝日の記者の方々は必ずと言っていいほど、訪ねてこられる。「中国東北の雰囲気を少しでも実感しておこう」、と来られた理由を言われたこともある。ともあれ「方正の会」が認知されていると思い、嬉しい。（大類善啓）

残留孤児「最後の養母」死去

中国「友好」の専用住宅

【瀋陽＝川瀬大介】終戦後に中国東北部（旧満州）に取り残された中国残留孤児を育てた養父母が暮らす中国吉林省長春のアパート「中日友好楼」で、最後の養父母だった崔志栄（ツイジーロン）さんが30日、老衰で死去した。98歳だった。戦後75年の今年、戦争の悲劇を知る「生き証人」がまた一人、亡くなった。

中日友好楼で暮らす最後の養母だった崔さん（中央）と胡名誉会長（左）ら＝今年9月撮影、胡名誉会長提供

黒竜江省ハルビンの養父母支援団体などによると、崔さんは、残留孤児を「長女」として育てた。1983年頃、長女は「勝目尋美」という名の日本人で、実父は川崎市に住んでいるとの連絡が入り、その後、帰国した。日本政府から残留孤児の認定を受け、崔さんよりも先に日本で亡くなった。崔さんは生前、「日本人に対する敵意はなく、我が子と思って育ててきた」と語っていたという。

残留孤児を育てた中国人の養父母は高齢化が進む。支援団体によると、黒竜江省や北京で少なくとも3人の養父母の存命が確認されているが、存命者は全国でも数少ないとみられる。

崔さんが住んでいた中日友好楼は長春中心部にあり、1990年に旧満州から帰国した日本人実業家の寄付で建てられた。中国唯一の養父母専用住宅として、3階建ての建物にはかつて約30世帯が入居し、日中友好のシンボルとして知られていた。今も養父母の子孫が暮らすが、老朽化が進み、解体の必要性が指摘されていた。

支援団体の胡暁慧（ファーシャオフイ）名誉会長は取材に対し、「友好楼から歴史の生き証人がいなくなってしまったことは非常に悲しく残念だ。友好楼に記念館を建てるなどして、中日友好の証しとして若い世代に歴史を伝えていく必要がある」と語った。

1990年に建てられた「中日友好楼」（中国・吉林省長春市で、2015年10月13日撮影）

中国残留孤児　終戦前後の混乱の中、旧満州などで家族と離ればなれになり、現地に取り残された日本人の子どもを指す。厚生労働省の認定数は2818人。中国の養父母の下で育ったが、1972年の日中国交正常化を受け、80年代から日本への帰国が進んだ。今では9割以上が永住帰国している。

戦後の中国で、流転８年の私の軌跡

新宅 久夫

今年が敗戦後 75 年になり、記憶を風化させまいと回顧する事にしました。
私は昭和 10 年（1935 年）長春（当時の新京）で生まれ 9 年間を過ごし、父の都合でハルビンに引っ越し、２年後に日本の敗戦を哈爾浜市(ハルビン市)で迎えました。

１）敗戦直後のハルビンの状況。

ハルビンは当時 30 万の人口で、帝政ロシア時代、シベリア鉄道建設の為にロシア人が住み、東方のモスクワと言われ、ロシア正教の寺院が目立ちました、街は白系ロシア人が住む道里区、満人（中国人）が住む道外区、日本人は南崗区に概ね住み分けていました。

1945 年 8 月 6 日、通学の途中突然空襲警報のサイレンが鳴り、ハルビンの上空に見慣れぬ赤い星を翼に付けたソ連機が飛来、不安げに小学校に着き話題はソ連機の話ばかりでした。帰宅途中の街道で満人宅や商店に青天白日旗が、あちこちに掲揚していました、なんとなく不穏な治安の空気を感じました。

後で知りましたが満人の間の噂では、ボツダム宣言が 7 月 26 日に出ていて、日本が戦争に負ける事を知っていた事です。知らされていないのは一般の日本人で、高級官僚や関東軍の高級軍人、特務機関の人員家族は、いち早く日本帰国の準備をしていました。

8 月 15 日正午の重大ニュースを、校庭に生徒が集められ終戦の詔書を聞き、明日から休校になると校長から話がありました。

自宅がハルビン郊外の顧郷屯にあった為、翌日、治安不安を心配して市内に避難するよう、憲兵隊のトラックが迎えに来て桜小学校に収容され、その後知人の紹介でロシア正教中央寺院横の、ロシア人経営のアパート四階の屋根裏（実質は五階）に移りました。

8 月 20 日早朝、ソ連軍戦車が市内に侵入、前夜まで治安維持をしていた関東軍は、武装解除されて捕虜として収容され、また密告によるソ連軍の戦犯狩りが始まり、高級軍人・憲兵・警官・高級官吏・資産家・特務機関勤務者・満人の対日協力者（漢奸）など摘発され連行されました。

市内の治安は、満州国軍の反乱、国府の特務が組織した保安隊など、一般居留民の財産・生命の保障が無いまま、ソ連軍は使役の為の男狩り、欲望を満たす為の女狩りなど、不安な毎日と緊張の連続でした。

ハルビンの街には、地方からの着の身着のままの、日本人の避難民が溢れ、日本の小学校が難民収容所として使われました。難民は疲労と飢えと寒さの中、伝染病（発疹チブス）が蔓延して多くの犠牲者が出ました。父はソ連軍が発行する通行安全腕章をして、協力要請のあった難民救済に従事していました。

1946 年 4 月 15 日、ソ連軍は旅大地区を除き全満から撤退、翌日入れ替わって八路軍が有名な軍歌「三大規律・八項注意」を高らかに歌いながら元気に入城して来ました。いわゆる「八路」は恐ろしい匪賊であると教わり、昔中国では「好人不当兵・好鉄不作釘」と、兵隊

は悪い人間が多いのが常識でしたが、八路の兵士はこれまで接したソ連兵や国府軍とは違い、軍規が厳しく自覚の高い大衆から支持された軍隊である事が判りました。

満州方面に出遅れた国府軍は、米軍の支援で失地回復を図り，内戦状態になり国府軍は都市を占拠、中共軍は農村部を解放していました。

2） 日本居留民の引き揚げと留用者の残留

日本敗戦の翌年初め（1946 年)、米軍・国府軍・中共軍との三者協議で、日本居留民の安全な移送引き揚げをする為、一時停戦が成立して北満地区（中共支配地区）約 24 万人、南満地区（国府軍支配地区）約 77 万人、合計 101 万人が 1946 年 6〜12 月に葫蘆島に集結して、米軍の艦船で日本各地の港に引き揚げました。

また大連地区はソ連軍の支配地区でソ連が独自に船を用船して、1947 年 8〜10 月に 27 万人が日本に引き揚げています。(厚生省援護局資料)

延安から来た八路軍と地元の反日ゲリラの部隊（朝鮮人）とが合流して、正式名称を「東北民主聯軍」と名乗り、支配地区では内戦と復興に必要な人材を募集していました。いわゆる「留用者」で、一定期間留めて任用するという中国語です。

まもなく日本人の引き揚げが始まる前に、それぞれ個人の職業調査があり、必要な人材を半ば強制的に指名されたようです。

ハルビン駅前にあった旧ヤマトホテルに、東北民主聯軍の衛戍司令部が有り、父が呼び出され中央寺院の横のロシア人経営のアパートから、家族全員が駅前のホテルに引っ越し、指示が出るまで待機の状態でした。その時、国府軍はハルビンの南 150 キロの陶頼昭鎮（トウライジョ)、第二松花江南岸に迫っておりました、5 月中旬突然移動命令が下り、手荷物を持って駅に集合となり、急ぎ駅に着くと貨物列車が待機しており、有蓋貨車の車内に俄か造りの木造二段ベッドに 10 家族が押し込められ、味噌樽がトイレとして持ち込まれ、外から扉に施錠され発車しました。半日走って綏化駅に着き扉が開けられて、用を足したり、軽い運動をしていました。同乗の警備兵に何処に行くのか？　聞いても知らぬ返事、無蓋貨車には病院から撤去した医療機械類が満載していました。列車は東に向かって動き出し途中、鉄力駅で休憩して走り出した列車は次の駅に確認を取りながら走る為、ジャムスの対岸蓮江口駅（鶴岡方面行きの分岐点）にはハルビンを出て一週間が過ぎていました。

松花江の鉄道橋は日本軍撤退の際、中間点を爆破していた為、列車から降りて対岸のジャムスには、材木で補修したところを徒歩で渡るか、渡し船を待って渡るかしか方法はありませんでした。

3） 国共内戦中のジャムスでの生活

黒竜江省東部の重要な都市であったジャムスに到着後、ハルビンの日本人の引き揚げ移送が始まっていました。留用者は続々と集められ、「日本鬼子」から「国際友人」に変身、軍国主義者と人民（留用者）とは区別していると、街中に宣伝隊を出して政策を宣伝していました。お陰で現地の人たちは比較的好意的で、一時街に日本人が溢れ、臨時人民政府が設立して一大後方兵站基地となり、新しい政策が続々と実行されました。

特に目立った点に、土地改革と生活の改善・土匪討伐と治安維持・軍の編成と兵士募集・

財源確保の穀物の徴収・人民元の発行と印刷・インフラの整備など街に活気がみなぎり、着々と反攻の準備が出来ていました。

戦後の混乱でインフレが酷く、通貨はソ連軍票・満州国紙幣が紙屑となり、現物支給で余剰のものは、欲しいものと物々交換していました。新中国成立までは解放区で流通した人民元は、製造年号は中華民国 38 年と西暦（公元）1949 年の二種類が流通していました。

松花江岸の埠頭から南数百米に、旧満州拓殖公社のビルと宿舎があり入居しました。ビルは軍事管制の臨時政府の衛生部になっていました。

私は小学校の副読本に、試験武装開拓団・千振り・弥栄村が拓殖公社と関係が深いことを習いました。また土龍山事件で反日の頭目「謝文東」が、土地収奪に反対して武装蜂起した為、ジャムス郊外は治安が悪い事を知りました。解放後「謝文東」は反日から反共に変質した為、人民政府の討伐の対象になり、捕まって公開処刑で斬首され、街の電柱に晒し首が大衆の見世物になりました。

４）ジャムスから南下して瀋陽に至る

1947 年夏　東北人民解放軍が人民解放軍第四野戦軍と改称され、国府軍に対し大攻勢に転じ東北全土が瀋陽解放を最後に達成し、破竹の勢いで全国解放を目指し南進して海南島まで国府軍を追撃しました。

５）新中国誕生を瀋陽で迎える

極寒の冬を三回過ごした 1949 年 5 月、家族は特別列車で瀋陽に到着しました。父たちは半年前に軍と共に先に瀋陽市内に入っていて、街の治安が良く留用された技術者が、各分野の戦後復興と建設に頑張っていました。

人民政府の配慮で元日本企業の寮を改造して日本人小学校が設置されました。（瀋陽解放直前まで国府軍の軍馬の厩として使用していた）

遠方の子弟の為に、親元を離れて寄宿舎生活を経験しました。政府の招待所にいた戦災孤児が寄宿舎に入居して来ました。その中に同年齢の引間君と出会い、彼の不遇な経歴に同情して親交を深めました。学校経営は人民政府の財政援助で、日本人会が自主管理して民族教育を行っていました。

学校の一階には教頭の家族部屋・トイレ・男女教員六名の三部屋・炊事場と食堂・賄いの職員の部屋・男女生徒用の板張りの四部屋に 40 名が雑魚寝。講堂にピアノが設置され、二階は職員室と七教室とトイレが備わっていました。その他外部から通勤の中国語の張先生他一名が、中学校進学の為に配属されていました。

毛沢東主席が北京天安門の楼上で、新中国成立を世界に向かって宣言しました。

私は瀋陽市立第九中学（現満族中学）に進学、10 月 1 日は小南門大街の学校に集合して、東北人民政府前広場の指定の場所に着き、祝賀のデモ行進と夜は提灯行列に参加しました。

1950 年 6 月朝鮮戦争勃発、抗米援朝の高まりで第四野戦軍の一部が、南方より中国人民志願軍として朝鮮戦線に参戦しました。

６）朝鮮戦争で白城子へ疎開

瀋陽市は重工業地区で米 29 爆撃機の目標になるため、父の職場の一部が黒竜江省白城子に疎開しました。入居したのは元満州防疫站（ステーション）施設で、白城地区は古くからペストの伝染病流行地区でした。白城子初級中学は元日本人在満国民小学校で、スチーム暖房でトイレは水洗便所で、当時としては近代的設備の学校でした。

７）両国赤十字による日本人送還が合意

1952 年 12 月北京放送の日本語放送で、「中国政府は日本人居留民 3 万人を送還する用意がある」と発表され、帰国が現実味をおびて来ました。

1953 年 3 月朝鮮戦争停戦協定が成立、日中両国の赤十字会の話し合いの結果、戦時中国人捕虜と犠牲者の遺骨と交換に、日本人の送還が合意されました。当時留用された日本人は中国全土に分散しており、いろいろな事情で中国の港は秦皇島・天津・上海港を使用して、目的港は舞鶴港に決まり、後期の集団帰国は 1953 年 3 月日本からの第一次配船で始まり、1958 年 7 月第二十一次を最後に合計三万人の集団帰国は終了しました。

８）後期集団引き揚げから現在

集団帰国が始まる前に家族は瀋陽に戻っていましたが、校長に残留を希望して白城子高級中学の職員宿舎の一室に留まりました。が、再三父より電報が来て家族と一緒に帰国しないかと催促があり、迷った挙句瀋陽に戻りましたが家族は既に瀋陽を離れて居て不在でした。公安局外事科に出頭して家族と帰国したい旨述べましたが、中国側に権限が無いので天津に出向き、直接交渉するようアドバイスがあり、証明書を書いてもらい天津に向かいました。

天津交通旅社に宿泊中の家族と合流して、帰国業務事務局に追加申請しましたが、既に帰国船の人員配置が決まっており、家族と一緒での帰国は難しく、次回の船で帰国を言われたが強引に頼み、第三次高砂丸の乗船名簿に入れてもらいました。

1952 年春にソ連の学制を採用して 6 月卒業 9 月入学と半年繰り上げて中学を卒業し、帰国時は高級中学（高校）3 年で、父の本籍地の和歌山県立大成高校に編入学、ロシア語を 5 年間終了していましたが、英語は全くダメで日本語も変だと笑われる始末でした。

ハンデイを克服して大学進学は中国語を生かせる大学を選びました。中国貿易にはすでに 50 年従事し、訪中回数 329 回、北京駐在を含め 4500 日の滞在記録を今も継続しているが、国交正常化前は政治問題に絶えず翻弄され、家族には随分辛い思いをさせたと反省しております。

（しんたく・ひさお：1935 年、長春（当時の新京）に生まれ、旧満洲で育つ。日本敗戦後も中国に残留。1953 年に帰国後は、得意の中国語を生かして中国との貿易業務に現在でも携わる一方、日中友好運動に関わる。現在、関東日中平和友好会・会長）

満蒙開拓と私

加藤　まり子

方正日本人公墓

私が初めて方正の日本人のお墓について知ったのはたぶん 1981 年です。当時勤めていた中国専業旅行社の対外連絡室という部署に入った国際電話で、戦後現地で亡くなった開拓団の方のためのお墓について情報が入りました。経営トップは対外連絡室長に「作るための寄付をしてほしいのか墓参団を組織して現地に外貨を落として欲しいのか確認するように」と指示しました。

その後、「お墓はできており、墓参団を組織して元開拓団の皆様に来て欲しい」という連絡であることがわかりました。その時すでに、対外連絡室長の女性は、将来、その墓守りをどうするのか心配していました。

1982 年、私は名古屋営業所に転勤になり、その旅行会社からどのくらいの人が方正県を訪問したか知りません。1985 年、結婚・出産で当たり前のように専業主婦となり、天安門事件や残留孤児の方々の帰国のニュースに、想いをはせるだけの時間が過ぎました。

子育ても終わり仕事を探してあちこちするうちに、私がしつこく中国語の勉強をしていることを知った人が、大類さんや方正友好交流の会の活動を紹介してくださり、総会後の記念講演者が当時の愛知県日中友好協会の事務局長岡崎温先生であることに力を得て、東京まで出向いたのが最初でした。

講演会の後の懇親会にも参加させていただき、両親を亡くし姉と二人だけで帰国し、苦労して現在の生活を築いた男性のお話や、草の根の交流を続けるみなさんの声を聴き、微力ながら自分のできることを続けようと思いました。

「満蒙開拓地」を訪問

多くの方が「40 年近く前の電話 1 本をよく覚えているなあ」と思われたでしょう。

それには 1981 年 5 月から 6 月にかけて満蒙第八次舒楽鎮（じょらくちん）開拓団の青木太さんはじめ舒楽会（じょらくかい）の皆さんと、黒龍江省依蘭県（いらんけん）舒楽鎮（じょらくちん）を訪問した際の出来事があったからです。

見習い添乗員として同行し、同じ部屋で寝起きしていたお客様が、思い出の地を再訪し今日からは帰途という朝、意識不明に陥ってしまわれたのです。「この人はここで亡くなるだろう」という共通理解が急速に団の中に広がりました。団員の皆さんにとっては、この地が満州と呼ばれた頃に過ごした時には、身近な方の死はごくごく日常的なことだったのです。

人の死に接したことのなかった私は「仕事中だ。冷静に」自分で自分に言い聞かせようとしましたが、全くできませんでした。先輩社員からアドバイスを受けても、手足が震えたのを覚えています。

その詳しい様子は、青木太さん（1981 年訪中時の団長）が「碑　北斗のもとやすらかに」という本を自費出版して残していらっしゃいます。これは、入植時の様子から色々詳しく調べて書いてあります。是非、多くの皆さんに読んでいただきたいと思います。

私はこの時の体験から 3 つのことを学びました。

体験から学んだこと

1．死は身近にあるもの。

「明日の朝、目覚めないかもしれない」ならば今日、今をどう生きるかです。

正しいとか〇〇するべきとかいう理屈はさておき、健康に感謝して生きることです。

2．リーダーとは。

青木さん自身は、根こそぎ召集で自分の家族とは離れてしまい、シベリア抑留も経験していらっしゃいます。履物の片方でさえ盗られて闇市で売られるような時代に、「生きるために、今なら人に話せないような恥ずかしいことも沢山してきた。」と仰っていました。その留守に、困難な時に、家族を安全に送り出してくれた舒楽鎮の人々への感謝と、そのような状況を作り出した入植から引き揚げに至るまでの交友関係や信頼の醸成。同じルールの下で同じように暮らしていた 20 万余の日本人、敗戦色が濃厚なことを知りながら、漫然と開拓民を送り出した者、日本人同士でありながらわが身を守るために橋を落とし、赤子の口をふさいだ者がいるという事実があるからこそ、舒楽鎮のリーダーや名もなき人々への感謝と尊敬の念は一層深まるのです。

3．家族とは。

ハルビンの市内観光は小雨の中でした。ある日本人収容所跡でこっそりと手を合わせた後、バスの入り口を伝う雨で小石を洗う男性がいらっしゃいました。ここで亡くなった息子さんの遺骨の代わりだそうです。父親として幼い息子を守ってやれなかった後悔の念が消えないとおっしゃっていました。

私は、第一子を妊娠した 1985 年に、検査で「トキソプラズマ抗体値」が異常に高く障害児が生まれる可能性があると医師に告知されました。迷わなかったと言えばうそになりますが、最後には「産む」という選択をしました。それは生き残った開拓団の皆さんが生きることにかけた執念ともいうべきものを聞いていたからです。結果として 3 人の子どもを授かり育ちました。

私は満蒙開拓に参加した人々が侵略のお先棒担ぎの悪人だったとは思えません。自分の人生で大事な判断をするときに開拓団の方から聞いたことを拠りどころとしてきました。

古いルールや価値観に盲従した結果はすべて自分が背負わなければいけない現実。その時は「善かれ」と思って従ったルールでも時代の変化に取り残されて、結局自分が損をする。「NO！」と言えば言えるのに、周りに流されて言わなかった結果は、誰も責めることはできない。言わなかったのは私なのですから。幸いなことに、平和な時代の日本ですから命を落とすことはありません。でも、過ぎ去った時間を取り戻すこともできません。

「満蒙開拓は、不都合な歴史だから、語られることが少ない」とよく言われます。

評価は別にして、満蒙開拓の実態も引揚げの逃避行もより多くの人に伝えることこそ重要だと考えます。悲劇や美談としてではなく、こういう時にこういう判断をした人がいて、それから〇〇年後にこうなった。あなたならどうする？

平成の時代に育ち、令和の時代を生きる日本人にわかってもらえないのが当たり前です。ただ、事実を伝えることこそが大事で最も難しいと感じるこの頃です。

（かとう・まりこ：1976 年、大学で中国語と出会う。以後、細々と中国語を習い続ける。
名古屋市在住）

幼少期の錦州・奉天・引揚げと故郷再訪

大野　正夫

私は昭和 15(1940)年 11 月 29 日、満州・錦州の満鉄（南満州鉄道）社宅で生まれた。父が 29 歳、母は26歳の時であった。二人の故郷は箱根の麓の小田原である。私の生まれ育ったところを見たく、2009年に中国留学生、高知大学大学院で指導した朱文栄氏と二人で、8 月 15 日、終戦日に錦州を再訪した。終戦日の体験をしたかった。両親から終戦の日は快晴で暑かったと聞かされて育った。私の満州の記憶は、その頃から始まる。5歳になる前であつた。

写真左：生まれた社宅の場所には高層ビル住宅

再訪の日も暑く快晴であった。錦州市街の並木道は緑に覆われ、高層ビルが林立し、人出は多かった。駅舎は 10 階ほどの商店や食堂が入ったビルになっていた。錦州市は中国東北部（満州）の中核都市である。社宅団地は駅舎の隣で、塀も昔のままのようであった。社宅は高層住宅ビルになっていたが、社宅内の道は昔の幅で配列も同じように思えた。通路としては細い。社宅前の樹々は大きく深い緑の並木道になっていた。

亡き父の回想録の地図から、私の家があった場所がわかった。社宅の後ろが高い土手で鉄道線路になっている。記憶のなかに列車のガタコト、ガタコトの音があるが、こんなところに私が育った家があったことを知った。二歳上の姉から、「子供達が集まり、列車に日本兵が乗って居て、屋根にソ連兵が座っている列車を待ち、手を振ると、兵隊さんが窓から手を振ってくれた」と聞いたことがあるが、兵隊さん達はシベリアへ送られた。「奉天からの引揚の時に、列車から見た錦州の家は、そのままだった」という母の話が、その時にわかった。

錦州の社宅生活

昭和 20 年4月に撮影した家族写真

錦州の社宅団地には2戸建ての家が並び、かなり広い敷地を占めていた。その周りは、高い塀で囲まれており正門があった。正門に大きなアカシアの樹があり、白い花はやわらかく甘い香りがあり、摘み取り天ぷらにして食べたと言う。自宅の社宅の前庭には、いろいろな花が植えられていた。

社宅はペチカを中心に部屋が作られていた。その通風管の隙間が暖かく自家製の納豆を上に置いて作った。母は蓄音器を購入して童謡などを、よく聞かせてくれた。帰国後、小学校で音楽の

時間に習う歌のなかには、同じ歌を蓄音機で聞いた記憶のものが多かった。

社宅内の銭湯に行くのが子供達の楽しみであった。終戦直前、夕暮れ前に姉と行き、帰り道に、防空壕が掘られたままの大きな穴場に落ちて、泥だらけになって家に帰ったそうだ。数戦前後に、大人達がバラ針金を塀に張る作業を見ていた記憶がある。

家の近くに父が働いている鉄道局があった。この建物は、2009 年錦州を訪問した時に、父の回想録地図の同じ場所にレンガ造りの建物があった。今は鉄道関係事務所になっていた。古い赤黄色のレンガの建物であったので、昔の満鉄錦州総局のままの建物であろうと思った。

満鉄錦州総局、現在も鉄道関係の建物

その建物は社宅の正門から大きな道を隔てた斜め前にあり、社宅から子供でも歩いて行ける距離であった。姉と私が手をつないで遊びに行ったそうである。建物の 2 階に父の部屋があった。父は窓から姉と手をつないで、やって来る私達を窓からみていた。父の部屋で電話遊びをしたという。ほかの人の電話から掛けたのだろう。父から私達が歩いて来るのがみえて、二人が「手をつないだ姿がかわいらしかった」と、父は亡くなるまで何度も、このことを話していた。この頃は平穏な日々であった。父は晩年に、「あの頃が、人生で一番楽しかった」と言った。

馬車で1時間ほどのところに干潟の広い葫蘆島海岸あり、休日に潮干狩りに行き遊んだ。波がない記憶があり、引揚げてきて小田原の海岸で波がある海を見て、これが海であることを知った。葫蘆島は、後日引揚船の港になり、そこから満州各地からの大部分の人々が帰国した。

2009 年 8 月 15 日、葫蘆島海岸、前方の霞む丘が引揚船波止場がある港

錦州訪問をした時に「コロ島にゆきたい」と近くにいたひとに尋ねると、「今は軍港になっており、立ち入り禁止だ」と聞かされた。港のある葫蘆島の丘は霞んでいた。葫蘆島海岸は、広い遠浅の砂浜海岸公園なっていて夏休みで賑わっていた。

父は満鉄の情報でソ連軍が満州の国境を超えて侵攻して来たことを、終戦 3 日前に知った。ソ連軍が錦州に来る前に、母と子供を日本に帰そうと切符の手配をし、切符の日付は 8 月 15 日夜行便であった。その日が終戦の日である。高知出身の甫喜本さん家族が社宅におられ一緒にゆくことになった。耐久食としてドウナツを私の家でたくさん作った。しかし「終戦になったので、列車は朝鮮まで行けない」と判断して朝鮮行きは中止した。「もし終戦が一日遅れたら朝鮮行きの列車に乗り、途中で降ろされ、私達は多くの本に書かれている悲惨な朝鮮への逃避行をしたであろう」と両親は言っていた。

終戦になっても、錦州市にはソ連軍や中国軍の侵攻はなく、日本人と満鉄スタッフの協力で、市街の治安を守り、暴動などは起こらず高い塀でかこまれた社宅区画内は平穏であった。終戦後中

国人達が急に威張りだし、市内に野菜などの買出しに出る時は注意を払い、団体行動をしたそうだ。満鉄社員のなかには嫌がらせを受けた人達もあったようであるが、父は職場で中国人と親しくしていたので、中国人から、時々豚まんじゅうの差し入れなどがあったと言う。多くの社員は仕事がなくなり、持ち金で過ごし 10 月まで戦前と変わらない日々が続いた。父は殖産部勤務で、満鉄倉庫の管理をしていて、倉庫には駐留日本軍隊用の物資が大量にあり社員に分配した。家には薬やブドウ糖(固形)などを持ち帰っていた。ブドウ糖が引揚船での弟の健康保持に役立った。しかし錦州市は交通の拠点であり、近く八路軍(共産党軍)と国民党軍、それにソ連軍との戦場になると予想し、奉天に避難した方が良いと満鉄内で決まり、奉天の住み場所は確保したと言われ、希望家族は特別列車を編成して奉天に向かった。

奉天(瀋陽)での生活

社宅を去る時には、我家には開拓団家族が三家族同居していた。母は「なんでも使って下さい。帰国したら連絡をして下さい」と母の実家の住所を開拓団の三家族に書いて渡した。多くの食料(倉庫に米や缶詰)や衣類などを置いて、持てるものだけを背負って錦州駅を発った。錦州市での内戦は日本人の引揚げ後に起こったので、開拓団の家族は無事に帰国されただろう。しかし帰国後に開拓団の家族から何の連絡も届かなかったことを、母は気にしていた。この出来事は、母と開拓団家族との気持ちのすれ違いがあったと思っている。錦州社宅の人達は、多くの開拓団の人達を同居させていたそうだ。

昭和 20 年(1945)10 月 10 日錦州から奉天へ。略奪を恐れて夜行列車で奉天へ避難した。途中、幾度か列車が停められたが、略奪に会うこともなく奉天に着いた。一緒に奉天に行った甫喜本さんの小学生になっていた長男の宏さんに、後日、奉天のことをお聞きした時、「奉天の駅で手に持てるものを持って宿舎に行き、再度駅に戻ったら、残していったものが、全部なくなっていた」と言われた。奉天では学校のような建物に 2～3 日間収容され、錦州の満鉄社員家族は奉天在住社員の家に居候した。私達家族は満鉄の奉天駅と隣接する社宅に入ることになった。

ホテルの窓より、奉天(瀋陽)の社宅団地。二階建ての棟

私達が落ちついた家は、二階建ての家であり、上級社員社宅であったと思う。最初、一階に住み、その部屋は使用人達の部屋だったようで、南京虫が多くて、二階の部屋に移させてもらった。ひとの良い方々で、帰国まで家主家族と私達家族で住み、何のトラブルもなく過ごした。二階にも部屋がいくつかあった。ベランダで各家がつながっていてベランダで子供達は遊び、ベランダから隣の家に渡る綱渡り遊びをしていた記憶がある。

父は満鉄の紹介で、ソ連軍が経営していた工場のボウラー炊きに雇われた。市街地にソ連兵士が徘徊しているので、郊外にあった工場まで、社宅からの往き帰りには、「ソ連軍許可雇員」と大きくロシア語書かれた腕章を付け隊列を組んで歩いたそうだ。帰りにはコークスを持ち帰り、ダルマストーブで燃やし、寒かった奉天の冬を暖かく過ごすことができた。甫喜本さんの家では本や新聞を燃やし、学校から壁板を剥いで燃料にしたと聞いた。奉天での記憶は、かなりはっきりとしている。

あまり市街に出なかったが、休日には父に連れられて市場に行き、手で細くしてゆく中華そばを食べ、“てんぴん”と言って、薄い柔らかいせんべいのようなものに野菜や肉を包んだものを買ってもらった。

父は知人にロシア語を教えてもらい、職場の日本人雇員の班長のような役をした。ソ連軍監督将校は、初め、白刃の日本刀を指揮棒にして警戒的態度であったが、父の片言のロシア語で、だんだんと穏やかになり、日本人雇員に好意を持ち、黒パンを配るなどした。父の収入もあり、高粱飯であったが、ひもじい思い出はなかった。

しかし、三歳の弟は慢性中耳炎で、毎日のように母が背負い満鉄病院に通った。市街にはソ連兵がマンドリン銃を持って徘徊しており、往き帰りの道でソ連兵に合わないよう注意し、怖かったそうだ。しかも弟は慢性下痢で、虚弱で錦州から持ってきたブドウ糖や薬で命が助かったと母から聞かされた。

社宅内は塀で囲まれ平穏であったが、毎晩のように郊外で交戦をしており、大砲の音の記憶がある。その頃、市街地では発疹チフスが蔓延し大勢の人が亡くなった。市街外の焼き場では、毎日のように死体を焼く野火が上がっていた。

2009 年、奉天（瀋陽）駅から錦州へは、往きは高速鉄道（新幹線）で南錦州駅に降りタクシーでトウモロコシの畑を走り錦州市内に入ったが、帰りは奉天に逃避行をしたローカル線で、約 6 時間かけて奉天駅へ向かった。車窓から遠くまで広がるトウモロコシや高粱の畑を眺めた。高粱の実は茎のてっぺんに付くと朱さんから聞かされた。この風景は昔のままであろう。瀋陽駅舎は昔のままで、その屋根の上に丸い夕陽をみることができ、「これが満州の真っ赤な夕陽だ！」と写真を撮った。駅の近くの路地では中華そば、てんぴん、焼き芋などの屋台がありに賑わっていた。子供の時、これらを見ていたのかと想った。

多くの高いレンガ建築が残っていた。内装は清潔感がありリニューアルされていたのが、強く印象に残った。駅前の建物、ヤマトホテル、満鉄病院もそのままであった。レンガ造りの満鉄病院は研究所になり、後に高層ビルの病院があった。

昭和 20 年から 21 年の厳しい寒さの冬を、家族が無事に過ごせたのは、奉天在住の日本人の協力と、居候した家主の家族が親切に私達の家族を見守って下さったことである。病弱の三歳の弟、やんちゃな姉弟は、うるさい存在だったと思うが、両親は、家主さんから小言を聞くことはなかったという。

昭和 21 年(1946) 8 月 26日　奉天より引揚げ

当初帰国の日が決まっていたが、私と弟がじゃれあいをしていて、弟のペニスを噛んでしまった。それが治るまで、と言うことで帰国が遅れてしまった。錦州から一緒に奉天に避難した満鉄社員家族のほとんどは、第一陣引揚げで帰国してしまったので、2か月ほど寂しい思いで過ごしたと父が話したことがある。

引揚げのことは、両親から聞いていたことを基に綴る。昭和 21 年 8 月 26 日朝に、引揚げの連絡が突然あった。隣組から「午後 2 時までに朝日広場に集合」という連絡であり、時計をみたら 11 時であった。母は洗濯仕事をそのままに、急いで持ってゆく、おにぎりのご飯を炊きだした。家を出る時に、二階に洗濯ものが、干したままであったのを見たという慌てぶりであった。

帰国の用意はしていたが、慌ただしい引揚げの途であった。父は布団袋を手造りで大きなリュッ

クサックにした。子供達も大きなリュックを背負った。今まで使っていたものを全部そのまま残し、リックサックに入れられるものだけ持って、近所の人と連れだって朝日広場に行った。広場に着いたら、もう大勢集まっていた。馬車が来てそれぞれの組みに分けて、人も荷物も一緒に、奉天の駅に向かった。奉天駅に着いた途端に夕立があり、雨のなかで立たされた。

暗くなってやっと貨車に乗った。屋根のない貨車のなかで、再び雨に遭い、皆、何もかもが、ずぶ濡れになった。弟は母にしがみついていた。ひどい雨で、雷のゴロ・ゴロという音を姉は記憶している。

朝方になると雨が止み、星がでてきた。夜明けの頃、懐かしい錦州市街に入った。貨車から見る市街地は、出て行った時と全く変わらず、錦州の社宅は線路沿いにあり、我が家は、そのままのたたずまいで、母は「何で奉天に行ったのだろうと思った」と言った。しかし錦州を再訪した時、錦州駅の裏にある{錦州戦争博物館}の正面に大きな「錦州の攻防戦」の壁画があった。錦州市街は1948 年 9 月に国民党軍と八路軍(共産党軍)との攻防の激戦場となった。壁画では、街は無残に破壊されているが、錦州駅と満鉄社宅付近は、戦場のなかの孤島のように無傷に残ったことが描かれていた。説明記事に戦略的に鉄道機能を残し、満鉄社宅は勝ち組の拠点住居として残したと書かれていた。この時、再訪で社宅団地とその周辺が昔のままであったことが理解できた。

私達は錦州駅で降ろされ、元日本軍兵舎の収容所に入れられた。牢屋のような収容所に 1 週間ほど居て、9 月 3 日錦州駅から再び貨車に乗せられて葫蘆島駅に着いた。葫蘆島駅から波頭までは遠かった。暑い炎天に照らされて、水筒の水しかなく、喉が乾いて辛かったことを忘れることができない。葫蘆島の波頭で荷物の検査があった。1 日、何も食べていないので、くたくたになり、私はリュックが持ち上がらなくなってしまい、父に助けられて重いリュックを泣き泣き背負い、歩いた。そこから大きな米軍の貨物船、8000 トンあまりのリパテー号に乗船した。長いタラップを登った記憶がよみがえる。

船のなかには、約 5000 人のひとで、身動きさえできないくらいであった。皆、大人も子供もむしろの上に毛布を敷いて疲れて寝ていた。母が炊事場に水を貰いに行ったら、「水がほしいなら海の水を飲め」と、日本人乗組員に言われて、悔しかったと言う。

船のなかに 1 週間ほどいた。1 日に、高粱のご飯1杯、芋の軸が入った味噌汁1杯とお湯が1杯で、皆、空腹に耐えた。弟は、何も食べなくなって泣くばかりであった。錦州から持ってきたブドウ糖と薬と飲ませていた。「もう少し、船での生活が長かったら、弟の命は危なかったかもしれない」と、母は晩年まで言っていた。多くの引揚船の船内で亡くなる者が出た。幸い私達の乗船の船で死者は出なかった。甲板に出て海をみると、船が半分沈んでいた記憶がある。

9 月11 日博多港に着いた。港に着いてから船内に病人がいる事で、3 日間ほど沖に停泊し、ひとり、ひとり検査をした。海のなかにたくさんの魚がいて、大人達は釣竿がないので、糸をつるして魚を捕っていた。私達子供は甲板を走り廻って遊んだ。下船の夜は、甲板で盛大な演芸会が行われたことを鮮明に覚えている。

下船すると、タラップの下で、真っ白な粉を頭から吹きかけられた。DDT の粉末である。岸壁にいた婦人会の人たちが船のそばに寄ってきて「ご苦労さま ！」と言って迎えてくれ、“おにぎり”をもらった。その時の嬉しかったことを母は語った。大人も私達子供も、皆泣いていた。それから松林を歩いて収容所に入り、4 日間ほどいろいろの手続きがあった。収容所までかなり長時間、松林の中を歩いた記憶があり、後年、その場所を探して歩いたが分らなかった。多分宅地になったのだろ

う。手続きが終わった者から、各地へ出発する引揚列車に乗った。

引揚列車は、よく停車し多くの者が車内通路に寝ていた。私には椅子に座った記憶がない。母は「どの街も焼け野原で、ひどいショックを受けた」と幾度も話した。小田原駅到着を電報で知らせており、父の従弟が出迎えてくれて、両親も安堵したと言う。

私は、なぜか８月15日終戦日の頃のことを記憶している。一年後の引揚の２週間くらいの行動も、かなり鮮明に記憶がよみがえる。人は斑点のように記憶するのだろう。

私は「満鉄」という比較的恵まれた生活環境のなかで、戦後の激動期を錦州と奉天で過ごした。戦後の一年間、奉天市街は、郊外・市街の攻防戦、疫病と横暴なソ連軍兵士達で、無秩序な街になっていたことを、後日知った。私には悲惨な記憶はないが、父から「工場に行く郊外の路で、夜間交戦の死体兵士を見た」、 母から「火葬場から煙が絶えなかった」と聞く。このようなことはあってはならない。

私は小学校の時の２年生から４年生まで、増田昭一先生が担任であった。先生は授業の合間に、新京の避難収容所で悲惨に亡くなって逝った子供たちの話をされた。私は真剣にその話を聞いていたが、あまりにもかわいそうで、「私も満州にいました」とは言えなかった。しかし、先生の話された新京難民避難所の子供達のことは胸の中から消えなかった。60年後に小田原の同級生から、増田先生の書かれた本をもとに、TBSの終戦記念ドラマ、「遠い約束」が放映されることを知らされた。テレビドラマを視聴して、ぜひ増田先生にお会いしたくなり、三人の同級生と、ご自宅に訪問した。このテレビドラマはDVDになっている。「遠い約束」DVD上映と先生の講話の会を高知で開催を企画したが、途中羽田までの自動車道で渋滞に合い来高できず、DVDは上映し、先生の講話のチャンスを逸した。しかし、このイベントが発端になり、高知で「満州の歴史を語り継ぐ高知の会」を発足することになった。また、増田先生とお会いして、増田先生の満州での数奇な経験を描きたくなり、その後、幾度か先生に聴き取りをして、私は「大地の伝言」―増田昭一の生涯―（夢工房）を刊行した。

（おおの　まさお：1940年、旧満洲の錦州で生まれる。1946年、葫蘆島より引き揚げ、博多港に着く。高知大学名誉教授、海洋生物学、海藻学の教育研究を行い、国際協力事業団（JICA）の海外研修員の指導にも関わった。満州の歴史を語り継ぐ高知の会、代表）

国内各地の「満蒙開拓慰霊碑」の保存を

寺沢 秀文（満蒙開拓平和記念館館長）

１．始めに

「満蒙開拓」。戦前・中、旧満州に全国各地から約２７万人もの満蒙開拓団（満州開拓団）と称した農業移民等が渡満し、その中から凡そ８万人もの犠牲者を出した悲惨な歴史であり、「被害」と「加害」の混在する歴史でもある。その多くの犠牲を悼むべく、戦後、全国各地に多くの満蒙開拓に関わる慰霊碑、記念碑等が建立された。

私事の範疇にて恐縮ながら、私の両親が参加、渡満していた「水曲柳開拓団」（吉林省の水曲柳鎮に入植）も多くの犠牲者を出し、戦後どうにか引き揚げてきた関係者らはその戦後親睦組織である「水曲柳会」という会を立ち上げ、戦後を共に支え合いながら生き抜いてきた。その「水曲柳会」が４００名を超える同開拓団の犠牲者等を鎮魂するためにと慰霊碑を建立したのは平成６年（１９９４年）のこと。実に戦後４５年を経てのことであった。この水曲柳開拓団の場合もそうであるも、実は全国各地に建立された満蒙開拓に関わる慰霊碑等の多くは戦後かなりの時間を経てからのものが多い。昭和３０年代のものはかなり少なく、ようやく昭和４０年代から５０年代になってからの建立のものが多くを占め、前記の「水曲柳開拓団」のように平成に入ってからの建立のものもある。

「なぜそんなに時間が経ってから？」と訝しく思われる向きもあるかも知れない。しかし、これも無理もない話で、ほとんど無一文で旧満州から日本へと引き揚げてきた開拓団の人々は、それまで手の入っていなかった国内の辺地、山間地等に入り、今度こそ本当の開拓の苦労を重ねた人たちも多い。また、農業を離れて、街に出て新たな職に就いていっていた人たちも少なくない。その人々がようやく生活が安定し、「これでようやく慰霊碑を建てられる」と言う経済状態になれたのは戦後２０年、３０年以上を経てからと言うのが大半であった。

後述するも、かつて私的調査として調べて歩いた、私の住む長野県南部の天竜川沿岸の「伊那谷」と通称される地域(全国で最も多くの開拓団を送出した地域でもある)に建立されている２６基の満蒙開拓に関わる慰霊碑等(但し､戦没者全体の慰霊碑に含まれているもの数基も含む)の建立時期は下記の通りであった。

昭和２０年代・・・１基	昭和５０年代・・・７基
昭和３０年代・・・３基	平成以降・・・・・２基
昭和４０年代・・・８基	建立時期不明・・・４基

上記通り昭和４０年代～５０年代の建立が計１５基と過半を占める。

２．「伊那谷」における満蒙開拓慰霊碑の調査

私事続きにて恐縮ながら､戦後の国内生まれながら両親が元満蒙開拓団員であった私は、３０年ほど前から満蒙開拓の調査研究等に独学で取り組み始め、その中で、この地域の中に眠る満蒙開拓の慰霊碑等が数多くあることが判ってきた。しかし同時に、その頃にはもう各地の開拓団関係者の高齢化等も進み、これら慰霊碑等の今後の維持管理等が不安視されていることも判った。そこで、これらの慰霊碑等の記録、保存を今のうちにしておかな

いといけないとの思いから､伊那谷各地の慰霊碑の調査に取り組み始めた｡調べてみると、過去にこのような調査が実施されたような記録は無く、全ては手探りでの調査活動となった。また、このようなことに関心を抱く人も無く、「伊那谷の満蒙開拓慰霊碑を記録する有志の会」を勝手に立ち上げたものの､実質的には私一人だけでの活動であった｡まずは、歌碑や各種墓碑等の文化財関係の記録・保存等を管轄する管内各市町村の教育委員会などに問い合わせ文書を送り、「貴市町村内には満蒙開拓に関する慰霊碑はありますか？」等のアンケートを実施することから始めた。幸い、ある程度の回答があり、それを元に、本業の不動産鑑定士の仕事に絡んでの現地調査等の際に足を伸ばしたり、休日等を利用して一人でその１本、１本を訪ねて歩き始めた。しかし、仕事の合間を縫って等と言うこともあり、その全てを訪ねて手を合わせつつ、写真を撮り、碑文等を読み取って歩くのに凡そ２年程度を要してしまった。訪ねて歩いた慰霊碑等は２６基に及んだ。

それらの調査結果等を１冊の記録集としてまとめて『満蒙開拓と伊那谷～慰霊碑は語る～』として自費発行したのは平成１７年(２００５年)７月のことであった｡幸いなことに、所属する飯田日中友好協会から確か５万円の活動補助費が出たものの、後は全て自腹でのことであり、当初に２００冊を刷り、関係者や地元図書館等に寄贈等し、後は地元の書店で１冊1,０００円で販売したところ、アッと言う間に無くなってしまった｡増刷をとの要望もあったので、更に２００冊を刷ったものの、これもすぐに完売。再増刷をとの要望もあったものの、刷れば刷るほど赤字となるばかりなので、それ以上の増刷は諦めた次第であった。

３．長野県全県での満蒙開拓慰霊碑の調査の実施に発展

かく言う次第で、地元「伊那谷」の慰霊碑の調査、記録等は個人的活動として取り組んだものの、これには後日談があり、その調査記録活動は長野県全域にも広がるところとなった。この伊那谷での調査に取り組み始めて１年ほど経ってから、当時はまだ活発に活動していた「長野県開拓自興会」の常任理事会に出席する機会があった。この「開拓自興会」と言うのは満蒙開拓から引き揚げてきた元開拓団らの全県的組織で、これは全国各県それぞれにあり、それぞれ活発な活動をしていた。その全国規模での連合会もあり、後述する東京多摩にある「拓魂公苑」を設置したのもこの連合会である。その県自興会での常任理事会で、「私的活動として地元伊那谷で慰霊碑の調査を始めた。出来ればこの慰霊碑の調査記録活動をこの開拓自興会の事業として全県規模で実施して頂けないだろうか」と提案させて頂いた。有り難いことに早速承認され、全県規模での実施となり、私が既に実施していた伊那谷での調査記録分も全県分にそのまま登載されることとなった。流石に全県組織での実施だけに、その調査活動は比較的早く進み、全県を手分けして調べた慰霊碑等は約８０基に及び、その調査記録を冊子化し、『長野県満州開拓乃碑』として発行されたのは私が単独発行した前述『満蒙開拓と伊那谷～慰霊碑は語る～』よりも数ヶ月ほど早い平成１７年３月のことであった。こちらは市販等はされなかったところから、貴重な全県規模での調査記録となったところである。私が作成した伊那谷版、また県開拓自興会に拠る全県版も極めて貴重な記録であるも、いずれも今は絶版であり、県内の一部の図書館等でしか目にすることが出来ない。私の手元と、記念館にも各１冊ずつが保管されているのみである。

また、この全県調査を手がけた長野県開拓自興会も、かつては全国屈指の活動を誇り、

各県の満州開拓史の中でも最も評価の高い『長野県満州開拓史(全３巻)』を発行する等の実績を残していた会であったが、記念館が開館する３年前、平成２２年（２０１０年）９月に解散してしまっている。この頃にはもう満蒙開拓平和記念館の事業準備も進捗しつつあり、同会の役員の中には「寺沢君の頑張っている記念館が完成するまではせめて自興会の活動を継続出来ないか」と言う意見も少なからずあったものの、「いや俺たちの目の黒いうちに、俺たちの手で終わりにしてしまうべき」との意見の方が僅かに多く、小差の多数決で解散が決定してしまったのは残念なことであった。同自興会の中では私が唯一の戦後の国内生まれの役員であったが、いずれも開拓団や青少年義勇軍の出身者である皆さんとの活動や交流は大いに学ぶものがあり、今日、私が満蒙開拓平和記念館に関わっている上での大きな財産となっている。この開拓自興会もほとんどの県で解散、自然消滅等してしまい、今も活動している県は皆無であるものと思われる。これも戦後７５年の時間の経過でもある。

私事にて恐縮ながら、私が「方正交流友好の会」に関わることになったきっかけも実はこの長野県開拓自興会からの派遣としての参加からであった。確か平成１７年(２００５年)６月のこと、「方正交流友好の会」の活動が再開されるに際し、同会から県開拓自興会にも役員の参加要請があったとのことにて、「ならば一番若くて動き易い寺沢君に」と言うことで、当方がその再出発大会に参加させて頂いたのが当会との出会いの始まりであった。それからもう１５年にもなる。

４．満蒙開拓慰霊碑等の位置づけなどについて

さて、この満蒙開拓に関する慰霊碑等、勿論、全国各地にも建立されており、私も全国各地を講演等で訪問する度に当地の慰霊碑等を訪ねる等している。その中から判ってきたこと、また気になったこととして幾つかのことがある。すなわち、①.その碑銘、②.その碑文等における満蒙開拓の捉え方、③.碑銘の揮毫者、などである。まず、①.碑銘については②とも大きく関わる。碑銘としては「慰霊碑」が最も多く、「拓魂碑」がそれに次ぎ、「満蒙開拓乃碑」、「殉難乃碑」なども見られる。次に、②の碑文の内容等についてであるも、その多くは満蒙開拓団送出の経過を記し、現地で多くの犠牲を出したこと、そのことへの慰霊等の内容が多くを占める。ただ、ここから先はあくまで私見であるも、その満蒙開拓が国策の下に多くの犠牲を出したものであること、その国策の誤り、あるいは満蒙開拓とは言いながら実際には現地の人々にも多くの犠牲を強いた加害の歴史でもあったこと等に触れた碑文には私はまだ出会ったことは無い。亡くなった同志への慰霊と言う点では一致しているも、満蒙開拓と言うこと自体の受け止めについては、多くはそれ自体への反省等は無く、むしろ満蒙開拓を賛美すらする内容のものも少なくない。それは、その碑の碑銘が「慰霊碑」だけでなく、「拓魂碑」とされているものも多いことにも結びつく。碑銘を「拓魂碑」としているものの碑文等には、この満蒙開拓自体の賛美的な内容のものが少なくない。開拓団から多くの犠牲者を出してしまったことへの慰霊、鎮魂の意を表すことは当然であるも、しかし、何故そのようなことになってしまったのか、国策としての誤り、「開拓」とは必ずしも言い得ない面もあり、現地の人々にも多大な犠牲を強いてしまったと言う満蒙開拓の「被害」と「加害」の両面にも触れるべきでは、と言うのはあるいは酷な要求であり、戦後生まれの私などが軽々には口にしてはいけないことであるかとも思う。

５．慰霊碑等の揮毫者

これら慰霊碑等を調べて歩く中で気になったこととして、③.碑銘の揮毫者が誰かと言うことである。揮毫者としては下記の方々があるが、私が調べて歩いた伊那谷地区の慰霊碑等においては以下の通りであった。

ⅰ．建立当時の県知事、市町村長など・・・１０基
ⅱ．建立した戦後開拓団組織の代表者、元開拓団団長など・・・１基
ⅲ．満蒙開拓に関わった関係者など・・・１基
ⅳ．寺院住職など・・・３基
ⅴ．不詳、未記載など・・・１０基

これらの中で最も多いのが、ⅰ.建立当時の県知事、市町村長などである。特に建立時の長野県知事の揮毫が最も多く、中でも「長野県知事・西沢権一郎」氏の揮毫が７基を占める。これは前記通り、慰霊碑等を建立した時期が昭和４０～５０年代に多いと言うこともあり、その時期に県知事を長く勤めていた当時の西沢権一郎知事が揮毫を頼まれたことによる。しかし、実はこの西沢氏はかつては長野県庁等勤務の地方官僚であり、戦前・中、長野県庁にあった「拓務課」の初代課長であったということを知る人は少ない。満蒙開拓を推進した国の拓務省(後には大東亜省)、そこからの指示等の地方各県等での受け皿として設置されたのが各県の「拓務課」であった。いわば長野県内での開拓団送出を担った担当課のトップでもあった西沢氏、この方に慰霊碑等の揮毫を依頼したのは勿論、建立時の県知事であるからとは言え、実は開拓団送出に当たった県担当課のトップであったということを知っての上での依頼であったのかどうかは今はもう知る術もない。

揮毫者を調べて歩く中でもう一つ気になったことがある。私の住む松川町の隣村である上伊那郡中川村にも「旧南向村」送出の満蒙開拓団の慰霊碑がある。その揮毫者はかの加藤完治である。満蒙開拓青少年義勇軍の生みの親であり、満蒙開拓自体の推進者でもあった加藤完治は、そのことへの批判も多い一方で、優れた農業教育者等として戦後も崇敬した人も少なからずあったと言う両面を持つ人物である。しかし、多くの犠牲者を出した満蒙開拓の推進者の一人であった加藤完治に慰霊碑等の揮毫を依頼すると言うことに、建立を担った関係者の人々の思いはどのようであったのであろうか？　実はこの加藤完治揮毫の慰霊碑等は他にもあり、私が知っているだけでも、この長野県中川村の慰霊碑、埼玉県内にある中川村開拓団の慰霊碑、そして唯一の全国的規模での満蒙開拓の慰霊施設である東京・多摩市にある「拓魂公苑」の「拓魂碑」の揮毫も加藤完治である。そのことを理由にこの「拓魂公苑」への墓参を拒む人も中にはいるところである。

６．課題となりつつある満蒙開拓慰霊碑の今後の維持管理

さて、少し話を戻すが、前記の地元での慰霊碑の調査記録等が一段落すると共に、その頃から満蒙開拓平和記念館の建設準備会が動き出し、それからはその活動等に時間を費やすこととなった。その一方で年老いた両親に替わり、前記の「水曲柳会」と言う戦後親睦組織にも二世として参加するようになり、やがて同会の事務局長も仰せつかることとなった。その水曲柳会の中で新たに出てきたのが慰霊碑の移転問題であった。建立当時、予算的問題等もあり、ある会員の方のご好意により、個人墓地の一画に慰霊碑を建立したものの、そこは山間部の車も入れないような丘の上であったため、会員の高齢化等によりそこまでお参りに行くこと自体が困難となりつつあった。また、個人墓地の一画にあり、将来

に向けての維持管理等の問題もあり、もっと便利な場所で、また将来の管理等も安心な公的な場所等に移転出来ないかと言う意見も多かった。その意見の中には、満蒙開拓平和記念館が開館して間もない頃であったため、「寺沢君が中核的に関わっている満蒙開拓平和記念館の敷地内に水曲柳会の慰霊碑を移転出来ないか」と言う提案もあった。しかし残念ながらそれはお断りするしか無かった。公私混同でもあり、また実は他の開拓団組織等からも会員の高齢化等に伴い維持管理が困難となってしまった慰霊碑を記念館で引き取ってもらえないか等の相談も来ていたからでもあった。もしも、如何に関係のある水曲柳会のものとは言え、その移転を一つでも引き受けてしまったら、全国各地から将来に向けての維持管理等に困っている慰霊碑の移転の申し入れが相次ぐこととなってしまい、記念館の周りは慰霊碑公園になってしまいかねなかった。記念館の敷地は元々が阿智村村有地を無償で借り受けてのものであるし、また仮に受け入れてもそれを管理するだけの人員体制等は民間経営である当記念館には残念ながら無いのも実状である。

そのような訳で記念館への慰霊碑の移転はお断りしたものの、その移転問題だけは何とかしなくてはならず、役員の皆さん等と奔走し、全国各地に散らばっている水曲柳会の会員の皆さんにも連絡文書等を出し、また寄付金集め等にも努めると共に移転先探しにも苦労するところとなった。幸いなことに、水曲柳会慰霊碑の建立当時からご縁のあった飯田市内の「長源寺」と言う寺院の境内に移転させて頂けることとなり、飯田市役所の真ん前にあるそのお寺の境内に慰霊碑を移転し、その移転・慰霊法要を挙行できたのは平成３０年(２０１８年)８月のことであった。

７．慰霊碑等維持に向けての悩み

この水曲柳会のように満蒙開拓の慰霊碑を移転出来たのは全国的にも極めて稀なケースと思われる。水曲柳会の場合には高齢化が進んでいるとは言え、まだ組織がどうにか維持されていること、また当時の開拓団員数(約１,１００名)も多かったところから、移転に際しての寄付金等もなんとか集めることが出来た。しかし、多くの開拓団の戦後組織は高齢化等のために解散、自然消滅してしまったものが大半で、現在も活動を継続しているのは僅かに過ぎない。全国で最も多くの開拓団を送出した長野県にしても、かつては前記の長野県開拓自興会に参加していた開拓団組織等は少なくとも３０団体以上あったが、現在、その活動が継続している団体はたぶんは県内でも５団体にも満たないものと思われる。かつてはそれぞれの慰霊碑の前などで、毎年のように開催されていた慰霊祭なども、高齢化等により行われなくなったところも多い。長野県内でも最も多くの開拓団を送出したこの飯田・下伊那地方でも、現在も慰霊祭等が定期、または非定期を問わず開催されているのは私たちの水曲柳会、分村として送出された泰阜村開拓団員の戦後組織の「大八浪会」など３～４組織にとどまるものと見られる。

当然に、それら組織等で守ってきた慰霊碑等の維持管理の支障等も生じてきており、その将来に向けての維持管理は大きな悩みとなっている。これら慰霊碑等の今後の維持管理の可能性は、これを建立した組織の如何、慰霊碑の所在場所の如何等にもより異なる。私が調査した伊那谷での慰霊碑等を建立した建立母体を分類すると以下の通りとなる。

①．開拓団の戦後組織が中心となって建立・・・１１基
②．分村開拓団を送出した市町村が中心となって建立・・・８基
③．上記の両者が中心となって建立・・・７基

また、慰霊碑等が建立された場所等については以下の通りとなる。

①．公園・役場敷地など公有地に立地・・・１２基

②．神社・寺院などに立地・・・１２基

③．個人墓地、地区共有地などに立地・・・２基

建立母体が、かつて分村開拓団を送出した市町村であったり、あるいは開拓団組織との合同での建立の場合には、その維持管理等についても行政が関わってくれることが多く、今後の維持管理等の心配はそれ程には無い。これに対して開拓団組織単独での建立の場合にはその組織の高齢化、解散等に伴い、慰霊碑等の維持管理は当然に困難となる。また、慰霊碑等の立地する場所が公有地や神社・寺院等の場合には、慰霊碑周辺の維持管理等の当面の維持管理はなされるも、慰霊碑自体の損傷、老朽化等の場合の修復等については、それが開拓団組織等の建立であった場合には当然に修復等は困難となる。そして、それは現実に既に起きつつある。

８．多摩「拓魂公苑」の維持問題

我が伊那谷でも見られるこの満蒙開拓関係の慰霊碑等の維持存続問題は、全国的に見てもほぼ同様の状況にあるものと推測される。それは前記の全国唯一の満蒙開拓に関する全国規模での慰霊施設である東京・多摩市にある『拓魂公苑』についても同様である。この『拓魂公苑』については以前にこの『星火方正』誌上でも触れたことがあるも、そこには約１８０柱の開拓団の慰霊柱が祀られている。この「拓魂公苑」は昭和３８年（１９６３年）に、前記の各県にあった開拓自興会の全国連合会組織であった「全国拓友協会」が設置、開設したものであるも、その連合会自体はかなり以前に解散してしまっている。現在、この「拓魂公苑」は東京都に寄付されその公有地となっているも、実はその管理団体等は前記連合会の解散以降は無いままとなっている。今年はコロナ禍のために実質中止となったものの、毎年４月の第２日曜日に開催されてきた任意参加での合同慰霊祭も主催者は無く、有志での運営となっている。そして、この場所の管理等は東京都の公園事務所等がご好意で行ってくれている。しかし、何かあった場合の管理連絡先等は無いままで、以前には「管理連絡先として満蒙開拓平和記念館がなってくれないか」と言うご要望等も頂いているものの、何分にも当記念館からは遠隔地であり、また当記念館も民間運営としてギリギリの状態にあること等からこれはお受け出来ないままで今日まで経過している。この「拓魂公苑」の今後の維持管理についても何とかしなくてはならない問題でもある。

９．その公的維持に向けての提言を

以上、私事等も交えて書かせて頂いたが、満蒙開拓関係の慰霊碑等の今後の維持管理やその活用等は大きな課題でもある。維持管理が困難となりつつあること自体も大きな問題であるも、また、これらの慰霊碑等の存在が地域の中で忘れられつつあることも残念なことでもある。満蒙開拓は外地で起きたことであり、またその経過、あるいは集団自決等の多くの犠牲等から余り向き合うことの少なかった歴史ではある。しかし、その歴史を二度と繰り返さないためにもその史実に向き合っていくことが必要であり、各地に建立されているこれらの慰霊碑等は国内で、そして地域内で、満蒙開拓の歴史に触れることの出来る数少ない、そして貴重な歴史遺産資料でもある。前述の『伊那谷」の慰霊碑の調査記録集を作った際に各地元市町村の役場、図書館等にも寄贈させて頂いたが、それは「これら慰

霊碑等を保存すると共に、学校や地域団体の中でもそこを訪ねて満蒙開拓の歴史についての理解を深めて頂きたい」との願いも含めてのものであった。

この満蒙開拓の歴史に触れることの出来る国内所在の歴史遺産資料でもある慰霊碑等は是非、地域として保全、維持していって頂きたいものと思う。開拓団組織等の高齢化、解散等の中で、その慰霊碑等の維持、保全が困難になりつつるあることを鑑み、その保全、維持等に県、市町村等行政にも関わって頂き、そして地域全体としてこれを守っていかなくてはならないものと思う。しかし、満蒙開拓の戦後を担ってきた前記の開拓自興会等の組織も無くなってしまった今､こういった提案等をするのは私たち開拓団の血を引く二世、三世であり、そして全国で唯一の満蒙開拓に特化した記念館である当館としても、こういった課題にも取り組んでいけたらと思っている。これへの記念館自体の関与等については課題も多いも、開拓団二世たる私個人としてはこれら慰霊碑等の維持についての何らかの具体的提言をいずれはしたいものと思っているところでもある。

１０．最後に

「方正日本人公墓」にも是非多くの皆さんに行って頂きたいものの、そこに行くことは容易なことではない。しかし､国内の満蒙開拓の慰霊碑等は各地にある。その建立の趣旨、位置づけ等にはご意見等も多かろうも、そこに眠る犠牲者の皆さんへの平和への誓いを新たにするためにも是非立ち寄って手向けて頂きたいところである。是非、読者の皆様におかれても、こういった問題にも目を向けて頂くと共に、お近くの慰霊碑等にもお参り頂ければ幸いである。

私も前回の伊那谷地区での調査から既に１５年以上を経過しているところから、その改定増補版を作成すべく､現在､仕事の合間等に再調査を進めているところである。そして、そこで線香を焚き、手を合わせる度に、慰霊碑の向こうから「私たちのことを忘れないでいてくれてありがとう」と言う声が聞こえる思いのするところでもある。

なお、この満蒙開拓関連の慰霊碑等を調べて発行等されている下記の書籍、あるいはホームページ等もあるので、最後にご紹介させて頂く。

満蒙開拓団　https://www.asahi-net.or.jp/~un3k-mn/0815-manmou.htm

『石碑を訪ねて』　（発行）　**嫩**江八洲会　広報部　（とき印刷。４,３００円）
※．義勇軍関係の全国各地の慰霊碑を収録した力作である。

（てらさわ・ひでふみ：1953 年生まれ。満蒙開拓平和記念館館長。不動産鑑定士の傍ら、館長業務に奔走。元開拓団跡地を訪ね歩き、両親が暮らした吉林省水曲柳などを 20 数回尋ねる。現在、長野県松川町在住）

毎日新聞（2020年6月4日付）より転載

Topics　「満蒙開拓」慰霊碑

都内に点在、地図作成

元高校教員、異郷での悲劇伝え

大日本帝国時代、多数の日本人が植民地だった旧満州（現中国東北部）に渡り、敗戦により異郷の地で倒れた。その悲劇を伝える碑が東京都内各地にある。それらを紹介する地図「都内にある『満蒙開拓』慰霊碑」を、元高校教員の竹内良男さん（71）が製作した。

1945年夏の敗戦時、旧満州や内モンゴルには、日本からの移民が多数暮らしていた。政府の国策によるもので、仮想敵国だったソ連に対するけん制と、農民など日本国内で収容できない労働力の受け皿とする狙いがあった。31年の満州事変以降本格化し、敗戦直前までにおよそ27万人が渡った。

45年8月9日にソ連が侵攻。土地を強制的に取り上げられていた地元民の襲撃もあり、移民たちは死の逃避行を余儀なくされた。およそ8万人が亡くなったとされる。「中国残留孤児」の原因ともなった。

東京からは1万100人が移民したとされ、異郷での悲劇を伝える碑が各地にある。地図はこのうち10碑（うち1碑は中野区から千葉県印西市に移設されたもの）を記載している。

「貧しい農家の次男、三男が渡ったイメージがありますが、都市住民も多数参加しました」。竹内さんはそう話す。たとえば、品川区・武蔵小山の「小山銀座」とも呼ばれていた商店街の人々1000人以上が商売をやめて移民した。戦時下で食糧などの流通を国が統制しており、商品などが確保できなくなったことが背景にあった。敗戦の混乱で800人以上が亡くなった。同区の朗惺寺にある「東京荏原郷開拓団殉難者慰霊碑」はその悲劇を伝えている。

■　■

また、調布市西つつじケ丘の延浄寺にある「不忘の碑」には、「国に従って国に棄てられた人びとを　忘れず」などと刻まれている。さらに、「まんしゅう地蔵」（台東区・浅草寺）▽湖北農場殉難者之碑（世田谷区・東京農大）▽興安友愛の碑（目黒区・五百羅漢寺）▽満州開拓青少年義勇隊東京中隊殉難英魂碑（府中市・東郷寺）なども紹介されている。

竹内さんは2016年、「ヒロシマ連続講座」を開講。戦争体験者や研究者らが講師で日本の近現代史を振り返っている。今年3月で100回を迎えた。

地図は無料で配布している（郵送料は希望者が負担）。問い合わせは竹内さん（qq2g2vdd@vanilla.ocn.ne.jp）へ。【栗原俊雄】

▲竹内良男さんが製作した地図「都内にある『満蒙開拓』慰霊碑」

▶第二次世界大戦の敗北に伴い、旧満州（現中国東北部）では多くの日本人が命を落とした。犠牲者を悼む「まんしゅう地蔵」＝東京都台東区の浅草寺で

「満州」移民関係の２冊の本

先﨑　千尋

１　私と「満州」との関わり

最近、旧「満州」移民関係の本を２冊読んだ。齊藤俊江『長野県飯田下伊那の満州移民関係資料目録』（不二出版、2020）と趙彦民『「満州移民」の歴史と記憶』（明石書店、2016）だ。齊藤さんの本は、旧知の元朝日新聞記者・田中洋一さんから毎月メールで届く「歩く見る聞く　62」で教えてもらった。趙さんの本は、茨城大学図書館の新購入本のコーナーで見つけ、借りてきた。

本の紹介の前に、私と「満州」（以下、カギかっこを外す）移民の関わりについて記す。

私の周りには、親類縁者も含めて満州に渡った人はいない。『瓜連町史』にも関係する記述はない。茨城県に範囲を広げると、水戸近郊の内原に、戦前加藤完治が開いた日本国民高等学校があり、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所があった。また、『茨城県史近現代編』によると、満州への「分村」計画は11村で指定され、笠間町からは138人が渡満した。そのうち戦後日本に帰れたのは三分の一に過ぎなかった。

戦後、満州などからの引揚者が県内各地に入植した。新生、新利根、大八州開拓などが知られている。旧瓜連町にはなかったが、旧那珂町にも12の開拓組合があり、その内満蒙開拓引揚者の組合は田代（11戸）、芳南（20戸）があった。

私は1970年から２年間、群馬県前橋市永明農協で仕事をした。永明農協は当時、日本の農協の「希望の星」と言われていた。全販連から永明農協に移ったのは、組合長の清水淳さんに声をかけられたからだった。淳さんの父は圭太郎さん。「乳と蜜の流れる村」を作ることを夢み、戦前に住んでいた木瀬村の分村を満州に作り、団長として行った。戦後に引き揚げたあと、浅間山の北麓に入植、北軽井沢開拓農協を作り、次男の浩さんと酪農を営み、1968年に朝日農業賞を受賞している。

圭太郎さんは北軽井沢に住み、長男の淳さんがいた前橋には、妻のぎんさんが別居していた。圭太郎さんは時々前橋に顔を見せ、私はよく話を聞かせてもらった。のちに、圭太郎さんの葬儀にも参列した。淳さんの祖父は及衛（ともえ）。二宮尊徳の思想を受け継ぎ、1892（明治 25）年に前橋郊外の野中村（木瀬村から現前橋市）に、のちの産業組合の元となった「共同積縄組合」を組織した。

時が下っての話になる。私が瓜連町長時代、町内のＫ時計屋の縁者が満州から引き揚げてきた。いわゆる「残留孤児」だ。夫、子供、孫を連れてきた。水戸市の県営アパートに入居することは決まったが、それこそ何もない。鍋釜からコメ、布団などを集め、アパートに届けた。

ふとしたきっかけで、10年前に方正（ほうまさ）友好交流の会の大類善啓さんを知った。それから「星火方正」という機関誌を送ってもらっている。毎号、多くの人が熱っぽく満州を語っている。

２　長野県飯田下伊那の満州移民関係資料目録

モノを書く人間にとって、先学の遺した文献は宝物だ。自分の研究テーマに関する書籍や論文を読む時、序文やあとがきにまず目を通す。そして脚注や参考・引用文献を見る。未見の資料発見が楽しい。目録類も貴重な資料になる。茨城県に即して言えば、茨城県立歴史館の『蔵書目録』(4 冊) や常陽芸文センターの『茨城県郷土資料総合目録』、県立図書館の『逐次刊行物総合目録』、水戸の古書店「とらや」の『茨城県地方史文献目録』(これまでに 46 号出ている) は必読文献で、これまでに随分利用させてもらっている。私の専門の協同組合関係では、かつて全国農協中央会協同組合図書資料センターの古桑實さんが『協同組合および農協に関する文献の目録』などを作成していた。テーマ別に分類し、解題もあったので、便利だった。戦前の産業組合の動きを知るには、『産業組合』という産業組合中央会の機関誌の総索引がある。これも古桑さんが苦労してまとめたものだった。古桑さんの事績は『ライブラリアン古桑實の仕事』(2007、全国協同出版) に詳しい。

私は 10 年以上も前に、「ほしいも学校」という面白いプロジェクトに加わり、干し芋 (農水省用語では甘藷蒸切干) の歴史をまとめた。川越に住むサツマイモの第一人者である井上浩さんに教わり、霞が関にある農水省農林水産政策研究所図書館に通い、情報と史資料を集めた。その時に役立ったのは『甘藷・馬鈴薯の文献集』(1950、農政懇話会)、『日本に於ける甘藷の文献目録』(1955、浪速大学農業短期大学部)、『指宿市立図書館蔵甘しょ文献目録』(1992、農林水産省農業研究センター) などだった。指宿図書館には農水省の試験場にいた湯之上忠さんが集めた 1 万点以上の文献資料がある。戦中戦後の茨城県関係資料もあり、こちらにはなかったので送ってもらい、コピーして返した。私がこの時に集めた資料類は現在、東海村立図書館にある。

前置きが長くなった。田中さんからの便りで、飯田市にすごいライブラリアンがいることを知り、田中さんと介して著者の齊藤さんに手紙を書いた。古桑さんのような人は滅多にはいないが、それでも彼は業務として資料を集め、目録などを作成したのだった。齊藤さんは勤務していた図書館の司書の仕事としてではなく、個人でこつこつ文献を集め、関係者の聞書きを活字にし、残してきた。その気にならなければ絶対にできない仕事だと思う。著者の使命感と努力、さらに周囲の人の協力があって初めてなしえた目録である。個人が作成した 140 頁もの目録を他に知らない。私は脱帽するしかない。

著者の住む飯田下伊那地方からは、昭和初期から太平洋戦争期に 8400 人もが満州に渡った。全国一だそうだ。しかし戦後、この地域でこうした事実に触れることはタブーだった。そのような雰囲気の中にあって、著者は 30 年前から「地域社会の中の満州移民問題」に関心を抱き、「渡満までの経過、満州での生活実態、逃避行から帰国までの過程、帰国してからの生活を調査・研究して記録に残し、再び悲劇を繰り返さないために、後世に伝えることが、担うべき課題」と考えた。

そして著者は、同地方の満州開拓・移民についての行政資料、関係機関の記録、研究書、論文、個人の日記、写真を集め、関係者の聞き取りを行い、それを目録にした。目録は 2 部構成。第 1 部は、旧役場所蔵の満州開拓関係文書、下伊那教育会、町村会の関係文書、個人日記、文書、新聞記事などで構成されている。私は地元の『瓜連町史』編纂に関わったが、基礎資料の事蹟簿すら断片的にしか残されていなかった。役場の資料がよくこれまで残っていたと思う。

第 2 部は、同地方の満州移民関係図書・論文・報告、市町村史（誌）に記載された満州移民、聞き書きリスト、写真、映像で公開された満州移民、戦後開拓、音声から成っている。

さらに資料として年表、下伊那から戦後、県外に開拓に入った組合、入植者のリストがある。このリストには茨城県関係として 16 あり、新生、河和田など私が知っている開拓組合も載っている。

著者は最後に「あとがきにかえて」で、図書館司書になったこと、司書の役割、「飯田歴史大学」で学んだことに触れ、その中で満州移民の研究をすることをライフワークとすることを記している。「オーラルヒストリー（聞き取り）」という手法を知り、飯田市歴史研究所に移った 2003 年から満州移民の人たちへの聞き取りは 2018 年まで続けられた（その記録の『下伊那のなかの満州　聞き書き報告集』が 10 集、『聞き書きと調査研究　下伊那から満州を考える』が 4 集刊行されている）。話者はそれぞれ「自分が体験した辛苦を黙ったまま生涯を終えるのではなく、次の世代の人たちに知ってもらい、平和な社会を築いてほしい。戦争をしてはいかん」という想いと願いを熱く語ったという。

著者は、戦後開拓のために県外に出た人たちのところも歩き、食糧生産と農業政策に疑問を持つようになっていった。「その人たちは今回で 3 度の棄民に会った」と書く。

本書の表紙の写真は、1946 年に長野市の善光寺に帰国報告によった弥栄村長野屯の集合写真だ。まだあどけない子どもも大勢いる。この写真を見て、この子たちはその後どこでどういう暮らしをしてきたのだろうかと思った。

３　「満州移民」の歴史と記憶－－開拓団内のライフヒストリーからみるその多声性

著者の趙彦民（ちょう・えんみん）氏はあとがきで「中国帰国者の三世」と書いている。本書のスタンスがはっきり見える。1973 年に中国黒龍江省に生まれ、名古屋大学で学び、執筆当時は中国・山東大学などで講師、研究員などを務めている。本書は A5 判 558 頁の大冊であり、通読するのは大変だなと考え、しばらく書棚に置いただけだった。齊藤さんから前記の資料目録が届き、あわてて本書を手にした。

著者は、序章で「近代以降の日本帝国の膨張とともに対外的な支配が急速に拡大するなか、19 世紀（20 世紀か？）の前半に中国東北部に作り上げられた『満州』という『国家』を舞台として、満州にかかわった個々人、とりわけ満州農業移民と呼ばれる人々を対象とする」とし、これまでの満州移民研究における歴史学、社会学の先行研究をたどる。

著者は、歴史学研究では「日本帝国主義による満州支配という植民地研究の一環として位置づけられている」が、「個々人が満州でどのような生活を送っていたのか、戦後はどうだったのかが欠けている」と指摘している。

社会学の分野では、「中国残留日本人の『戦争犠牲者』という言説が、いまの日本社会に定着している」と考え、本書は「長い歴史のなかでその歴史を実践した個々人の人生の全体を対象として、彼らの『人生の軌跡』に注目しながら、満州の経験が自らの人生にどのような影響を与え、いかに語ってきたかを明らかにしようとするもの」と規定している。

著者はこの研究を進めるにあたって、長野県から満州に送り出された中和鎮信濃村開拓団を事例として、元団員、残留婦人、残留孤児らへのライフヒストリー・インタビューを行い、「彼（彼女）らの人生の軌跡を跡付け、個人の経験のなかからそれぞれの社会・歴史を

とらえていく」手法を用いた。「異なる個人の経験を積み重ねることによって、集団としての満州移民像を浮かび上がらせることができる」と考えたからだ。そして「満州移民の個々人は、満州に入植してからどのような生活をしてきたか。戦後、日本に帰国できた人々はいかに戦後の日本社会を生き抜いてきたか。中国に残留せざるを得なかった人たちは中国社会でどのように生き、日中国交回復以降、どのように日本に帰国し、いかに日本社会を生きてきたのか、現在はどのような状況に置かれているのか」を考察することが本書の課題だとしている。

本書は三部からなっている。第一部では、これまでの満州移民事業の歴史を、展開・送出・崩壊・戦後の側面から整理し、本書の歴史背景や満州移民の戦後史がわかる。さらに、中和鎮信濃村開拓団を送り出した長野県の信濃教育会、信濃海外協会に焦点を当て、満州移民のプロセスと地域的基盤を明らかにし、同開拓団の入植過程、開拓団の生活、敗戦・引揚げ、戦後をトレースする。同開拓団は、分村という一村単位の開拓団の構成ではなく、全県から公募で団員を募集した。同開拓団が入った中和鎮は方正の南隣にあり、最初の避難先は方正だった。

第二部「個人経験のなかの満州」が本書のメイン。そのうちの第 5 章は、中和鎮信濃村開拓団の団員の中から、集団引揚者、中国残留婦人、中国残留孤児、未帰還者の 13 人を対象に行ったライフヒストリーの聞き書きが 230 頁余に及ぶという内容。「満州は楽しかった、おもしろかった。生きる、死ぬのは嫌だ。満妻として生きるしかしょうがないのよ。親や兄弟を助けるために。日本人として、日本で人間らしく生きていきたい。中国人の家庭を転々とした残留生活」など内容は話者によって違う。これを読んでいて、しばしば私の目が曇り、先が見えなくなり、タオルで目を拭きながら先を急いだ。

「血を絞るようにして」という言葉があるが、話者それぞれがこれまで秘めてきた苦しい体験を誰かに伝えたい、伝えなければ死にきれない。その想いがそれぞれに切々と現れている。集団自決で、母と兄弟が銃殺される音を聞いたなどの話は、涙なしには読めない。

著者はこのライフヒストリーを、どのように満州に渡り、どのように生活してきたか（第一ステージ）、集団引揚げを分岐点として集団引揚者と残留者がそれぞれの社会をいかに生き抜いてきたか、満州という経験は戦後の生活にどのような影響を与えているのか（第二ステージ）、現状（第三ステージ）の三つに分類し、聞き取りを行っている。

著者は話者との出会い、その人のライフヒストリーの中に、話者が語ったことをそのままに収録している。単なる個人の体験談ではなく、話者の客観的な位置や背景、その時の歴史がよくわかる記述になっている。話者が思いのたけを著者に語れたのは、残留日本人の三世という著者の出自も影響しているのだと思った。

文化大革命の時の境遇や人民公社制度の矛盾、帰国後の辛酸な体験など知らなかったこと、読まなければわからないことなどがたくさんあった。若い時に社会主義国に憧れ、日本農業新聞の友好訪中団の一員として初めて中国に行った時には大寨にも行き、礼賛の記事も書いた。あの当時はモノゴトの一面しか見なかった、と自省している。

このライフヒストリーインタビュー（聞き書き）という手法は、近くでは『勝田市史』編纂で取り入れられ、手元に『聞きがたり勝田の生活史』4 冊と、それを整理した『聞きがたり農村史』（東敏雄編著、御茶の水書房）3 冊がある。私自身も、戦前に橘孝三郎が主宰していた愛郷塾で活動した伯父の半生などをまとめたことがあった。

目録を作った齊藤さんも、2002 年から 2018 年まで仲間と行った 106 人からの聞き書きを報告集としてまとめ、公刊している。

第 6 章は、中和鎮信濃村開拓団の入植地だった中和鎮で日本人と接触があった人たちの記憶と語り。当時苦力（クーリー）として開拓地で働いた人など 3 人の話者が登場する。これまでにも、日本人による満州支配のなかで、現地人の土地の略奪、飛行場や用水路などの建設のための労務者の調達・徴集、強要された糧穀出荷、物資の供出などは植民地支配の具体的な内容として記述されてきているが、逆に支配された側の現地の人々はいかに生きたのか、個々人の満州体験をどのように記憶し、どのように語っているのかについて、個人レベルの生活にまで踏み込んだ報告はされてこなかったのではないか。ここで挙げられた事例からは、中国人と日本人との個々のレベルの付き合いには、対立の関係はなく、相互が良い関係を築いていたことがうかがえる。とにかく貴重な記録であると思う。

第三部は満州移民の戦後に焦点を当てた分析である。戦後中国の残留日本人政策、中国残留日本人の戦後体験、戦後の日本社会における集団引揚者の状況と「記憶の場」の形成、継承、から成る。

私にとっては、「中国東北社会に取り残された日本人（多くは女性）がいかに中国社会を生き抜いてきたのか。いかに日本に帰国したのか。帰国したのちにいかに日本社会を生き抜いてきたのか」に関心があった。中国と日本の歴史に翻弄され、家族関係に苦しみ、日本に帰国しても、周りに融けこめない境遇。それでも荒波を乗り越え、たくましく生きてきた人たち。それらのもとをただせば、植民地支配と戦争がもたらしたことであった。

満州移民体験者の多くは鬼籍に入り、生存していても高齢化が進み、満州開拓の記憶が失われつつある。そうしたなかにあって、体験者や地域の人たちによって満州開拓という記憶の継承に向けて様々な活動がなされている。中国の方正県には「日中友好園林」が整備され、日本人公墓が立てられている。2013 年には長野県阿智村に「満蒙開拓平和記念館」が開館した。齊藤さんたちのような活動も続けられてきた。

著者は最後に、これらの活動と著者の研究を踏まえて、地域の社会的構造と個人の語りの関連性、戦後再開拓に参加した人たちのその後、中国東北地域史研究のなかで満州移民事業が中国でどのようにとらえられているのか、現地の人々は満州移民をどう見ていたのかの 3 点を今後の課題として提起している。

本書は重厚な研究書でありながら、読みやすく、わかりやすかった。各章に「はじめに」と「おわりに」が置かれている。「はじめに」でそれぞれの章が解明する課題が措定され、「おわりに」でその要約と結論が示されている。このような本には滅多に出会わない。

（まっさき・ちひろ：1942 年、茨城県那珂市生まれ。農協職員、爪連町長、ひたちなか農協代表理事専務などを経て現在、茨城大学人文社会学部市民共創教育センター客員研究員。著書に『農協に明日はあるか』、『ほしいもの百年百話』など）

PTSD の日本兵と家族の交流について

黒井　秋夫

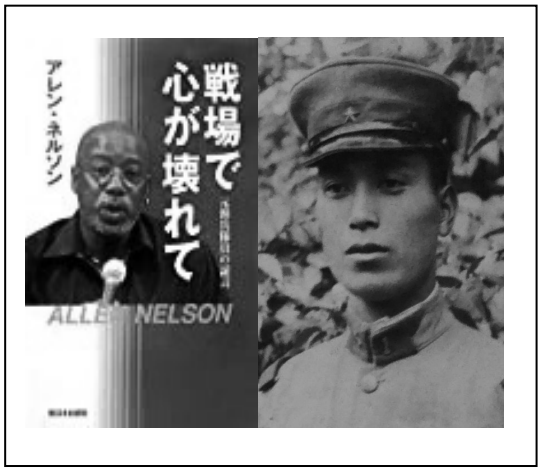
「PTSD の日本兵と家族の交流館・村山お茶飲み処」は日本が二度と戦争を起こさない。
誰もが安心して暮らせる社会」をめざし活動しています！

「日本兵の PTSD の存在」を課題に掲げる活動組織は「ＰＴＳＤの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」が日本最初で唯一であり、その資料館も「PTSD の日本兵と家族の交流館・村山お茶飲み処・子ども図書室」しかないと言う事実がこの問題の困難さ、底深さを物語っています。

私の父・黒井慶次郎（1912～1989）は 20 歳で徴兵され 34 歳で復員するまで 2 回従軍しました（1932～1934、1941～1946）。彼は戦争体験含めて、一日中口を開かず、笑顔のない暗い人間でした。復員後の彼は定職を持たず。出身地山形県近在の工事現場の日雇い労働者で暮らしは貧乏でした。家族に降りかかる問題は、いつも妻や私・黒井秋夫より８歳年長の長男（1941～2017）に押し付け、無責任で、私は中学、高校と進むにしたがい「父のような男には絶対なるまい」と思うようなり、尊敬の念を持つことも終生ありませんでした。情愛が通いあう親子関係もありませんでした。

★父は戦争体験により「PTSD を発症し人間が変わった」と理解納得した！
★「PTSD の復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」を立ち上げる！

2015 年 12 月、私は妻と乗船したピースボートの船内企画でベトナム戦争のアメリカ軍帰還兵、アレン・ネルソンさん（1947～2009）の DVD を見ました。「戦場体験で心が壊れてしまった。恐ろしい光景が夢に出てくる。昔の自分には戻れない」と沈痛に話すアレンさんと私の父の無口な暗い顔が、その瞬間に重なりました。戦争体験で心が壊れ、元の自分に戻れない別人になってしまった父・黒井慶次郎を、本来の父親と見間違っていたのではないか！それは雷に打たれたような衝撃でした。それから「父と暮らせば」として従軍した父親を語りあう交流会を船内で呼びかけ、都合 3 回開きました。



その中で、奈良県の女性の父は特攻隊員でしたが出撃数日前に、終戦の 8 月 15 日となりました。普段は良い人なのに、スイッチが入ると妻（話し手の母）に暴力を振るいました。90 才を越えて認知症を発症し、病床で戦友の名を呼び「✖✖よー、俺は卑怯者だ。許してくれえ！」と元の兵士に戻り、叫びながら亡くなりました。またある人の義弟は戦争前、働き者だったのに、復員後は徘徊の毎日で「ふうてん」と呼ばれていました。そういう実例からアジア太平洋戦争で PTSD の日本兵が存在したことを確信しました。これを歴史に埋もれさせてはならない、多くの人たちに戦争の真実を知らせたい、という思いから私は 2016 年 3 月に「亡き父と二人三脚で日本軍兵士の PTSD の語り部になりたい」と皆さんに宣言し、下船から 2 年後、

2018 年 1 月 17 日に「PTSD の復員日本兵と暮らした家族が語り合う会＝以下、語り合う会」を立ち上げました。

下船後、父が唯一残した「満州事変記念アルバム」を詳しく見ると、「無責任で、口を閉ざし、きちんと働かない暗い顔の父親」という私の知る父とは全く違う 20 歳の父の姿がありました。「われら若人を乗せた陸軍御用船宇品丸で憧れの満州の地に第一歩を印した」「昭和維新の先駆、昭和維新を飾る導師であらねばならぬ」などと書いて、日本を維新するのだという使命に燃えた若者がそこにはいたのです。また、1945 年の終戦前年は日本軍の最前線、中国・宜昌で軍曹として 15 人前後の部下を指揮する立場でした。若さ溢れる青年であり、軍曹として一瞬の判断で部下を指揮する戦前の颯爽とした父と、戦後陰鬱な父は全く別人であり、戦争の後遺症で戦争神経症を発症し終戦時を境に人間が変わったと私は理解しました。

2018 年 1 月に「PTSD の復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」の立ち上げ以降 5 回の学習交流会を開催し、日本兵のトラウマの研究者、中村江里（広島大学准教授）さん、北村毅（大阪大大学院准教授）さんの講演や参加者どうしの体験交流会を実施しました。2018 年に放映された NHK の「隠された日本兵のトラウマ～陸軍病院 8002 人の病床日誌」が反響を呼び「語り合う会」ホームページの閲覧者が跳ね上がりました。

★「PTSD の日本兵と家族の交流館・村山お茶飲み処・子ども図書室」開設・開館！

私は 2015 年に前立腺ガン摘出手術をしましたが、2019 年 8 月に再発し 2 か月間放射線治療を受けました。また心臓頻拍で 12 月に手術を受け、自分が健康なうちに「語り合う会」を形あるものに残したいと「PTSD の兵士の資料館」建設を思い立ち、2020 年 1 月着工、5 月 10 日に「PTSD の日本兵と家族の交流館・村山お茶飲み処・子ども図書室＝以下、交流館」を開館しました。

交流館は①「PTSD の復員日本兵と家族」の声、情報を発信します。②「PTSD の日本兵と家族」の心の傷が癒される交流を続けます。③子供たち、高齢者、地域の人たちが集い笑顔溢れる交流を作ります。④日本から中国、朝鮮半島、アジア、世界に平和と仲良しの虹の架け橋を渡します。以上 4 項目の目標を掲げています。

5 月 10 日の開館以来、11 月 3 日現在 245 人が来館されコロナ禍の中、予想を超える皆さんに訪問いただいています。来館者にはそのつど、PTSD の日本兵・展示パネルの説明をしています。

★中国人・李素楨さんに父の所業を謝罪、交流の始まり！

★中国、朝鮮半島、アジア、世界に平和と友好の虹の輪をかけたい！

2020 年 8 月 23 日の交流館主催の「村山うどんを食べる会」に参加した中国人女性・李素楨さん（吉林省師範大学大学院教授、桜美林大学講師）が公主嶺出身と聞いて驚きました。20 歳で徴集された父親の初任地が公主嶺なのです。父親の引き合わせと直感しました。「悪いことをしたと私の代わりに謝ってくれ」と言っている父親の声が聞こえました。

私は李素楨さんに「あなたのご両親、村の人たちに父親がなしたであろう殺害など非道な行為と多大なご迷惑を息子である私は心から謝罪します。どうぞ父親を許してください」と謝罪しました。李素楨

さんは私の肩を抱き、手を握り「日中友好、日中友好！」と返してくださいました。その後、次のようなメールが届きました。

『お父様の代わりに謝罪して下さったことに、中国人として、とても感激しました。あの戦争は指導者の責任だと思っています。お父様は普通の庶民として、戦場に行かされたのであって、お父様の責任とはいえません。お父様は加害者であったけれども、被害者でもありました。国境や民族を超えて、平和な社会を作るために、お互いに協力し、頑張って行きましょう。中国に黒井さんの活動を伝えたいと思いますし、民間レベルでの平和のための活動にお互いに頑張っていきましょう。』

私は感激し亡き父に見せたいと思い、李素楨さんのメールを額にして仏壇の父の写真の前に飾っています。李素楨さんとの交流は今も続いていて次のようなお便りが届いています。

『子ども図書室を設置されたとのこと、私たちも大賛成です。今後、子どもたちに戦争体験を引き継ぐことになるでしょう。日中子ども交流に関する読む本を贈呈いたします。貴資料館のご発展と日中友好の懸け橋になることを信じます。今後私たちも尽力いたします。お互いに協力し合っていきましょう。』

「PTSD の復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」の活動は、日本の人たちはもとより日本の起こした戦争により多大な被害を受けた中国、朝鮮半島、アジアの人たちにとどまらず欧米の人たちにも理解され、賛同いただく必要があると思います。李素楨さんとの交流を大事に育て、アジア、世界に平和と友好の虹の輪をかけたいと願っています。

★「PTSD の日本兵の存在」を子どもたちに語り継ぐ！

交流館東に学童保育・児童館が隣接しています。そのため「お茶とお菓子が無料って本当ですか？入ってもいいですか？」と言いながら、3 人、5 人と連れ立って来館する子どもが増えています。子どもたちの来館者増は交流館の当初の未来像を変えようとしています。

当初の書籍・資料の展示やニュースの発信対象は成人、大人でした。しかし、未来に語り継いでいくことを考えると、「子どもたちに伝わる」ことこそ重要ではないか！と考えるようになりました。その為、子ども図書室開設を決めて絵本などの寄贈を呼びかけたところ、絵本作家の方などから多くの本が寄せられています。5 年後、10 年後、20 年後の交流館では、今来館している子供たちが青年になり、学生になり、社会人になり、そこから語り部の後継者が生まれているかもしれません。想像すると将来が楽しみです。

2020 年は「語り合う会と交流館」が全国 20 の新聞社に 27 回（1074 万世帯・全国 20%）紹介されました。10 月 8 日の西日本新聞は「戦争で精神障害日本兵も・識者、被害直視を」と 1 面 TOP で伝え 25 面では当会の活動も紹介しました。「PTSD の日本兵の存在」を 1 面トップで扱う新聞報道は初めてですが、この問題への関心の広がりを現わしていると思います。

とは言え、「PTSD の日本兵の存在」を国民のほとんどはまだまだ知りません。「PTSD の日本兵の存在」

が多くの皆さんに知れわたることが「戦争はダメだよね」の世論を作り、「日本が二度と戦争を起こさない。誰もが安心して暮らせる社会」に繋がると思います。

現在、海外派兵された自衛隊員にもPTSDが発生し、50人を越える自殺者、病床から起き上がれない自衛隊員も出ています。兵士のPTSDは現在進行形、未来形の日本の問題でもあります。「語り合う会・交流館」は「日本が二度と戦争を起こさない。誰もが安心して暮らせる社会」をめざして活動を続けます。

ホームページ https://www.ptsd-nihonhei.com

☎０８０-１１２１-３８８８（代表・黒井秋夫）qqkc6av9@ceres.ocn.ne.jp

連絡先　〒208-0001　武蔵村山市中藤３－１５－４

（くろい・あきお：1948年、山形県山添村（現・鶴岡市）生まれ。山形大学人文学部中退後、芝浦工大生協勤務、新潟大学生協、市民生協にいがたを経て、日本生協連（コープ共済連）、2010年退職。2018年「PTSDの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」立上げ、現在に至る。**）**

戦後７５周年『今に想う』出版に際して

大島　満吉

葛根廟事件とは・・・

私達の興安街命日会は、旧満州国の興安街の避難民が目的地である葛根廟を目前に、ソ連軍の戦車隊に虐殺され、一割しか生き残れなかった事件の犠牲者を慰霊する団体です。

事件は八月十四日午前十一時四十分に起きました。その時刻に合わせて慰霊祭が毎年行われており、六十年をこえる歴史を持っています。場所は目黒区にある天恩山五百羅漢寺を菩提寺としており、毎年三十名前後の集まりでした。それが近年は参加者が増えて五十名を超えるのが普通になりました。事件の生還者が少ない上に、遺族も高齢化して集まりにくい状況なのに参加者が増える数少ない団体なのです。

出席者は事件の生存者が五名、帰国残留孤児が三名、事件の遺族が五名、同じ興安街に住んで別ルートで帰国した人が五名、それに満州に縁のある人が数名というのが一般的でした。

それが作家の人や報道に関わるジャーナリストの人、大学教授、弁護士、社会人塾の塾長、元高校教諭、満州経験者、満州研究者、語り部、開拓団の関係者等が二十人位集まり、慰霊に参加してくれます。北海道から四国、九州の人まで出席してくれるのです。戦後生まれの人も１０人近くおられます。

葛根廟事件の命日に

２０１９年８月１４日の命日会で「来年は戦後７５周年にあたりますので命日会として記念誌を発行したいと思います」この様に発表しました。その意図は下記の通りです。

７５年とは世代も大きく変わります。戦後生まれの人が８０％になるのです。

９０歳以上の戦争体験者の方は減るばかりで、慰霊祭の出席も限られてきます。

実を言うと未発表の手記があるのです。これらの事実を発表する時期と考えました。本多・山原・白濱・田原氏の手記です

興安総省の最高責任者であった白濱晴澄参与官の娘さん真砂子氏が命日会で弔辞を述べてくれた一筆は端的に犠牲者を慰めるものでした。

８月は戦争を顧みる月間なので多くの投稿が期待できると考えます。女学校一年生の伏見恵子さんが「この道」として書かれた一人ぼっちの戦争を読んで触発されました。

森繁久彌氏の没後十年に出された全集５巻の中に平和を望む強い気持ちにも動かされたのです。

田中美智恵さんが「生かされて」の詩に感動し体現した事を訴える意味も有りました。

満州体験のある私達の年代は、残留孤児にならなくて良かったという思いが強いのです。こうした歴史をしっかり本にして残したいと考えました。

この会に出席されている皆さんはそれぞれに戦争体験がお有りと思います。

葛根廟事件に限らず、「今に想う」と題した記念誌なので各人の思いを書いて頂きたいのです。冊子は８月に完成させます。内容は自由です。用紙も自由です。字数も自由です。締め切りは二月一杯でお願いします。概ねこのような発表でした。

完成した記念誌

念願の冊子は７月に完成して配布を始めました。

当初計画は４００部でしたが結果として６５０部位が必要になりました。

投稿した記載者は２６名です。男性１０名。女性１６名です。９０歳以上が５名。戦後生まれは２人、残留孤児が１名ほか１８名です。

葛根廟事件の生還者は５名と事件の残留孤児１名が載っています。満州体験のない人が８人書いていますが、この人達も日本での戦争体験や戦争以降に起きる日中の交流や報道の在り方など含蓄のある話が書かれています。

葛根廟事件に遭遇したのは浅野隊でした。もう一方の高綱隊にて避難した人たちと別ルートで避難した７名も書いています。

興安街に居住したこともない人も４人が書いています。事件で両親を亡くした遺族が一人加わり、合計で２６名でした。

特筆したいのはジャーナリストの人が五人も書いている事です。

全部で１３０頁位の小冊子なので読みやすい内容です。命日会会員用の記念誌なので販売を目的としていません。私家版のような冊子ですが定価は１５００円と表示しています。書店には出ていません。ご希望の方は命日会代表の大島満吉氏宅にお問い合わせ下さい。

本多フクエさんの記述には、８月１３日蒙古軍の襲撃が書かれています。

興安に在った軍官学校（陸軍興安学校）の反乱が起きて日系教官が射殺された事件が避難民の行く草原で起きました。その騒動は私も体験しています。軍の記録にもあります。本多さんが民間人の立場で体験した話ですが軍の記録と符合しています。

戦争に……してタラ、とか……してレバ、は通用しないのですが、７月にポッダム宣言の受諾を求められた日本は、聞く耳持たない軍部の強権で無視されてしまいました。

７月末にも受諾していたら、ソ連の参戦は無く、原爆もなく、北方領土も失わなかったかも知れません。

内部の混乱も有って別の展開も起きていたでしょうが、歴史を振り返るとあの時という一瞬の時間が大きく作用した実例が太平洋戦争の終結でした。ソ連への抑留もなく、残留孤児も違った形になっていたでしょう。

教育とかウソの発表とか生かされた自分の話しが多いのですが、言葉で気になることがあります。

後期高齢者は失礼です。二階幹事長と麻生大臣は後期高齢者ですが嬉しいでしょうか。私は７５歳以上を敬寿高齢者と呼称を変えるよう主張しています。敬老の日も７５歳以上を敬寿として祝うのです。

残留孤児も冷たい言い方です。国には責任が無いと言っているように感じます。「邦人遺児」として欲しかったと思います。

借金を借金でないとカムフラージュするのもやめて欲しい。文書改ざんＯＫとか黒塗り文書のまかり通る世の中は危険信号と受け止めます。

戦争体験の話は歴史の教本と云えます。

生き残った人たちが「生かされて来た自分」を書いているからです。

日中関係がやや心配です。相互に時間をかけて作った基盤が揺るぎだして来ました。民は善良です。書いている人たちも皆善意を感じます。

戦争は絶対にしてはいけません。７５年続いた平和を更に長く続けられる努力をしましょう。それが戦争体験者の切なる願いです。

黄泉の国に旅立つ人

昨年に発表して作った記念誌ですが、この一年の間に記載者である田原さんと山原さんがお亡くなりになりました。

高田さんの書かれている依田照子さんも亡くなりました。残留孤児となったウユンさんは何カ所かに出て来ますが、日本にいる実兄の立花甫さんも亡くなりました。此の冊子を見ることなく黄泉の国に行ってしまわれたのです。

この記念誌を作るにはぎりぎりの状態だったと、こちらも今にして思うのです。

満洲関係の団体で戦争を語る証言集は恐らくこれが最後の団体と思われます。

父が軍人であった菅原さんは戦後の活動を書いていますが１００冊を配りたいと要望されました。

命日会を主宰している大島も満州仲間以外に７０冊を要望しています。

残留孤児で植樹活動を展開したウユンさんに感激して歌を作った甘利さんは５０冊を希望しています。ウユンさんの実家である徳島県の立花家では植樹活動を支援した人にこの本を配りたいそうです。

記載者である藤原氏、大櫛氏、岡部氏も関係先に配りたいと意欲的です。

７月下旬に報道関係にお知らせすることにしました。８月の戦争特集を報道するには絶好の材料になるからです。

報道機関にお勤めの現役記者は全員戦後生まれです。国会議員の皆さんも戦争は学問の上とか書物や写真で見られるものの、実体験は有りません。

Ｆ３５戦闘機とか空母購入とかイージス・アショアの配備計画とかＦ２戦闘機の国産化とか話題になります。憲法に自衛隊を書きこんで戦争が出来る国にしたいと考える国会議員も居ます。

見方に依ればどれも必要なのでしょうが軍備や防衛には切りがありません。

戦争にならない努力にカネを使うべきで、見方によっては一番無駄な物が軍備なのです。戦争で得したものは無いのです。朝鮮特需があったようですが、そんな経済の為に今でも両者は仲良くないのです。

寄稿者の感想

寄稿者にお届けした初版を見た各人の感想を以下に書きます。

甘利和美氏　名作に優る名作に仕上がっています。未来に語り継ぐ宝物、本当に素晴らしい。

藤原作弥氏　表紙も裏も綺麗です。これなら恥ずかしくない立派な内容です。

新井美恵子氏　美麗な作品に仕上がりました。個々のお話も上々です

田中美智恵氏　出版社並みの構成です。読みやすい。脱帽感謝です。

岡部滋氏　個々の話も立派です。８月はこのような本が喜ばれるでしょう。

菅原勝彦氏　珠玉の体験記です。感動しました。１００冊要望します。

大島満吉　校正中に読んで涙が滲んできました。これは立派な記念誌と思う。作って良かった。

下嶋哲朗氏　表紙に遠く戦車の轍を追うかのような姿の写真ですが、物語を表しています。頁をくるごとに迫って来る内容です。よく作ってくれました。

伏見恵子氏　７５年の思いはどのページも文字が涙でかすみます。夏がくる度に戦争の酷さ哀しさが身に沁みます。残りの命、一羽でも多く鶴を折ります。

手島有為子氏　大変なお仕事でお疲れでしょう。８／１４日は自宅でお祈りします。

申し込み・お問い合わせ先　１７８－００６５　東京都練馬区西大泉５－６－８

大島満吉　　℡０３－３９２４－７７６４

（おおしま・まんきち：1935（昭和 10）年生まれ。群馬県出身。1946 年、旧満洲より引き揚げる。東京の家電会社を定年退職。現在、興安街命日会代表。著書『流れ星のかなた』他、私製本多数あり）

井出孫六先生の御逝去を悼む

寺沢 秀文（満蒙開拓平和記念館館長）

去る１０月８日、直木賞作家でもある井出孫六先生が御逝去されました。享年８９歳、私ども満蒙開拓平和記念館も、また私個人としても大変お世話になっただけに大変残念な思いでいっぱいです。井出先生には当記念館の設立準備会（平成１８年８月発足）が立ち上がってしばらくした頃から準備会の名誉顧問になって頂いて以降、大変お世話になり、記念館で発行している「図録」の中にも一文を寄せて頂いています。また「方正友好交流の会」の総会後の記念講演でもお話しいただいたこともある等、大変お世話になった先生でもありました。

井出先生は１９３１年（昭和６年）、長野県の旧臼田町（現佐久市臼田）の、元禄時代から続く造り酒屋である名門・井出家にお生まれになり、東大仏文卒、中央公論社勤務の後、文壇に入られています。ご兄姉には衆院選当選１６回、農林大臣などを務められた故井出一太郎氏、評論家の故丸岡秀子さんなどがおられ、またご親戚には厚労大臣などを務められた甥の故井出正一氏などがおられる等々と政界、文学界等にも多くの関係者を輩出されている名門のご出身でもありました。

私が井出先生と初めてお会いしたのはもう１５年ほど前のこと。２００３年(平成１５年)７月、私も会員である飯田日中友好協会の創立４０周年記念事業として井出先生を飯田市にお招きし講演会を開催させて頂いた際のことでした。井出先生をお招きしたのは、井出先生が早くから中国残留孤児問題に強いご関心を寄せられ、熱心にこの問題に取り組まれている方であり、『終わりなき旅（中国残留孤児の歴史と現在）』（１９８６年刊。大仏次郎賞受賞作)などを始めこれに関する著作等も多いこと等からでした。

私が井出先生と直接にお便り等交わさせて頂くようになったのは、それよりもっと後になってからのことで、恐れ多くも先生の著書の書評を書かせて頂いたことからでした。２００８年(平成２０年)のことでしたが、某紙より先生が書かれた新著『中国残留邦人』(岩波新書)の書評を書いて欲しいという依頼があり、厚顔無恥にも書かせて頂いたご縁からでした。そんなご縁等もあって、その時にはもうスタートを切っていた「満蒙開拓平和記念館」事業準備会の名誉顧問になって頂けないかと厚かましくもお願いした次第でした。２００９年（平成２１年）８月、先生が夏の間は毎年ご滞在になる蓼科高原「三井の森」にある先生の別荘を準備会役員一同にてお訪ねし、名誉顧問への就任のお願いを申し上げたところ、「私などで良ければ」とご快諾頂いたのは誠にありがたい限りでした。

以降、井出先生には記念館のある長野県南端の阿智村までお越し頂いて特別講演をして頂いたり、記念館事業にも様々なアドバイスを頂く等してきました。井出先生は前述の通り中国残留邦人問題にも強い関心を寄せられており、かつて全国で提訴された「中国残留孤児訴訟」の際には孤児側の証人として先生自ら裁判所の証言台に立たれ、孤児問題の根本等について詳述される等深く関与されています。これらの調査研究等のために先生が収集された膨大な関係書籍等の一部も記念館にご寄贈頂いており、それを頂きに蓼科の別荘や東京府中市のご自宅にお伺いすると、奥様と共にいつもにこやかな笑顔でお迎え頂きました。とても気さくなお人柄で、満蒙開拓や残留孤児のことなどになるととても熱心にお話になっておられたのが今でも思い起こされます。

それだけに今回の訃報は本当に驚くばかりです。訃報を聞いた翌日、府中市のご自宅にお悔やみのお電話を申し上げたところ、奥様から先生の最後のご様子をお聞かせ頂きました。先生は最近までずーっとお元気だったものの、９月半ばにお腹に悪いものが見つかり緊急入院して手術。その後の経過が余り芳しくなかったとのことにて肺炎等併発されてお亡くなりになったとのこと。最後は穏やかにお眠りになったとのことでした。

奥様も電話口でおっしゃっていましたが、先生は当記念館のことを「いいものを作ってくれた」といつも誉めてくださっていたそうです。また、先生御一家は我が家のリンゴを使ってのリンゴジュースをとても気に入って頂き、先生も愛飲されていて、緊急入院する前まで「美味しい、美味しい」とお飲みになっていたのだそうです。私も時々先生に記念館の経過報告等のお便りを差し上げると、いつも自筆でお返事を下さり、記念館や私への激励の言葉を頂いていたことを本当に有り難く、懐かしく思い出します。

奥様によれば御葬儀は当面は家族葬でとのことでした。このような時期で無ければ直ぐにでも弔問に飛んでいきたかったところですが、それも叶わずコロナが恨めしい限りです。

今は、井出先生からの長年のご厚情に厚く御礼を申し上げ、記念館関係者一同と共に先生のご冥福を心よりお祈り申し上げたいものと思います。合掌

蓼科「三井の森」井出先生(中央)の別荘前にて先生御夫妻と共に。(2009.8.18)

「満蒙開拓平和記念館」建設予定地にて井出先生(中央)と共に。(2010.1.24)

金丸千尋さんを偲ぶ

～日中友好文化交流に一生を捧げた人～

新宅 久夫

金丸千尋さんは、去る 2020 年 8 月 14 日に惜しまれて逝去されました。1929 年生まれ、享年 91 でした。

山梨県に生まれ、1943 年旧満鉄奉天の技術員養成所を終了し、1945 年満鉄チチハル検車区に配属され、8 月に敗戦を迎えました。

1946 年 4 月八路軍（解放軍）三師警衛連に入隊後、西満軍区軍工部に転出したが、怪我の為チチハル市人民政府に転属、日本僑民協会の仕事に従事されました。

1952 年～1958 年北京・武漢の行政学院にて学習、1958 年日本に帰国しました。

中国での貴重な体験を生かして、一貫して日中友好運動に身を投じ、日中文化交流協会に勤務して 1964 年、松山バレエ団の訪中公演の際、毛沢東主席、周恩来総理との会見に立ち会い、1965 年周総理とニチボー貝塚・大松博文監督の会見にも立ち会いました。

また、意外に知られていないのが、黒竜江省方正県にある日中友好園林に建立されている「麻山地区日本人公墓」（「方正地区日本人公墓」の隣に立っている）の建立実現に陰ながら貢献した事です。

その他　メディア関係の「テムジン」設立に参画し、ドキュメンタリ番組制作に関与、中国に留用された帰国者の組織である「日中平和友好会」の初代事務局長・顧問として、またその他、チチハル市に在住した帰国者の親睦組織、「龍華会」を立ち上げ活躍されました。

以上、日中友好関係に数々の業績を残されました。ここに　謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（しんたく・ひさお：関東日中平和友好会長）

写真：左が金丸さん、右が新宅さん。2013 年 9 月撮影

金丸千尋さんがこの８月亡くなられた。その追悼を込めて次頁以降に、私がインタビューして書いた＜金丸千尋―中国・東北との友好に駆けた男＞（「風雪に耐えた『中国の日本人公墓』ハルビン市方正県物語」2003 年４月、東洋医学舎刊）、そして『星火方正』５号（2007 年 12 月刊）に寄稿していただいた＜中国人の寛大さと慈愛心＞を掲載する。

金丸千尋さんは本会の顧問を発足当初から務めていただいた。私が今でも強く記憶に残っているのは、天安門事件後にお会いした頃のことである。金丸さんは事件後、中国を訪問した際、軍幹部に「人民の軍隊がなぜ、人民に発砲するのか」と涙を流して抗議した話である。人民解放軍の前身である八路軍に参加した金丸さんだからこそ言える言葉である。以下の二編をご一読いただきたい。（大類善啓）

金丸千尋
――中国・東北との友好に駆けた男――

文・大類善啓

■…互いに信頼し合うこと、そして、何をしてあげたか、何をしてもらったか――考えるだけではなく、行動すること。戦後、解放戦争にも参加した金丸千尋の教訓である。そして中国東北の広野を駆けめぐって日中友好を具現した優しくたくましい男の記録である。

戦後、国交回復前から日中友好運動に携わった人たちは多いが、ここに登場する金丸千尋さんは知る人ぞ知る、文字通り日中友好活動に今なお全身で邁進されている方である。その携われた事項は、遠くは一九六〇年代前半の松山バレエ団や新劇団、前進座の中国公演、近くは日本が生んだ世界的ジャズピアニスト秋吉敏子さんの大連公演など数え上げれば切りがない。九九年の夏、瀋陽で建立された「中国養父母に感謝の碑」の件でも奔走された。

もともと金丸さんは、マスコミの表に出ることには積極的ではない。それというのも、中国で事故や栄養不良で死んだ人たち、あるいは国民党の凶弾に倒れ無念の涙を呑んだ人、負傷して片足を無くし、帰国後もハンデを背負いながら懸命に生き、日中の友好の礎を作ったかつての仲間を思うと、申し訳ない、自分が表に出ることは遠慮したい、という気持ちになる。金丸さんのそんな気持ちをあえて押して、方正県に光を当てる本書にちなみ取材に応じていただいた。

中国大陸との出会い

方正県との話の前に、まず金丸さんと中国との関わりからみてみよう。

金丸さんは一九二九年（昭和四年）山梨県に生まれた。高等小学校を卒業すると満州へ。当時の学校では「行け満州へ」という雰囲気。兵隊に行くか、満州へ行くか。先生の教えの影響も大きいと述懐する金丸さんは、「からだも小さい」から軍隊へ行くよりは満州へという道を選び、中堅技術者を養成する満鉄経営の鉄道技術者養成所に入った。

一九四五年（昭和二十年）四月卒業後、満鉄チチハル検車区に勤務する。入ったと思ったらすぐに敗戦である。満十六歳の時だ。「まだ子供ですよ。ひとり者だし気楽なものだったが、問題は食うことです」

敗戦後も、かつての同僚の中国人たちから飯を食べさしてもらったりしていたので、中国人については怖いという思いはない。それより、ぼろぼろになった靴を見て靴をくれたり、粟のお粥を食べさしてくれた記憶が強く、「困っている人には無条件に同情して一緒に食べろという中国人の気持ち。一視同仁という心の広さ、これが孤児問題でも関わる僕の根本問題ですよ」という。

チチハル市郊外で中国人の農家で働かしてもらったり、ソ連軍使役に駆り出されての重労働。その上、食べ物もなく、栄養失調。そんな中、かつての関東軍の壊れた倉庫の片隅に麻袋を引いて横になり、ソ連軍が列車で運ぶ途中で落ちた大豆を缶に入れ、煮て食べて飢えを凌いでいた。その時、八路軍がやってきた。陳毅率いる新四軍の一部だ。金丸さんたちの姿を見て粟などを持ってきてくれた。そして片言でこういうのだ。

「ショーコウさん、米のメシ。ヘイタイさん、米のメシ。ショーコウさん、粟のメシ。ヘイタイさん、粟のメシ」。みんな平等だから随いて来いという。「もう力も出てこない。このままいたんじゃ死んでしまう。深く考えもせず、随いて行けば命は長らえるだろうと思った」

他の三人は同行しなかったが、一番衰弱状態のひどい金丸さんは一人、八路軍に随いて行った。

人民解放軍へ入る

八路軍の衛生所でカルシウムの入ったリンゲル注射。「からだがポッポしてくるんだ」。少し肉が入った温かいお粥も食べさせてくれた。一週間もすれば力もだんだんつき、一か月たつと、からだは完全に直った。何か仕事をさせてくれと頼み、薪割りを手伝ったり、銃をもらって部隊の移動に一緒に行動した。

四六年（昭和二一年）八月、日本人が引き上げるというので、自分も帰りたいと思うが、若い者と技術者は留用だという。金丸さんも留用組に入っていた。ある日、留用された人たちに、八路軍がみんな集まれという。集まった人たちを前にその男は、日本語でこんな話をした。

その一つは、ややおつむが弱い大正天皇の話を持ち出し、天皇陛下だって人間だ、神ではない。普通の人間なのにあなたたちは騙されていた。もう一つは、もうすぐこの戦争（国民党との戦い）は終り、必ず平和になるだろう。我々が勝利するまで協力してくれ、という言葉だった。

金丸さんはこの二つの話が今でも強く印象に残っている。話をしたのは、戦後対日関係で大きな役割を果たした趙安博氏（中日友好協会・初代秘書長）だった。金丸さんが東北民主連合軍（八路軍）に入るきっかけはこんな事情である。

その後、軍工部に配属され、若い人たちに旋盤の技術などを教えて各地を転戦。新中国成立後も、チチハル市政府、解放軍華北軍区訓練団、湖北省政府機関（武漢）などに勤務した。

この武漢で金丸さんは、後に結婚することになるキヌ子さんと出会った。そして武漢から一九五八年（昭和三三年）、興安丸でキヌ子夫人と共に帰国した。その前年に結婚したキヌ子さんが、実は方正県にたいへん縁のある人なのである。

キヌ子夫人と方正県

キヌ子さんは三歳の時、埼玉県秩父地方の中川村開拓団として家族とともに満州へ渡った。昭和十四年のことである。お父さんは敗戦前に病

気で亡くなった。敗戦になると暴動が発生。土地を奪われた現地の人々の怒りが爆発したのだ。キヌ子さんは六人兄弟（姉妹）の下から二番目、一番下が妹である。長姉は看護婦、長兄は兵隊として一家とは別れていた。

お母さんとキヌ子さんたち四人の子供たちの逃避行が始まった。長野県から入植した泰阜村の人々と一緒になった逃避先は方正県である。その間、関東軍に守ってもらおうとしたが、関東軍は子供は泣くから処分しろという。「お母さんはやむなく下の妹を死なせた。女房は歯をくいしばって助かったんです」。その冬、お母さんは、発疹チフスで死亡。亡くなる前に三人の子供たちを中国人に預けた。

ところが長姉がその頃、八路軍に看護婦としていた。風の便りに家族たちが方正県にいるという話を耳にしたお姉さんは、八路軍の銃を持った護衛兵付きで、方正県まで探し訪ねてきた。そして、とある部落にいた三人の妹たちを見つけ、キヌ子さんたちはお姉さんに引き取られた。

その後、キヌ子さんたちも八路軍に入った。保母さんということだが、まだ十二歳の子供である。キヌ子さんの仕事は、幹部の子供たちを遊ばせることだった。キヌ子さんも八路軍の転戦に従い各地を歩いたが、もしお姉さんが探しにこなかったら、キヌ子夫人も残留孤児になっていたかもしれないのだ。

幻の藤原長作さんとの出会い

さて、金丸さんと方正県のことでいえば、藤原長作さんとの逸話もある。藤原さんが独自の稲作法で中国・東北の寒冷地で役立ちたいという話が、ある人を通じて金丸さんの所にきた。これはぜひ東北三省へ行ってもらえれば役立つだろうと思った金丸さんは、知人のある学者に話したところ、その人は、東北地方はアルカリ土壌だからダメだと話にのってくれない。やむなく、話を持ってきてくれた人に、日中友好協会の副会長だった赤津益造さんを紹介し、赤津さんに相談しなさいと話をした。赤津さんと金丸さんとはしょっちゅう日中友好運動で話し合う仲だった。藤原さんは、結果的には赤津さんの手を経て方正県へ行くことになるのだが、金丸さんとの縁も密かにあったのである。

その方正県には、「方正地区日本人公墓」と並んで「麻山地区日本人公墓」が建立されている。この麻山地区の日本人公墓建立に金丸さんは多大な貢献をされた。そのことは『方正県史』にも金丸さんの名前を記して書いている。

麻山事件の遺族との邂逅

一九四五年八月九日、ソ連が参戦。満州へのソ連軍の突然の侵攻は、満州開拓団の人々を混乱の坩堝に陥れた。頼みの関東軍は、守るべき人々を置き去りにして遁走した。避難途上にあった哈達河開拓団は、満州の東部国境に近い麻山で、ソ連軍の包囲攻撃を受け行き止まった。

このままでは婦人たちはソ連軍の凌辱にあう。身近に迫った危機に婦女子四百数十名が自決をするということになった。それを四十数名の男たちが小銃で介錯する。残った男たちは、その後ソ連軍に斬り込むことになっていた。しかし、それも果たせず間もなく敗戦を迎えて一部の人々は祖国に帰還した。

この痛ましい麻山事件については、中村雪子さんのたいへんな労作である『麻山事件』（草思社刊）が、詳しく叙述しているのでぜひ参照していただきたい。

麻山で散った女性たちの遺骨が戦後もずっと野晒しになっている。戦後悶々と自責の念と悔しい思いをしていた遺族たちは、なんとか遺骨を収集し慰霊したいと長年思っていた。当時十八歳だった納富善蔵さん（団長直属の伝令として混乱の中、馬を飛ばして四キロ以上に伸びた隊列の連絡にあたっていて生き延びたが、両親、弟妹三人を失っている）たちは哈達河会を設立しその実現に奔走した。

やっと第一回目の訪中が一九八二年（昭和五七年）に実現した。敗戦後、公式には日本人として初めての鶏西市訪問である。しかし、数日来の大雨のため麻山へは行けなかった。第二回目が翌年、テレビ局も同行し麻山までは行けたが、現場では二十分。写真撮影も慰霊の行事も許可されなかった。散乱する遺骨を前に、遺族は再度涙を呑んでの帰国だった。

帰国後、関係者は第二次訪中記を作成、関係する方面に遺骨収集の協力を要請した。それを知った中国現代史の研究家である野上広生氏が、「中国の東北に強い」という金丸さんに連絡をしてきた。

金丸さんは思った。本来は政府がやらなければならないが、遺骨については厚生省はもうやめようという考えだ。政治家は票にならないからやらないだろう。となると民間でやらざる得ない。そう考えた金丸さんは、「遺骨収集はできても、それを日本に持ってくることはできないだろう。しかし、方正県には日本人公墓がある。そこに納骨するなら可能性がある。それならひと肌脱ごう」と納富さんに話した。

孫志堅との出会い

その時、金丸さんの頭の中には、孫志堅という男の名前が刻み込まれていた。孫志堅は方正県の公墓建立の時、黒龍江省から国務院と外交部に許可をもらいに北京に赴いた男だった。そして金丸さんとは六四年の松山バレエ団のハルビンでの公演の時、一切の世話をやいてくれた人だった。その時、孫氏といろいろ話した金丸さんは、お互いチチハルなどにいたこともあり、共通の友人がいることを知って肝胆相い照らす中になった。

孫氏は、文革中はご多分に漏れず迫害され、死刑の宣告も受けたという。もちろん金丸さんとの交流も途絶えていた。

ところが七八年の訪中の時、金丸さんは孫氏と再会し、お互いの健在を喜びあった。孫志堅氏はその時、黒龍江省人民政府外事弁公室副主任、中国人民対外友好協会黒龍江省分会副会長という要職である。

納富さんから話を聞いた金丸さんは、すぐに孫氏に電話を入れた。孫氏は「わかったが、まず調べてみよう」という。二、三日後電話すると、「人を派遣したが雪があってわからない。骨があるということは噂としてある」との回答だった。訪中した金丸さんは孫氏に、日本人の風俗習慣として納骨しないと浮かばれないという気持ちを話し説得した。

その後、孫氏と黒龍江省の陳雷省長が香港に来るという。金丸さんは香港に飛び、最終的に合意になった。

八四年（昭和五九年）第三次訪中で、麻山への遺骨収集が実現。マスコミ三社も同行。方正県に着けば、前からあった「方正地区日本人公墓」の隣に、同じ大きさで「麻山地区日本人公墓」という墓が建立されている。驚くようにスムーズに運んだ経緯も、金丸さんと孫志堅氏との長い友好的な交流がもたらしたものなのだ。

最後に金丸さんは、日中関係についてこう語った。第一に信頼し合うということ。そして第二に、中国の人々は、何を我々にやってくれたか、そして何を我々がやったかを考える人たちだという。口先だけではない行動が大事なのだと結んだ。

中国人の寛大さと慈愛心

金丸 千尋

中国で唯一の日本人を祀る「方正地区日本人公墓」が１９６３年、中国によって建立された。この「公墓」は、『侵略戦争に責任がある一握りの軍国主義者と日本の国民大衆とは別であり、日本国民は戦争の犠牲者である』という中国政府の理念と政策が根底にあったことはいうまでもない。

私は戦後１３年間、中国の人たちと共に働き生活した体験から、日本と異なる社会体制や制度、とりわけ日本の侵略によって被害を受けた悲惨な体験を味わった中国民衆の反感・・・という状況の下で日本人の「公墓」を建てることがいかに至難であったかが良く判るのである。この難問に現地の方正県、黒龍江省の関係者は人道主義の立場で問題解決のため奔走し、中国人の感情、日本人の心情、これがもたらす影響などいろいろなことを考慮して中央政府に申請し、最終的には周恩来総理みずからの決裁によって中国の手で「公墓」をつくってくれたのである。

時は流れて１９８４年１０月、敗戦時の旧満州の悲劇のひとつで婦人、子供を含む５００余名が自決した「麻山事件」の犠牲者のために「麻山地区日本人公墓」が方正県に建てられた。これも冒頭の中国側の理念によって実現したものである。私は遺族の依頼をうけて、野ざらしになっていた麻山の犠牲者の遺骨収集と鎮魂の協力を黒龍江省政府外事弁公室の孫志堅副主任はじめ関係者にお願いした。また、日本人の死生観や風習などについて胸襟を開いて話し合った。省政府の諸先生は寛大な心で「麻山で亡くなった人たちは戦争の犠牲者である」といって遺族の悲願をききいれ、遺骨収集のために特別の便宜をはかってくれ、そのうえ省政府の資金で立派な墓をつくってくれた。私は今でも「方正の公墓」の話が出ると往時のことが鮮明によみがえり感謝の念で胸が熱くなるのである。

暑い夏がやってくると旧満州での敗戦の日々を思い出す。１９４５年８月９日のソ連参戦時、私は１７歳で、満鉄チチハル検車区に勤務していたが、「可能な限り多くの列車を準備せよ」と関東軍から命令がきて先輩たちと共に徹夜で車両を整備した。そのころ駅前広場はハイラル方面から避難してきた人たちで溢れ、南下する列車待ちをしていた。ところが私たちが編成した列車に真っ先に乗り込んできたのは銃を構えた兵隊に守られた関東軍高級軍官の家族たちで、大きな荷物を積み込んで慌ただしく南下していった。次の列車も、また次も関東軍の家族が乗車し、命からがら興安嶺を越えて避難して駅前広場にいた人たちは置き去りにされたのである。このような光景は長春、ハルピン、牡丹江でも同様だったとのことである。

一方、国策で僻地の開拓に従事していた人たちは、ソ連軍侵攻の情報が届かず、事態の重大さを知った時には、守ってくれると信じていた関東軍の姿はなく、避難列車も途絶えてしまい徒歩で広野をさまよい続けたのである。ようやく辿りついた難民収容所は劣悪な環境で、飢え、寒さ、疫病のために大勢の人たちが尊い生命を落とした。その数は２０数万人といわれている。この世の地獄さながらの逃避行と収容所生活の中で多くの「残留孤児」が生まれたのである。私はその現場にいた者として絶対に許せないのは、「邦人を守る」と豪語していた関東軍上層部が、いち早く彼らの家族を避難させ国民を置き去りにした卑劣な行為である。あれから６０数年たったが、今でも怒りは収まらず〝軍隊はあてにできない〟という強い不信を持ち続けている。

いま日本各地で中国「残留孤児」の国家賠償訴訟がすすんでいる。２００７年１月、東京地裁は・・・国には「残留孤児」の早期帰国を実現する義務はなく、「孤児」は帰国後、日本社会に適応し自立している・・・・・・旨の判決を下した。裁判官の「残留孤児」問題についての無知、無責任さにはあきれると共に、「孤児」たちの苦しみ、痛みを慮んばからない冷酷さに憤りを覚える。中国の人たちが戦争の犠牲者に同情し、日本人の子供の生命を救い、「日本人公墓」をつくってくれたこととの落差に驚くばかりで、これが〝美しい国〟なのかと考えさせられた。

「残留孤児」が生まれた根本原因は日本の中国侵略政策であることは明白である。見捨てられた可愛そうな日本の子供に愛の手を差しのべて我が子同様に養育してくれたのは、日本の支配下で苦しんだ中国人―とくに貧しかった農民で、彼らの「一視同仁」（差別せず一様に仁愛を施す）の寛大さと慈愛心であった。中国人の他人の痛みを知りいたわる心は、敗戦時の関東軍上層部の醜悪の対極にあるもので学歴や知識水準とはまったく無関係の徳性といえよう。これは五千年の悠久の歴史があり、偉大な中国文明を創造し、〝人生いかに生きるべきか〟を説いた老荘思想や儒教の伝統をもつ中華民族、また、陸地続きの多民族との共生、長い戦乱などの環境のもとで人間同士が助け合い、忍耐づよく強靭に生き続けた中で培われたものに違いない。

気骨と先見性をもった政治家―宇都宮徳馬先生は、生前「平和な国民生活の基本、平和共存は国家の基本理念、日中友好は日本の最大の安全保障」と私たちに教えてくれた。日本は現在及び将来にわたって中国との友好の絆を強め、お互いに平和、繁栄、幸福の道を歩まなければならない。そのためには隣人である中国人はどのような心の持ち主かを知る必要がある。私のつたない体験の一端が参考になれば幸いである。

（本会・顧問）

「一篇の詩が内包する歴史」

柳生 じゅん子

弓田弓子さんの詩集『大連』と出会った時のこと。

弓田さんが大連（現在の中華人民共和国大旅市）におられたのは、昭和十四年初夏から昭和二十二年一月まで、その零歳から八歳までの記憶を辿り、作品にしたとあとがきにある。いずれの作品も書かれるべき詩として描かれているが、とくに「南京豆」をあげてみたい。

南京豆

弓田弓子

四歳になった弟は折り紙をしていた
新聞紙で三角袋を作っていた
私は三角袋になんきんまめを入れて並べていた
おやつだったなんきんまめを
ほんものの店で売っているのだ
店はいまにも目に見えない海水に浸されそうなところにあった
台いっぱいに売り物を並べてしまうと
私と弟はなにもすることがなかった
だまって三角袋につながっていた

母も兄も
この国で最後の売り物をしていたので
私と弟も売っているのだった
買いにくる人を待っていた
一袋でも売りたいとねがっていた
でも買いにきたら
弟の手をつかんで逃げようともおもっていた
私か弟が売れてしまいそうで
怖かったのだ
この国では
この国から一日も早く立ち退かなければならない国の
私と弟ぐらいの子供は
よく売りに出されていたのだった

ときどき人が通り過ぎていく
私の知りすぎている道へ
この夏まで住んでいた社宅の前の石段へつづいている道へ
大連国民学校の校門のわきへつづいている道へ
丘の上の遊園地につづいている道へ

海の底みたいなところから
すっかり覚えてしまった道という道へ
もどりたかった
弟の手を引いて
社宅の二階の右側のドアに
帰ってしまいたいとおもった
だがもう二度ともどれないと母から聞かされていた

折り紙に飽きた弟は
私に寄りかかって眠った
なんきんまめは一袋も売れなかった
日が沈みはじめると
私と弟の
黄土色の低い道へ
四方から海があふれてきそうだった
さらに低い道に
流されてしまいそうだった

母がもどってきた
男装していて
あらあらしく私と弟の店をたたんだ
昭和二十年の秋
私はなんきんまめを抱えて
大連の海を渡る母を追った

日本が敗戦した時、外国に在住していた者達は、まさに難民となった。その、時代の裂け目に遭遇した幼い作者が、体感した者にしか解らない細部の描写と、大連は海だったと描くように、混乱や不安の浮遊感、漂流感まで、解明に再現させている。時代と歴史への深い認識による抑制を効かせ、忘れられない記憶として、作品に仕立てあげている。

ウッと胸を詰まらせながら何度も読んだ。私も旧満州撫順にいて、昭和二十一年秋、四歳で引き揚げている。また、身近な友人や知人達が、拙作「母の帽子」（当時のことを母の語りで描いた）の読後、今まで口にしなかった幼時の難民体験を、次々と聞かせてくれた事とも重なっている。弓田さんから『大連』を戴いたのも、その詩縁であった。

この作品にはさりげない一行にも恐ろしい現実が潜んでいる。けれど一読しただけで理解と共感が得られる年代は限られてきたように思う。敗戦時の場所と状況により厳しさには差があるが、その背景を少し付け加えさせてもらいたい。

「大連の国民学校」は詩集によると、もぬけのからになり、撫順では、すぐに南下してきた人達の大変な避難場所となった。また、敗戦後も一年間東北部にいたＳさんのように「学校の側を通ると、中国の子供達が入っていて、石を投げられた。その時、自分たちの置かれている立場を理解した」と変わる。友だちとも離れ離れになり、学校はもはや子供達の拠り所にはならなかった。

「売りに出される子供」。引揚げ船が出るなら大連港だと、当初から多くの人が殺到したため、混乱の中、迷子や行方不明の子は続出した。また大連に限らず、逃避行で貧窮した

親が、子供を中国の人に手放したのは、その子を生かす最後の手段でもあったのだ。「とにかく親が自分を連れて帰ってくれたことを、一生感謝している」Ｙ氏は多くを語らず、その一点だけを強調していた。

「住んでいた社宅に戻れない」という詩句に、私は母に聞いてみた。すると、満鉄社宅にいた我が家の場合も、十四日夜には出発する手筈を整えていたという。八月九日のソ連参戦後は直ちに、軍人家族、国営企業の幹部家族、満鉄職員にも、引揚げ勧告は出ていた。（早々と朝鮮半島経由で帰国の途についた人達の逃避行は、藤原てい氏の『流れる星は生きている』に代表されるが、私は、母の友人達のさらなる悲劇を、何回聞かされたことだろう。）決められた行李一個分の荷物を準備し、トラックを待つ内に、翌日終戦になった。撫順でさえも、あちこち小さな社宅は襲われた。大きな団地であり、動けなかったことが幸いして、その後一年余り住めたのだと語った。南下してきた満鉄社員の家族を、一年間一部屋づつに受け入れて、三部屋三家族一緒に暮らしたと。

余談だが、十数年前に母は兄と共にその家を訪ねている。団地はまだ半分位残っていて、当時は現地の人達が二家族で暮らしていたと。近所の人が集まってきて、煙突や大浴場のあった位置を覚えていたので、探し当てることが出来た。昼食まで勧められ、遠慮したが、その温かさは忘れられないと話してくれた。

「丘の上の遊園地」は「電気公園」「小村公園」と呼ばれていた所であろうか。大連の事を書いた作家達の文中にも出てくる。現在は郊外に移されているそうだが、当時の街の豊かさが解かる。けれど現在も、旧ロシア街の建造物、日本支配時代の近代的な建造物まで残され、補修し、活用されている（藩陽や長春でも同様に）写真を見ると、驚きと共に、複雑な心境になるのは、私だけではないだろう。

「母が……男装して」。この詩集の中には「サトコちゃんのお母さん」「マダムダワイ」にその理由が切実に描かれている。女性達に対するロシア兵の卑屈な行為と、自衛のため男装する母親と見張りに立つ子供達。日本兵を含め、世界のどの戦争時にもあったことだ。兵士達の残虐性と人間の無残さを見た、幼い者の消えない痛みである。

弓田さん、Ｓさん、Ｙ氏他、私と共通しているのは、どんなに苛酷な体験をしたと思っても、とにかく帰国している。開拓農民の人達や残留孤児の方達を思うと語れなくなる。また、戦争の実体や歴史を知るほどに、中国の人達に申し訳ない思いが先に立つという感情である。

けれど難民となった子供達の、幼いながらも必死で生き延びた証しは、それぞれにかけがえがなく、比べられるものではないと私は思う。あの戦争は日本にとって何であったのかと問う時、政治や経済あるいは歴史からも探求された多くの書物がある。しかし私にとって何であったのかと、もうひとつ問う時、表向きの記録からこぼれている子供たちの気持ち、子供の目線、文学で、真実を投げかけてくるものが必要であった。『大連』の作品群は、今も昔も口をつぐんでいる、多くの子供達の代弁者としての役を成し得ている。

作品にされてから十年以上たった一九八八年に、この詩集はまとめられている。さらに二十年経て私の手元に届いた。私が心から会いたかった作品群であった。

（やぎゅう・じゅんこ 1942 年生まれ。父親が満鉄に勤務。1946 年秋、葫蘆島より引揚げ。母の語りを作品化するために「満州研究会」に通う。日本現代詩人会、日本詩人クラブ、日本社会文学会、日本文芸家協会　各会員。現在、東京在住））

黄　砂　現　象

柳生 じゅん子

窓を閉め切ってとじこもる人がいて
かぶさってくる空に苦く顔をしかめる人もいる
黄砂現象の日
風がじわじわと横に這い
景色を薄茶褐色に封鎖し始めると
私の中のざらつく記憶がゆすぶられる

引揚げ直後にはぐれてしまった幼友だち
毎朝幼稚園にさそいに来る声だけが
兄と私の胸の隅にとまって帰国していた
引揚げ船で仲良くなった友の
水葬されてしまった理由を
私はまだ納得できないでいる

あの戦いの日の記憶
うずくまるページのずっと向う
裏表紙にひしめく人達
三十三回忌はとむらい納めというが
年月はそれほどに
土まんじゅうの墓標を風にさらし
荒れ野に遺された兵士達の
血潮は大地に染み通り
骨を親しく土に帰してしまったのか
人は忘れることで傷をふさぎ
目をつぶることで傷つかずにいても
私達は四季をおくるように
通りすぎることはできなくて

明るい春の日に
はるばると海を越え帰ってくる黄砂
血潮の色　骨粉の手ざわりに似て
黄砂は死者ばかりのさびしい葬列
あなたの庭に　私の室に
音もなく降り立つ気配に
ひととき　聞く耳でいたいと

忘れ去られた、あの日から、

千秋　昌弘

あの日
８月９日
満洲国境越え
ソ連軍が攻めてきた
　　あの日から
　　村中かたまり逃避行
　　昼夜を問わず日本に帰ろうと
　　逃げ続けた
秋が過ぎ
冬になり
すでに日本は戦争に負けたらしい
　　飢えと寒さで
　　乳飲み子は、死んだ
　　年老いた父も母も、死んだ
　　妹も弟も
満洲は大日本帝国の生命線である
華々しく送り込まれた満洲なのに
　　あの日から
　　忘れ去られた日本人
　　遺体は荒野に野晒しに
ハルピン郊外方正（ほうまさ）の
日本人公墓に眠る私たち
　　せめて
　　ひとこと
　　教科書に
　　残してもらいたい

2020.8.6

（ちあき・まさひろ：1943 年、東京で生まれる。元大阪府大東市市会議員。現在、大阪の男声合唱団「昴」の団長。また関西紫金草合唱団ではテノール歌手。各地でリサイタルを行い、二度と戦争のような過ちを繰り返さないため、日中友好交流に取り組んでいる）

ゆりっく&るりっく

渡部　通恵

アフガニスタンという国

2001年９月11日、はじめてアフガニスタンという国があることを知り、2002年４月25日に「アフガン寺子屋プロジェクト in しまね」を立ち上げました。

ある日突然頭の上から、あなたたちはテロリストだから成敗してくれると爆弾が降ってきたのです。何も知らない国民は、いったい何事だと思ったことでしょう。まして、子どもたちは。

これまで30年に及ぶ戦争状態（内戦）の中で学校に行けない環境が続いていて、その上でのアメリカからの爆撃です。

青空学級で学んでいる子どもたちに、校舎を建設する（形として残るものにする）、募金は１円たりとも建設資金以外には使わないと約束として、私たちは18年間活動しています。活動費は、世話役10人あまりの年会費１万円で賄っております。

菅原天神さんは松江城ができた頃（400年以上前）からあり、彼の生・没日が25日なので、その日は歩行者天国になって、商店街上げてお祭りで人通りが多くなります。

神社前のロータリーで青いビニールシートを敷き、お金は出せないけどうちで使わないものをあなた達が学校建設資金にするのならあげる、という不用品のプレゼントの品々を100、200円に変えていきました。

19年目に入り、募金総額は2100万円を超え、アフガニスタンのナンガハール州に７校、カブール州に９校目の学校が建っています。

ある年、半年間雨で青空バザーができない年があり、一人暮らしの方々は衣替え時期に困っておられるのではと、常設の店舗を探し、松江駅近くに古い商家（上下で50畳あまり）に出店しました。家賃と水道光熱費で一ヶ月25000円が固定経費です。

店舗名が「ゆりっく」です。

「ゆりっく」だから人を恨まない

東チモール共和国は、インドネシア軍に襲われてから２５年間独立運動を続け、住民の半分近くが虐殺されたにもかかわらず独立して、現在に至っています。

彼らを追うドキュメンタリーで監督が生き残った人々に尋ねます。

ある女性は「私は首から下をインドネシア軍に捧げ、家族も殺されたけれど、ゆりっくだから彼らを恨まない」、またある男性は「ひどいことをされたけれど、ゆりっくだから恨まない。」と。

店舗名に使わせてほしいと京都在住の女性監督に頼みましたら、「渡部さん、それはるりっくという発音です」って。でも、「ゆりっく」にしてよかったのです。

「るりっく」では説明が長くかかるし覚えてもらえない、でも「ゆりっく」なら「ゆっくり」ではないよ「ゆりっく」だよって。

アフガニスタンも北朝鮮も東チモール共和国も大きな国の都合で蹂躙されてきたということは同じです。アフガニスタンに学校建設をする目的で募金集めをする店の名前にふさわしいと思ったのです。開店後６年が経ち地域に浸透し、今では毎日何組もの方々が不用品を届けてくださいます。店番はボランティアの手弁当で、でも当番日は彼らが店長です。

年間３０万円を寺子屋のほうに渡します。

先日は、島根大学の留学生で家族持ちの方（英語が話せなくて皿洗いなどの夜のお仕事がコロナでストップ、ご飯が食べられない）に15000円ずつ20家族に配布しました。

みんなつながっているんだ！

「るりっく」の意味は、地球上の物は皆つながっているという、石や空や海や大地も、地球上のすべての生物も人間も含めてです。そう考えると、いろんな紛争が馬鹿らしくなります。馬鹿らしいことに振り回されている人間が哀れになります。

そして、「ゆりっく」開店後１年。

子どものあるなしに関わらず、シングル女性の生きにくさにより添える活動の必要性を感じることが多くなりました。

民間シェルターに７年間関わって解散したときの約束を実行する時が来ました。

「みんな一緒にあたたかい」というキャッチコピーで、大きさの違う木々をおひさまが照らしているイラストのパンフレットを作りました。

「シングル女性に寄り添って、るりっく」という会を立ち上げました。

社会の中で虐げられてきた人々は、国が違っても心の痛みは一緒です。

「るりっく」については、行政にコロナ災害で困窮しているシングル女性に財政的支援をと一時金の支給を頼んだり（結果ゲット）、定期的に彼女たちや子どもたちと料理教室ならぬ母子でご飯を作ろうと、一緒に作って食べたら大人たちは、悩みや相談事を話し合い、子どもたちは別室で遊ぶという活動を続けています。

相談事は、行政につなげたり司法につなげたりお友達を紹介したりと彼女たちの今を支える一助になるべく具体的な事例に携わっています。

「ゆりっく」は毎日の換金に精をだしています。

食器類や小さい家具類・電化製品・帽子（てづくりで寄付）や靴、今は、ひと針ひと針手で縫ってくださったマスク（一個100円）が好評。

この手縫いの帽子やマスクは、「ゆりっく」で処分となった衣類を解き洗い、それが材料です。「るりっく」の活動も「ゆりっく」の活動も地域の認知がすすみ、天神さんのバザーとともに多くの皆さんに支えられていることをありがたく思っています。

地方紙が取り上げてくださる機会が増えたのも、大きなバックアップになっています。

「ゆりっく」＆「るりっく〕という言葉を広め、その意味を理解してくださる方が増えるといいなと。

過去の悲しい出来事を許すということと忘れるということは同義ではないでしょうが、まだ私も納得できていません。

忘れないで語り繋いでいくことが、それらを許すということではないように思うのですが、どうでしょうか。

「るりっく」の意味がわかっていないのは、私でしょうか。

（わたなべ・みちえ：1950年生まれ。五人の子供を育てながら松江市で、食の安全、子供をタバコの害から守る運動や脱原発活動などを行う一方、『嗚呼　満蒙開拓団』の自主上映会を開催。また、朝鮮民主主義人民共和国を三度訪問するなど市民レベルの国際交流を行っている）

未完ドキュメンタリー映画『10 日間だけの祖国』のこと

本会会員　**吉川雄作**

2010 年 6 月　方正の自宅で

この写真の女性のことをご記憶であろうか。

羽田澄子監督のドキュメンタリー映画、『嗚呼満蒙開拓団』の中で、「私は日本人……」と訴える場面が強く印象に残る方正在住の徐士蘭さん。

この映画を看た元中国大使宮本雄二氏の一言が契機となり、現地コーディネーターとして参加した元本会参与の故奥村正雄氏が招日活動を発案、飯白栄助・是洞三栄子・吉川の自称“四人会”で募金活動を開始。呼びかけに応じて個人 150 人余、3 団体から総額 50 万円超のカンパが寄せられた。

一方、方正側でのビザ発給は難航した。加えて、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災――。

当初予定のサクラの季節の招日は断念せざるを得ないかと思われた。幸い、黒竜江省外事弁公室徐広明氏の理解と助力によりビザが発給され、むしろ徐士蘭側から励まされるような形で、6 月 8 日から 17 日までの 10 日間、三女叢会霞さんを伴っての訪日が実現した。

多くの方の協力を得て実現した“祖国日本”滞在中に撮影したビデオ記録をベースにして、“四人会”はドキュメンタリー映画『10 日間だけの祖国』の制作に取り掛かり、紆余曲折の後、2015 年 5 月、自由工房佐藤斗久枝さんの力を借りてなんとか形を整えることができ、方正友好交流の会総会での試写に間に合わせた。

※関連記事は本誌 10 号（2009 年 12 月）から 23 号（2016 年 12 月）まで各号掲載。

奥村氏は、最終的に湯布院映画祭のコンテストへの応募を考えていたようだが（19 号）、その後、「徐士蘭は日本人」との証言に疑念が浮上し、このままではコンテストはおろか、公開もできないと修正思案継続中に病状悪化、若干の改案メモを残して 2017 年 6 月逝去。さらに翌年 6 月には飯白栄助氏も他界し、四人会は是洞と吉川の“二人会”となった。

しかし、修正具体案は残された二人に伝わるまでに至らず、あたら“労作”を奥村氏からの預託に応えられないまま埋もらせてしまうことはいかにも無念と“二人会”で相談、先様意向打診の結果、以下の 4 団体・施設にコピーDVD を受け入れて頂くことができた。

徐士蘭招日活動及び映画制作にご協力・ご支援を頂いた各位への心からの感謝の意を、ご報告大幅遅れのお詫びとともに誌上を借りてお伝えし、未完ドキュメンタリー映画『10 日間だけの祖国』についての最終報告とさせて頂きます。ありがとうございました。

◆未完ドキュメンタリー映画『10 日間だけの祖国』（40 分）　DVD　**保管先：**

〇方正友好交流の会（大類善啓）　〇中国帰国者支援・交流センター（首都圏センター）〇満蒙開拓平和記念館（寺沢秀文）　〇ハルビン市日本残留孤児養父母連絡会（石 金楷）

（よしかわ・ゆうさく：1937 年 札幌市生まれ。元都内私立高校教員。定年後開始の中国語学習が縁で奥村正雄氏と出会う。「ちば中国帰国者支援交流の会」・「千葉の干潟を守る会」会員）

愛新覚羅 浩 夫人の書簡を紹介
軟禁中のお世話をした山下(甲斐)香都さん

末 広 一 郎

—— 甲斐国三郎さんの概略をご本人から ——

先ず、本稿をご理解下さるため、甲斐国三郎氏を知って下さい。ご本人による簡単な経歴と自己紹介を。

1 私と家内は、満洲の地、８月15日迄の生活は全く別々で、知りませんでした。

私は、拙著「満洲引揚げ者の告白」にある通り、昭和16年４月渡満、20年８月15日奉天から一つ次の文官屯（地名）南満陸軍造兵廠で敗戦の日を迎える。

山下オカトは、昭和10年渡満し、奉天にあった浪速高女校に通学し、昭和18年卒業、銀行に就職し、コロ島近くの銀行支店に勤務し、姉夫婦とその近くに居を得、住んでいた。昭和20年８月15日に強制留用を中国側（蒋介石国府軍より）近所居住の男女日本人約10数人留用労働者としてコロ島で生活していた。

2 私は昭和16年４月11日より20年12月まで、文官屯にて居住、敗戦の８月15日から12月迄、文官屯に。12月中旬から21年４月奉天市内、古賀卯右衛門（奉天領事館、副領事、日本政府外務省）宅に用心棒を兼ねて、住み込んでいた。

その後、拙著「満州引揚げ者の告白」で記したように昭和21年５月１日、引き揚げ業務始まりに併せて、コロ島へ古賀氏御家族と一緒にコロ島へ向い、連日引き揚げ業務に従事するボランティアを。住居は古賀さん御家族と一緒でした。

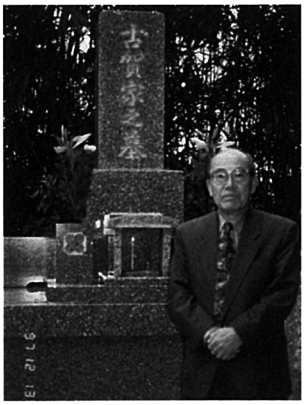
3 家内山下オカトは、強制留用により、コロ島港の司令官、何世礼将軍の官邸に住み込み勤務（元、張作霖の別荘家屋）コロ島市内。

4 昭和21年６月頃、コロ島引揚者の来船、当時は毎日引揚船２～３隻の船に案内者の仕事を終了し、５～６人の仲間と、今日の仕事終わった夕方４時～５時頃、コロ島岸壁近くで、本日の仕事終わり、翌日の入港、引揚船の有無、種別を無線所より確認し、皆で１日の労働を話し合うのが日課であった。

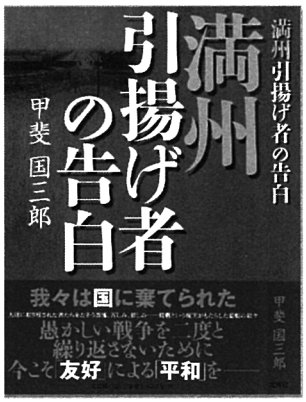
このボランティア仲間には、大同学院卒業の人も居られ、たしか稲田さんと言っていた。

語り合いの中でも珍事や、在満の時代の話しが語られ、もう一度、山にこもって再武装し、チャンコロ「満人(中国人)を蔑視した言葉」をやっつけるか、勇ましい者もいた。

5 愛新覚羅浩夫人は、夫、溥傑氏を撫順にあった戦犯収容所に残し、日本帰国



拙書出版報告のための墓参り
（古賀氏墓前にて）



—— 文芸社より発行 ——
戦後の経過を記録された著書

を許され、コロ島へこられることが判り、一般の引揚者と同様にはできないとして、何世礼(国府軍、コロ島港口司令官邸)に軟禁され、その後、帰国することとされた。

数日、官邸に宿泊する間、強制留用で働いていた家内、山下オカトが日本人同志と言う事で、婦人のお世話をするよう命ぜられ、知ることになった。

6 軟禁中に、国府軍が、毛沢東(共産党軍)に敗退やぶれ、何将軍を先頭に、上海に引揚げることとなり、家内も浩夫人も一緒に艦船で逃げた(上海へ)とのことであったようだ。

7 家内も浩夫人も、上海へ逃れ、その後、許されて２人は上海から佐世保へ引揚船で帰国することになった（生前家内談)。

8 帰国後、昭和24年に何世礼将軍は中国代表として日本に派遣されて来日した（米軍はマッカーサー将軍、日本を相手にして戦ったイギリス、オランダ、オーストラリア等、連合国の代表、占領軍は米軍、ギリシャ軍もいた)。

9 昭和24年、来日した何駐日中国代表団長の邸宅は、青山学院下の元・宮様の邸宅を接収し、邸宅とした。熊本へ帰国していた山下オカトは上京し、ハウスキーパーとして働いてくれないかと連絡を受け、同年上京し、青山の何団長邸で働くことになった。

10 私と家内はコロ島で先に述べた引揚げ業務終了後の仲間との打ち合わせ中に岸壁近くで、日本人女性らしい彼女を発見し、皆で語り合うところで話し合ったら、何将軍邸で労働している、故郷は熊本人吉付近と分かった。同じ熊本と言うことで、２～３回、小生と会話を交わすこととなった。

11 小生は帰国。昭和21年10月、古賀夫人、子息と帰国した。古賀氏は、責任者として。

翌々年迄、責任者として残られた。

12 小生は昭和21年10月、一緒に博多港へ上陸し、ご家族と鳥栖（郷里は佐賀）で別れ、熊本は阿蘇の実家に無事についた。コロ島から引揚船船員に依頼した、無事であるとの母宛の手紙は着いていた。母と弟妹は無事の帰国を喜んでくれた。

軍港らしくない現在の葫芦島港全景（内田提供)

13 小生は、帰国したは良いが、仕事がなく、親類の家から食料品を貰って食べている貧しい生活であった。その頃、妹で陸軍病院の看護婦をしていた時代（妹）が所在地の山西村役場に就職することが出来て、少しは良くなった。残り２人の弟妹は小学校へ通っている状態でした。母は苦労していた（父は昭和14年他界渡満前)。

14 昭和23年、村役場の掲示板に、大阪府警察官募集の張り紙があった。

これに応募することとし、試験を受け合格して大阪府警察官教習所に入所することになった。

15 入所２ヶ月で試験があり、良好な成績の者約10人位(80人位中)は卒業することになった。

16 ２ヶ月で正式な警察官となり、東成警察署今里交番勤務となる。（理由・戦後横行したヤミ米販売する者が大勢の為、これが取締りの目的であったようだ）

17 今里交番勤務２ヶ月後（昭和23年７月）、上司より東京の皇宮警察の募集がある、応募の者は名乗り出よとの司令があり、応募すると申し込んでたいした試験もなく、合格となり、９月上京することになり、昭和23年９月１日、皇居坂下門に入り、皇宮警察官の拝命を受けた。

18 皇宮警察官となり、坂下署に配属され、１昼夜交替の24時間勤務であった。
翌年24年、自動車の運転免許取得が許され、大型２種免許を鮫州の試験場より受けた。

19 翌年、吹上署に転勤を命ぜられ、階下の御文庫がある紅葉山勤め管轄の署であった。

20 24時間勤務、宿舎は相手の１人が宿泊し、２人住居であった。

21 これより勤務で約３年程経過し、占領も来年頃講話条約発効で、今後は駐留米軍となる。安保条約のことが報ぜられ、我々の勤務は何事もなく、ただ一昼夜の時間が経過すれば、給料が得られる。事変事故があったら困るがこのような状況で糧を得る事に、矛盾を感じ、免許証取得もあり、辞職することを申し出た。

22 そしたら、きわめて強く退職を認めない上司の言葉に接し、何か不足か、せめられ、小生ともう１人、同じような思いで（民主国家となった考え方にならず）転職を求める鹿児島出身の内海君と共に、強く当方が訴え、退職を実現した。

23 そして、給与は必要であるので、駐留米軍基地、マッカーサー司令部直属のモータープールで駐留軍要員として働くことにした。

24 その後、同じ駐留軍でも中国代表団のモータープールの方が満洲引揚げの身として気が楽ではないかとの誘いがあり、そちらに転職することにした。
場所は麻布の有栖川公園の近くにあったモータープールでした。

25 中国代表団基地に働くことになり、或る日青山の何世礼中国代表団長の邸宅に行ったら、玄関に家内となった山下香都が居た。これにはびっくり驚いた。

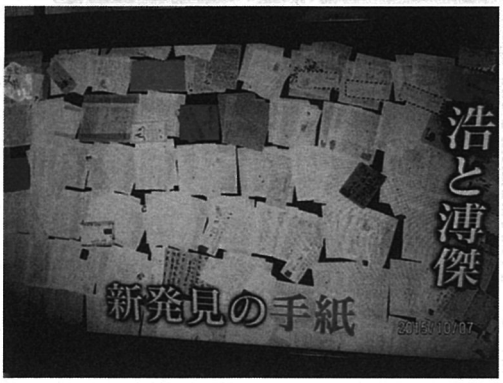
26 幾度か逢っているうちに結婚を申し入れ、二人は運命だと割り切って一緒になった。

27 その後、浩夫人のことを少しは聞いたが、満洲のことは余り語らず、三年前に逝った。

以上が甲斐さんからでした。ありがとうございました。

その後、ＮＨＫテレビで愛新覚羅溥傑とその妻浩との手紙文書のやり取りが報じられました。浩夫人の子息のお一人が兵庫県に住んで居られ、その現在の写真なども報ぜられ、甲斐さんはその放送のＮＨＫの画面を写真に撮ったものを知人からいただかれました。そして、ＮＨＫに電話をし、小生の家内が同封の浩夫人からの手紙があると申しましたら、ＮＨＫの担当者が、「それは誠に残念でした。民間人とのものは皆無と思っていたので残念でした」とのことでした。

今斯くしてこの場で発表させて下さり、小生と家内浩夫人の関係を誰方さまも、小説以上の奇遇、運命と言って下さり、貴重な手紙を持っていた家内のお陰です。有難く思っております。　甲斐国三郎より



NHK が放送した画面の一部

—— 甲斐国三郎氏との出会いを末広から ——

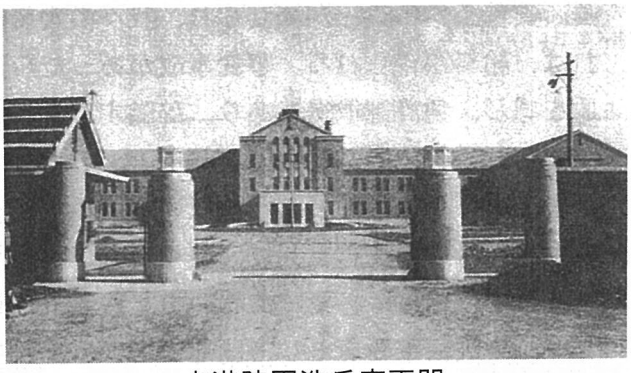
はじめに先ず、末広が甲斐国三郎さんを知り得たきっかけから申します。

本文の前に山下、甲斐のお二人が同じコロ島で引揚げの事務をしておられました。お互い知らぬまま働いておられました。その仕事を命じられた方が別々であったからであります。

甲斐さんは奉天領事館古賀卯右衛門からコロ島の引揚げ業務を命じられた、一方山下香都はコロ島港口司令官何世礼の官邸勤務を命じられました。何世礼将軍のところに愛新覚羅浩夫人が軟禁中、そのお世話をするように命じられた。お互いコロ島勤務だったため、顔見知りとなっていたことは事実であります。

以上、お二人のことは一先ず頭の片隅において、甲斐国三郎さんとの出会いを申し上げます。

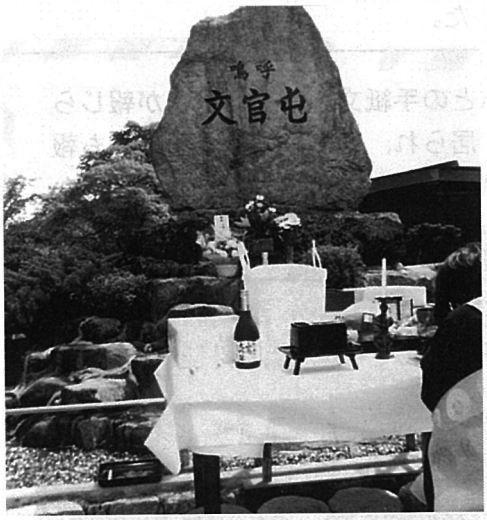
傷痍軍人の会の組織がありました。一年一回の懇親旅行がありました。香川の丸亀であった時、毎年のことだから顔見知りがあり、京都の榎本浩さんと同室でした。彼がくれたのが「満洲引揚げ者の告白」という本でした。その中に榎本さんの記事もありました。彼と甲斐国三郎さんの二人は南満陸軍造兵廠の工員だったのです。



南満陸軍造兵廠正門

満蒙開拓とは関係がないので、読まずに積んでおきました。暇な時「まあ、読んでみようか」と思い、読んでみたら、なんとコロ島引揚げ業務の仕事の内容が詳しく書いてるのでびっくり、コロ島へ訪中し見学して帰国したばかりの頃だったので、関心深く読了しました。

嫩訓八洲会だよりに訪中の報告を写真を添えて作成するため、榎本さんにコロ島のことについて何か参考になるものがあるだろうかと思って、甲斐さんを紹介して下さいと頼んで交流ができました。



高田昭二さんの庭の一角にある文官屯の碑

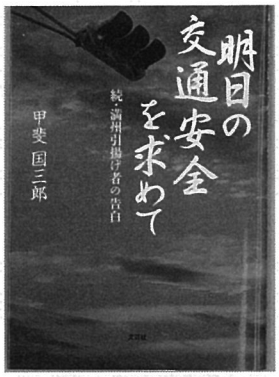
甲斐さんとの親交を深めたのが、この碑が南満陸軍造兵廠のものであったからです。

南満陸軍造兵廠の名簿を拝見すると、広島の方がおられました。高田昭二さんです。東広島市から近い高屋町です。南満陸軍造兵廠は918部隊であったので、毎年９月18日に慰霊祭を催行されていて、榎本さんと訪問しました。高田さんが独自に文官屯に南満陸軍造兵廠の碑を建立されていました。

高田昭二さん宅の庭の一角に、しっかりした土台の上に大きな石が供えてあります。自分の山から重機を使って運び出されました。立派な碑です。

甲斐さんは、「満洲引揚げ者の告白」上梓されてから、「続・満洲引揚げ者の告白、明日の交通安全を求めて」を発行されました。

この本は、甲斐さんの一生を語られた自分史であると思いました。皇宮警察官から進駐軍で働き、進



―文芸社より発行―
甲斐さんが大物である本

駐軍労働組合を経験され、「全日本交通運輸労働組合協議会」へ引っ張られて、長い間労働運動に素晴らしい成果を挙げ、立派な功績を残されました。

一つの例として、昭和43年８月飛騨川バス転落事故で国家賠償訴訟という闘いで、甲斐さんなどの努力により判決は完全に勝訴しました。その他、歩道前の一時停止線の改良など沢山ありますが、この本「明日の交通安全を求めて」をご覧になって、甲斐さんが普通の人ではなく、大物である確証を得ることができる本であります。

以上、末広から甲斐国三郎さんとの出会いを完結に述べました。これからは、甲斐さんの奥さん、山下香都さんについて、簡潔に述べます。

―― 山下　香都（甲斐香都）さんについて ――

甲斐さんが述べられていることと重複する点がありますが、別な資料の中から参考まで記してみます。

奉天浪速高等女学校時代（18歳）

大正14年１月オカトさんは誕生されました。熊本県球磨郡の裕福な農家でした。女ばかりの５人姉妹で末娘でした。10歳の時、満洲の奉天（瀋陽）に住んでいた義兄の家に世話になることになり、渡満されました。

奉天で小学校卒業し、浪速高等女学校を卒業、18歳で満洲中央銀行に就職、航空局の局長秘書を経験されました。20歳の若さでコロ島埠頭区事務所の区長代理になられました。終戦となり避難生活を姉一家と共にしていたら、コロ島より引揚げが始まりました。引揚げ名簿に山下オカトの名はありませんでした。

帰国の手続をすませたオカトさんも、姉の家族と共にリュックを背負い、指定された船着き場で出港を待った。

やっと帰れる喜びに胸が高鳴る。いよいよ乗船者の名前が次々と呼び上げられた。

ところが何とした身の不運か、オカトさんの名前だけが抜けている。家族と共に必死に掛け合ったが、どうしても乗せてもらえない。

ドラは鳴り、リバティ型輸送船は、岸壁に21歳のオカトさんを残し出港した。

国府軍がオカトさんを目にしていたため、乗船を許可しなかったので、残されました。

すると愛新覚羅浩さんが日本へ脱出のため逃れてきました。逮捕されて国府軍の何将軍の近くの高台にある官舎に隔離されました。将軍は同じ日本人だから、オカトさんにお世話をするように命じられました。オカトさんと浩さんの運命の出会いだったのです。

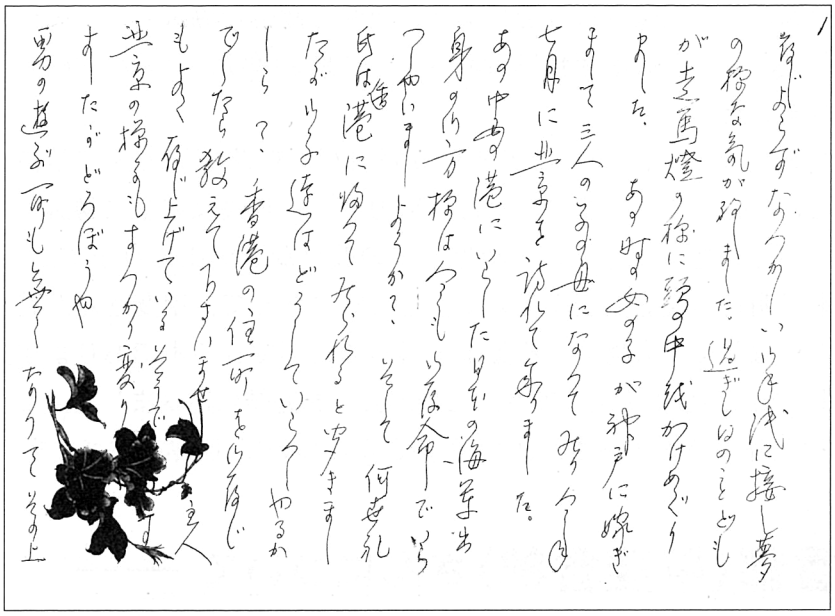
甲斐さんご夫妻
同じ郷里の熊本阿蘇山の近くにて
―甲斐―

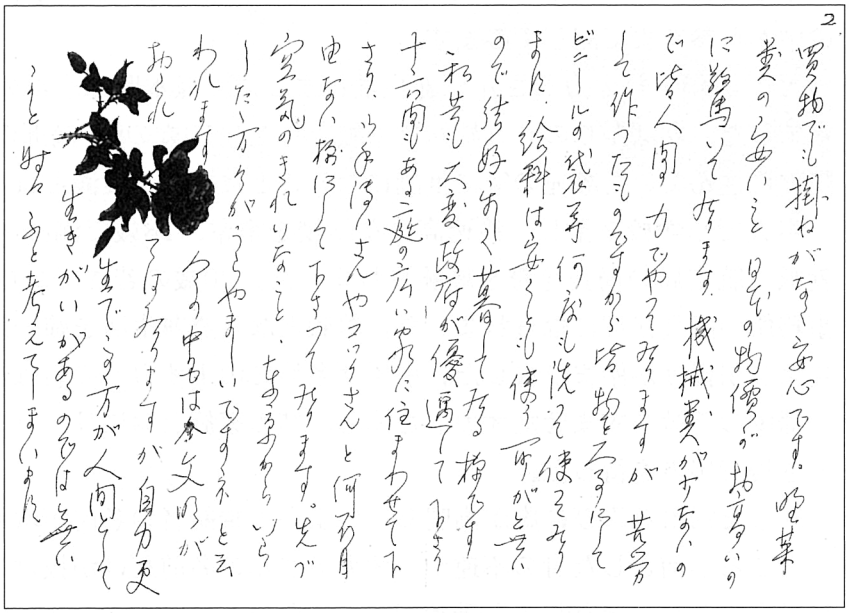
浩さんの子供６歳の娘に「夕やけこやけ」の唄を歌ったのが思い出に残っていますと。

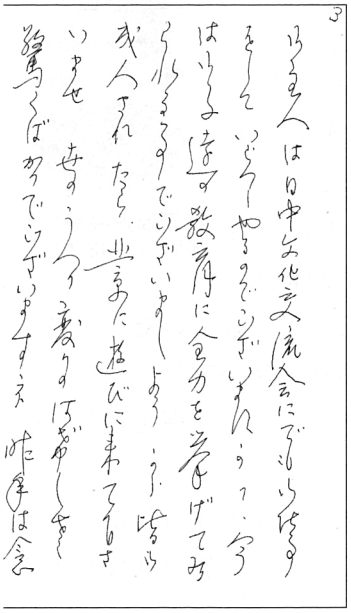
甲斐さんもオカトさんと同じ場所での勤めであり、時々合って話しはされていました。甲斐さんもコロ島の引揚事務をされていたオカトさんとは顔馴染みでした。同じ熊本県人であることもその時知らされました。

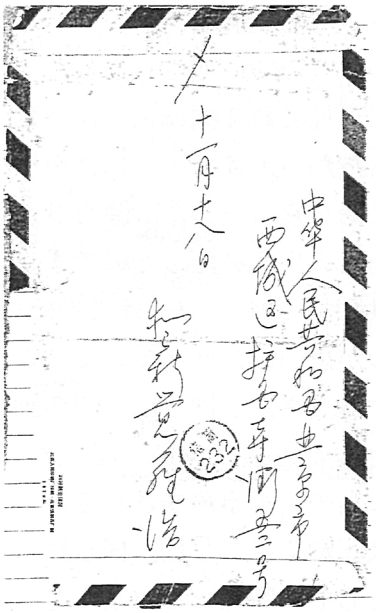
―甲斐香都さんに送られた手紙文です―

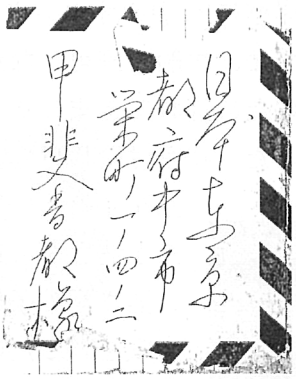
愛新覚羅溥傑と嵯峨浩の婚儀。
1937年（昭和 12年）4月 3日、軍人会館にて

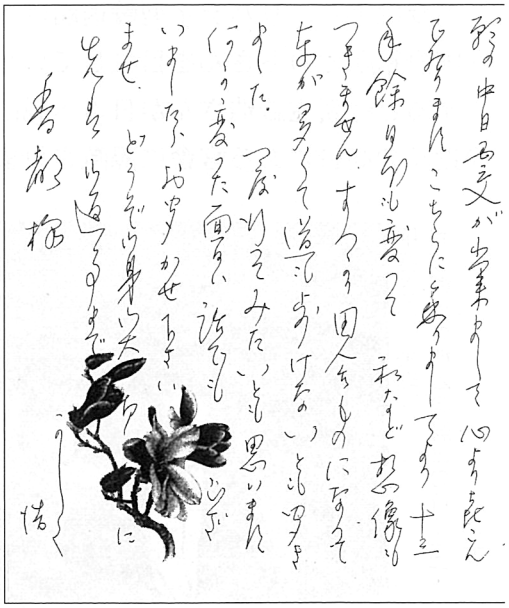












国府軍も中共軍の優勢に押され、何将軍も浩さん、オカトさん、国府軍の艦船で上海へ逃れ、オカトさんは解放され、昭和23年12月５日「たちばな丸」で日本へ、佐世保に上陸されました。

これからのことは甲斐国三郎さんの[8]、[9]、[10]の所をご覧下さい。

今回の投稿のメインである、浩さんの数々ある手紙文の紹介がＮＨＫで放送されましたが、溥傑そのものばかりで、個人宛のオカトさんへのものが一つあったことに、ＮＨＫでも驚いておられた。本物のコピーです。じっくりとご愛読あらんことを当時を偲んで。国宝級のものである。

関西学院大学博物館　館長から寄贈の御礼

2015年11月２日

甲斐　国三郎 様

関西学院大学博物館　館長　河上　繁樹

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度は、下記資料をご恵贈いただき、誠にありがとうございました。謹んで厚くお礼申し上げます。

今後とも本学博物館事業へのご理解とご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

本来ならば、拝趨のうえお礼申し上げるべきところ、略儀ながら書中をもってお礼申し上げます。

記

愛新覚羅浩さんより甲斐オカト（旧姓山下オカト）さん宛の手紙３枚及び封筒

以上

この稿を進めて来た本論であります。愛新覚羅浩夫人にとって、ほんの一端でしょう。甲斐香都さんに送られた手紙文です。（前頁をご参照下さい）

―― おわりに当たって ――

以上、貴重な国宝級のお手紙を初公開致しました。

未だどこにも発表されていません。拝見されまして、尋常一様ではありません。文字が変体仮名で綴られています。皇室の出である嵯峨侯爵家の令嬢として成長された学問の高い教養を身につけられたことを伺い知るところであります。浩さんは、戦後は父の町田学園の書道の教師もされていました。

満洲国の存在を確証するものの一つであると思います。満洲国を後世に伝える証拠品でもあります。満洲国を語り残す一級品でもあります。誇り得る大切な絶品だと考えます。

反戦、平和、当時の日本軍閥の偽満洲国を作り、侵略に走った軍国主義国家が行った悪事の証明となるものです。

始めの甲斐さんの[2]の所に、古賀卯右衛門（奉天領事館、副領事、日本政府外務省）宅に用心棒を兼ねて、住み込んでいた、とあります。甲斐さんが戦後、南満陸軍造兵廠から古賀家に住み込んだのは、甲斐さんは優秀な方であったからだと思います。戦後の第一歩の始まりでありました。

本稿を更に内容を深めて下さることをお奨めする甲斐国三郎さんが出版されている「満州引揚げ者の告白」と「明日の交通安全を求めて」を読了されんことを切望して止みません。発行所の書店㈱文芸社にご注文下さい。

（甲斐国三郎さんは、星火方正の会員であり ます。）

（すえひろ・いちろう：1925年生まれ。40年、嫩江訓練所に入所。43年、八家子（はっかし）開拓団へ入る。日本の敗戦後シベリアに抑留さる。49年、舞鶴に引き揚げ、49年から53年まで国立療養所に入院。55年みなみ工房設立。60年、とき印刷設立。定年で退職し現在に至る）

甦らせたい！　伊丹万作が遺した言葉

大類 善啓

『愛善世界』という大本（教）信徒の少数派グループが出している月刊誌がある。大本は明治 25 年、開祖・出口なおという女性が京都府の北部、綾部で神がかりして＜お筆先＞というものを書き出した。無学文盲の「なお」という、いわば老婆に懸かった≪丑寅の金神≫が彼女に書かせたのだった。

精神分析学の創始者、ジーグムンド・フロイドが言うところの自動書記現象である。文字を知らない出口なおが筆を持って書き出し、それを後のなおの長女・すみと結婚した出口王仁三郎が読み解き、『天の巻』『火の巻』というものにまとめられ、それが東洋文庫から出版されている。

ここで大本について詳しく説明すると、それこそ一冊の本になってしまう。関心ある方は、2017 年に亡くなられた安丸良夫（一橋大学名誉教授）さんが書かれた『出口なお』（朝日新聞社刊）、また王仁三郎については、私も親しくしていただいている栗原彬（立教大学名誉教授）さんの著書『歴史とアイデンティティ――近代日本の心理＝歴史研究』（新曜社刊）に収められている≪倫理＝宗教性と政治行動―民衆宗教大本の集合的アイデンティティ≫や、≪1930 年代の社会意識と大本――社会不安と両義性の宗教≫という二つの論文を読んでいただければ、更に大本についても深く理解されるだろう。

さて、その『愛善世界』に３年ほど前から、連載エッセイ＜深夜のそぞろ歩き＞と銘打って雑文を毎号連載しているが、９月号から 11 月号に亘って書いた＜日本人の誰も取らなかった戦争責任＞という一連の拙文に、読者から＜感銘した＞という手紙が編集部に届いたり、1946 年に亡くなった映画監督で脚本家だった伊丹万作ついて書き、ぜひこの人間を知ってもらいたいと BCC で友人知人に PDF で送ったところ、これも反響があった。それを読んだ畏友から、ぜひ本誌にも掲載したらいいという進言があり、ここで伊丹万作について再度記し、彼の言葉や人間を甦らせたいと思う。

吉田 裕（ゆたか）「東京裁判を検証する」

この一連の原稿を書く契機になったのは、７月４日の＜七・七盧溝橋事件記念のつどい＞だった。主催団体である日中友好神奈川県婦人連絡会の結成四五周年記念の記念講演であり、講師は吉田裕（一橋大学名誉教授）さんだった。タイトルは「東京裁判を検証する」、サブタイトルは「―裁かれたもの、裁かれなかったもの―」。

吉田さんの著作『日本軍兵士―アジア・太平洋戦争の現実』（中公新書）は二〇一九・新書大賞を受賞されている。吉田さんの講演を聴くのは初めてだが、作家の早乙女勝元さんの後を継いで、東京大空襲・戦災資料センターの館長になられたとのこと。縁のある方だと思った。それと言うのも、私の母・夏子の両親は一九四五年三月十日の東

京大空襲で亡くなっている。当時、東京の日本橋浜町に住んでいた母の両親と、たまたま里帰りしていた叔母・澄子と一歳になる男の子がこの時の大空襲に遭い、明治座に入って亡くなった。実際に明治座に入ったかどうかを立証することはできないが、当時、明治座周辺に住んでいた人たちは明治座に逃げ込めば大丈夫だろうと、こぞって駆け込んだと言われている。しかし明治座は逃げ込んだ人たちで超満員、後から逃げ込もうとした人たちは入れず、また扉を閉めていたため、多くは窒息死したとも言われている。

十万人ほどの死者が出たと言われる東京大空襲だった。その戦災資料センターの館長に吉田さんが就任されたのだから、私が勝手に縁のある方だと言っても許されるのではないか、と思ってしまう。

昭和天皇の戦争責任

その吉田さんの講演内容は、日本の戦争指導者に対する極東国際軍事裁判、いわゆる東京裁判の歴史的な意義とその限界を明らかにするものだった。

吉田さんは、歴史的な背景を第一次世界大戦後の国際的潮流から解き明かしながら、裁判がアメリカ主導の政治裁判という側面があり、また、時代が冷戦への移行に向かった点が裁判に大きな影響を与えたというものだった。その詳細は省略するが、私は改めて昭和天皇の戦争責任に関するところに引きつけられた。

2019 年夏、ＮＨＫの報道によって初代宮内庁長官・田島道治の「拝謁記」が明らかにされた。1952 年４月のサンフランシスコ講和条約発効後に、昭和天皇は敗戦が大きな惨禍をもたらしたことに関して、国民に遺憾の意を表明する、あるいは自らの責任に言及する「お言葉」を準備していたという。しかし当時の吉田茂首相の反対にあい、実現しなかったのだ。吉田首相は、「寝た子を起こす」論、つまり国民に戦争の惨禍を思い出させるより、戦争はもう過ぎ去った過去とみなす考えから反対したようである。

講演者の吉田さんは、同様の動きが東京裁判の判決時にもあった模様だと指摘した。

東条英機被告の証言

Ａ級戦犯の代表格である東条英機は、1947 年 12 月 31 日の東京裁判で、「日本国の臣民が、陛下の御意志に反してかれこれするということはあり得ぬことであります。いわんや、日本の高官においてや」と証言した。

東条は自分の証言の政治的含意についてあまりに無自覚だったのだろう。オーストラリア出身のウェッブ裁判長は、この証言の重要性についてすぐに、法廷に注意をうながした。つまり東条の論法でいけば、太平洋戦争の開戦は天皇の意志だったということになるからだ。

この東京裁判を主導していたアメリカはすでに、天皇制を温存し昭和天皇を利用して日本を支配する方がうまくいくと思っていた。それ故、昭和天皇の戦争責任は追及しないと決めていたのだ。

アメリカ出身のキーナン首席検事は、田中隆吉を通じて松平康昌に働きかけ、松平は拘禁中の木戸幸一を訪ねて東条への説得を依頼した。田中はかつて上海で謀略工作などに従事し、裁判では検察側の証人に立った軍人である。また松平は、昭和天皇の側近グループの一人、そして木戸は、昭和天皇の側近として東条を総理大臣に推薦した政治家だった。

この結果、翌年の 1948 年１月６日の法廷で東条は、「それは私の国民としての感情を申し上げておったのです。責任問題とは別です。天皇の御責任とは別問題です」と述べて、前回の証言を事実上撤回したのだった。

あの東条自身が本心では昭和天皇に開戦の責任がある。つまり昭和天皇に戦争責任があると認識していたのだ。しかし、ソ連との冷戦時代を迎えるアメリカとしては、早々に裁判を切り上げて、次の時代を迎えるべく、準備を着々と進行していた。

1948 年 11 月 12 日、判決が下り、東条英機、広田弘毅、板垣征四郎、土肥原賢二ら七人が絞首刑になる。広田は唯一の文官だった。木戸は、終身刑のＡ級戦犯だったが後に仮釈放された。

７人の処刑を終えた後、同じくＡ級戦犯だった岸信介は、巣鴨刑務所から釈放され、政界に復帰し、総理大臣にまでなる。その岸を祖父に持つ安倍晋三は祖父を尊敬し、アジア太平洋戦争はアジアを解放する戦いだったという祖父の歴史観を信奉していた。

吉田裕さんの講演を聴いて、戦争責任をうやむやにしたツケが今日、あらゆるところに出ているとともに、日本人自身の戦争責任について今一度、考えるべきだと思ったのだった。

昭和天皇の記者会見での発言

昭和天皇自身が本心では、自分に戦争責任があると思っていたようだが、冷戦時代に向けてアメリカの政策が変化していくに従って昭和天皇自身も、＜心境＞の変化か、徐々に戦争責任に目をつぶっていくようになったのだろう。

1975 年、日本記者クラブで初の公式記者会見に臨んだ昭和天皇の発言には、私も唖然とした。

ザ・タイムズ記者の中村康二氏は、こう質問した。

「陛下は、ホワイトハウスにおける『私が深く悲しみとするあの戦争』という発言がございましたが、このことは、陛下が開戦を含めて、戦争そのものに対して責任を感じておられるという意味と解してよろしゅうございますか。また、陛下は、いわゆる戦争責任について、どのようにお考えになっておられますか、お考えをお伺いいたします」

昭和天皇はこう答えた。

「そういう言葉のアヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究もしていないので、よくわかりませんから、そういう問題についてはお答えができかねます」。

戦争責任は文学の問題か？！

私はこの発言を当時、テレビのニュースで流れた時、本当に驚いた。昭和天皇が海外の要人との会見に必ずと言っていいほど英語の通訳を担当していた外務省の真崎秀樹さんとは、私は少しばかり個人的にお付き合いがあり、今は亡き彼から昭和天皇の人柄についての話も聞いており、私はそんなに悪い感情を持ってはいなかったのだが、この発言を聞いて、「なに！　戦争責任と文学研究がどう関係するのだ！」と怒りが湧いてきた。非常に卑怯な人だなと思った。

実は、先にも書いたように昭和天皇自身は、自己の戦争責任を彼なりに自覚していたようで、「お言葉」という発言を準備していた。しかし、東京裁判がアメリカ主導で進められ、ソ連などの共産圏に対抗するために、日本をアメリカ側の一翼を担わせるという戦略の流れに従って、その後のシナリオが進んでいったのだ。

その象徴的な例が、Ａ級戦犯として巣鴨の刑務所に収容されていた岸信介の釈放だろう。岸はその後政界に復帰し、総理大臣にまでなる。同じ敗戦国だったドイツでこんなことが考えられるだろうか。ドイツでは考えられないような事態に当時のマス・メディアは、ほとんど言及しなかったのではないか。

マスコミも戦争責任あり！

岸は総理になる以前から、アメリカのＣＩＡから資金援助を受けていた。ＣＩＡ職員の回顧録『ＣＩＡ秘録』に、岸に金を届けたと記してある箇所がある。長く日本にいたアメリカ女性で日本語もできる女性が製作したドキュメンタリー映画『ＡＭＰＯ』にもそのことが描かれていた。要するに岸は、日本の右翼的な路線を追求しつつも、それはアメリカの傘の下でのものなのだった。

このような状況を見て、改めて考えるのは日本人全体の戦争責任の問題だ。かつて、わが方正友好交流の会の会報「星火方正」26 号（2018 年５月刊）に書いていただいた野崎朋子さんの原稿、＜昭和天皇の戦争責任と日本人の加害責任認識の欠如＞を、今回改めて読み返して、非常に思うところがあった。

戦争責任に無自覚だった日本人

野崎さんはこの中で、日本の敗戦翌年の 1946 年の「映画春秋」創刊号に発表された伊丹万作の言葉を紹介している。伊丹万作は映画監督だが、これが発表されたのは肺結核で亡くなる直前だったという。

伊丹万作はどう書いているか。

「多くの人が、今度の戦争でだまされたという。みながみな口を揃えてだまされていたという。私の知っている範囲ではおれがだましたのだといった人間はまだ一人もいない。ここらあたりから、もうぼつぼつわからなくなってくる。多くの人はだましたものとだまされたものとの区別は、はっきりしていると思っているようであるが、それが実は錯覚らしいのである。たとえば、民間のものは軍や官にだまされたと思っているが、軍や官の中へはいればみな上のほうをさして、上からだまされたというだろう。上のほうへ行けば、さらにもっと上のほうからだまされたというにきまっている。すると、最後にはたった一人か二人の人間が残る勘定になるが、いくら何でも、わずか一人や二人の智慧で一億の人間がだませるわけのものではない。

（中略）

少なくとも戦争の期間をつうじて、だれが一番直接に、そして連続的に我々を圧迫しつづけたか、苦しめつづけたかということを考えるとき、だれの記憶にも直ぐ蘇ってくるのは直ぐ近所の小商人の顔であり、隣組長や町会長の顔であり、あるいは郊外の百姓の顔であり、あるいは区役所や郵便局や交通機関や配給機関などの小役人や雇員や労働者であり、あるいは学校の先生であり、といったように、我々が日常的な生活を営むうえにおいていやでも接触しなければならない、あらゆる身近な人々であったということはいったい何を意味するのであろうか。

（中略）

そして、もしも諸君がこの見解の正しさを承認するならば、同じ戦争の間、ほとんど全部の国民が相互にだまし合わなければ生きて行けなかった事実をも、等しく承認されるにちがいないと思う。

しかし、それにもかかわらず、諸君は、依然として自分だけは人をだまさなかったと信じているのではないかと思う」。

すべての日本人に戦争責任あり！

野崎さんも指摘しているが、伊丹万作は、すべての日本国民に戦争責任があると言っているのだ。

当時の新聞各紙は戦争を聖戦と煽り続け、それこそ日本国民をだまし続けた。朝日新聞で記者として活躍したむのたけじは、戦後、朝日新聞社内で誰も責任を取って辞める人がいない状況に驚き、自らの責任を取って朝日新聞を辞め、故郷の秋田県横手市に帰り、そこで週刊「たいまつ新聞」を発行し反戦の声を発信し続けた。四年ほど前に亡くなったが、このような人は本当に稀有な例で、多くは自己の戦争責任について頬かむりしたのだった。

戦争の最高責任者だった昭和天皇が責任を取らないのだから、岸らも「最高責任者が責任を取らないんだ、なに、俺の責任などない」と内心思っていただろう。骨の髄まで天皇信仰を持っていた日本人の多くも戦争責任などみじんも感じていなかっただろう。

天皇は戦後、焼け跡の日本を巡幸と言って各地を回ったが、行く先々で「天皇陛下万歳」の声で迎えられたから、やはり多くの日本人たちはまったく天皇の戦争責任など問題意識にも入っていなかったのではないか。

伊丹万作をもっと知ってほしい

伊丹万作と言っても、俳優やエッセイスト、映画監督であった伊丹十三の父親という程度しか知らなかった私だが、彼が書いた＜戦争責任者の問題＞の全文を読んでみたいと思い、現代日本映画論体系・全六巻の第一巻『戦争映画の出発』に収録されていることがわかり、図書館から借りて読んでみた。

全文を読み終えて、このような逸材を日本は戦後早々に失ったものだと思い、残念な気持ちになった。伊丹はこの原稿を書いたその年に亡くなった。享年 46。もし生きていて活躍していたら、戦後の映画界はもちろん、文化界ももっと豊かになったと思った。

伊丹の＜戦争責任者の問題＞の中で、新たに知った彼の文章の中で大いに共感したところを紹介しよう。それは次のようなところだ。戦争中は人々の服装などをしばしば厳しい目が光っていた。伊丹はこう書いている。

「たとえば、最も手近な服装の問題にしても、ゲートルを巻かなければ門から一歩も出られないような滑稽なことにしてしまったのは、政府でも官庁でもなく、むしろ国民自身だったのである。私のような病人は、ついに一度もあの醜い戦闘帽をいうものを持たずに済んだが、たまに外出する時、普通の有り合わせの帽子を被って出ると、たちまち国賊を見付けたような憎悪の眼を光らせたのは、親愛なる同胞諸君であったことを私は忘れない」。

現在のコロナ禍の中、電車やバスの中でマスクなどをつけないとどうなるか、まさに現代の日本でも同じような光景を彷彿させる。

「徹底的に自己を改造せよ」

伊丹は続けてこうも書いている。

「騙されたということは、不正者による被害を意味するが、しかし、騙されたものは正しいとは、古来いかなる辞書にも決して書いてはいないのである。騙されたとさえ言えば、一切の責任から解放され、無条件で正義派に成れるように勘違いしている人は、もう一度よく顔を洗い直さなければならぬ。

しかも、騙された者必ずしも正しくないことを指摘するだけに止らず、私は更に進んで「騙されるということ自体が既に一つの悪である」ことを主張したいのである。」

（中略）

「騙されるということも一つの罪であり、昔から決していいこととは、されていないのである。」

（中略）

「又、もう一つ別の見方から考えると、幾ら騙す者がいても誰一人騙されるものがなかったとしたら今度のような戦争は成り立たなかったに違いないのである。つまり、騙すものだけで戦争は起こらない。騙すものと騙されるものとが揃わなければ戦争は起こらないということに成ると、戦争の責任もまた（たとえ軽重の責任は有るにしても）当然両方に在るものと考える他はないのである。そして騙されたものの罪は、只単に騙されたという事実そのものの中にあるのでなく、あんなにも雑作なく騙される程批判力を失い、思考力を失い、信念を失い、家畜的な盲従に自己の一切を委ねるようになってしまっていた国民全体の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任等が悪の本体なのである。

このことは、過去の日本が、外国の力なしに封建制度も鎖国制度も独力で打破することが出来なかった事実、個人の基本的人権さえも自力で掴み得なかった事実と全くその本質を等しくするものである。」と喝破している。

そしてこうも書いている。

「『騙されていた』と言って平気でいられる国民なら、恐らく今後も何度も騙されるだろう。いや、現在でもすでに別の嘘によって騙され始めているに違いないのである。

一度騙されたら、二度と騙されないとする真剣な自己反省と努力がなければ人間が進歩するわけはない。この意味から戦犯者の追求ということも無論重要であるが、それ以上に現在の日本に必要なことは、先ず国民全体が騙されたということの意味を本当に理解し、騙されるような脆弱な自分というものを解剖し、分析し、徹底的に自己を改造する努力を始めることである。」

戦争責任は今でも追及するべき課題だ！

伊丹の文章を読むと、今でもリアリティーがある言葉だと思う。吉本隆明なども「文学者の戦争責任」について論じたが、その論議は文壇や論壇の一部の中で終わってしまったのでないか。戦争責任の問題が、いわば庶民レベルにまで波及しなかった。単なるインテリだけの世界でその論議を終わらせることなく、いわば一般の＜ふつう＞の人々の中でも、このような＜戦争責任＞の問題が論じられれば、退陣した安倍のように＜憲法改正＞（改悪だ！）だとか、＜戦後政治の総決算＞だ、と言ったような発言が大手を振っていた状況は来なかったかもしれない。「同調圧力」に弱い日本人、今後も心して掛からなければいけないだろうと思う。

（おおるい・よしひろ：本会理事長。著書『ある華僑の戦後日中関係史―日中のはざまに生きた韓慶愈』（明石書店）共著に『風雪に耐えた日本人公墓―ハルビン市方正県物語』（東洋医学舎）他）

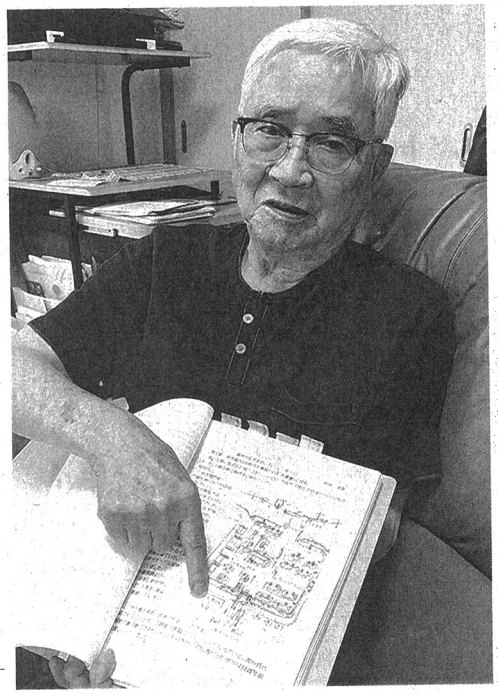
東京新聞（2020年10月2日付夕刊）より転載

不安が生む分断 繰り返すな

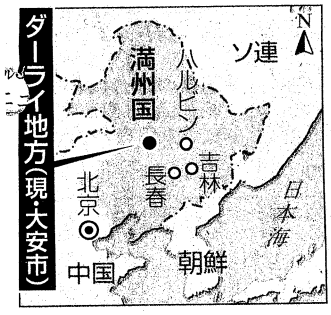
満州のペスト禍記録 85歳が警鐘

感染への恐れから特定の人々を差別し、攻撃する―。旧満州（中国東北部）の体験を語り継ぐ「北陸満友会」会長の宮岸清衛（きよえ）さん(85)＝石川県野々市市＝は、満州でペストが流行した際の出来事を記録にまとめている。きっかけは、現在の新型コロナウイルスの拡大。当時の日本人が他民族を差別し、集落を焼き払ったことを証言し、「感染不安が人と人を分断した。75年以上たった今も同じことが起きている」と警鐘を鳴らす。

（都沙羅）



満州での体験をまとめた資料を見ながら当時を振り返る宮岸清衛さん＝石川県野々市市で



宮岸さんは父親の仕事で一九四二年に金沢から満州国ダーライ地方（現・大安市）に移り住み、地元の国民学校に入学。中国人や朝鮮人のコミュニティーがあり、「日本の子どもも集まって羽根突きや陣取り合戦をしてよく遊んだ」。

数年後、致死率の高いペストが流行すると状況が一変した。政府は感染を抑えるため細菌を媒介するネズミの捕獲者に現金を支給。ネズミに触れることは感染リスクを伴う。貧しさからネズミの捕獲で日銭を稼ぐ中国人の家族もおり、彼らへの差別意識が高まっていった。「父親に『中国人の子たちとは遊んではいかん』と度々言われた」

現地の子と遊ぶな ◆ 集落ごと焼き払い

感染が広まったある日、国民学校に近い中国人の集落から煙が上がるのを見た。病に伏せる高齢者や重症者を家屋に残したまま、日本軍が火炎放射器で集落ごと焼き払っていた。

「炎が家々を包む様子が目に焼き付いて」。目の当たりにした宮岸さんは衝撃を受けた。だが、周囲の日本人たちは「家にペストが染み付いてるから仕方ない」と黙認していた。宮岸さんが知るだけで、こうした集落の焼き払いはその後、二、三回あった。

終戦から七十五年。宮岸さんはコロナ禍で医療従事者らへの差別など、ウイルスへの恐怖がさまざまな分断を生んでいる現状を懸念し訴える。

「疫病は怖いもの。だが戦争の記憶を受け継ぐ機会が減ることで、平和を願う人々をさらに分断させてはいけない」

金沢市などで語り部活動を続けている北陸満友会はコロナ禍で休止していたが、八月から活動を再開。宮岸さんもペストの記憶を冬までに語る予定だ。問い合わせは同会＝電076（248）3533＝へ。

本当の地獄 敗戦後だった

襲撃された開拓団 逃避行でも悲劇

戦後75年

群馬と満蒙開拓 1

前橋→旧満州→長野原　藤川ちゃう子さん(88)

浅間山を望む長野原町北軽井沢に「ハイロン」と呼ばれる地区がある。レタスやキャベツ、トウモロコシなどの畑作、そして酪農が盛んな地域だ。風変わりな地区名の由来を知る人は少ない。はるか遠く、中国黒竜江省の「海倫」にちなむことを。

さかのぼること約80年前。今の中国東北部に日本が主導して建国した「満州国」の大都市ハルビンの北約200㌔の浜江省海倫県（当時）には「群馬村」があった。群馬からの移民が築いた村だった。満州と群馬。結びつけたのは開拓農民と戦争だった。

長野原町応桑に住む開拓農家の藤川（旧姓石井）ちゃう子さん(88)は1939（昭和14）年4月、木瀬村（現前橋市）から父の石井実治さんと母、姉弟4人の家族6人で満州に渡った。小学2年生だった。

開拓団本部で共同生活を送り、入植の300戸は「赤城郷」「榛名郷」「妙義郷」と名付けた開拓地に分かれ、村づくりに励んだ。石井家は赤城郷の旭区。子どもたちは本部の寄宿舎に入り、日本人の国民学校で学んだ。土曜日に本部勤めの父に馬に乗せてもらい、自宅に帰るのが楽しみだった。

日本人の集落は鉄条網と土壁で囲われ、各家庭に銃があった。「匪賊」と呼ばれた武装集団からの襲撃に備えていた。近くに満州人の集落や商店があり、遊びにも行ったが、「1人で行ってはいけない」ときつく言われていた。

見渡す限りの平原。地平線まで畑が続いていた。広大な石井家の畑は「苦力」と呼ぶ満州人の小作人が耕した。大豆やジャガイモ、トウモロコシ。肥沃で何でもよくとれた。収穫して食糧難の日本に送った。

満州に渡った1939年4月、海倫への途中でハルビンの知人（奥左）と撮影した石井家の家族写真。前列左から2人目がちゃう子さん
＝藤川さん提供

平穏な日々は続かない。45年8月9日、ソ連軍が満州に攻めてきた。そして15日の敗戦。日本陸軍の関東軍は武装解除された。

「本当の地獄が始まったのは、敗戦後だった」。海倫群馬村に進駐したソ連軍は金目のものを根こそぎ奪い取った。自衛の銃などすべての武器も取り上げた。

9月11日朝。丸裸になった開拓団に千人を超える匪賊が襲いかかる。銃の形をした「木銃」の先に鍬の刃を加工してつけた銃剣のようなものを持たされたが、銃には立ち向かえない。

匪賊がなだれ込み、みな学校に逃げ込んだ。容赦なく銃で撃ち込んでくる。銃弾が飛び交う中を逃げ惑った。バーン。目の前で母が倒れた。「母ちゃん」。駆け寄ろうとしたが、「危ない。立ち上がるな」と止められた。火薬の臭いがたちこめた。気がつくと右腕がやけどしたように痛い。猟銃で撃たれ、散弾が10発ほど食い込んでいた。服は血だらけだった。

母の左腕は貫通銃創で肉が垂れ下がった。父も猟銃で撃たれ、血を吐いて倒れた。庭に連れ出された父は後ろ手に縛られ、匪賊が刀で切りつけようとしていた。「父ちゃんが殺される」と思ったが、切られずに済んだ。両親と共に命だけは助かった。

襲撃で30人が死亡したという。犠牲者の遺体を事務所に集めて火を放ち、8年かかって築いた「群馬村」を後にした。

満州国の首都だった新京（現長春）への逃避行も生きた心地がしなかった。途中で亡くなった人もいた。命からがらたどり着き、傷が重かった母は左腕を上腕部から切断せざるを得なかった。

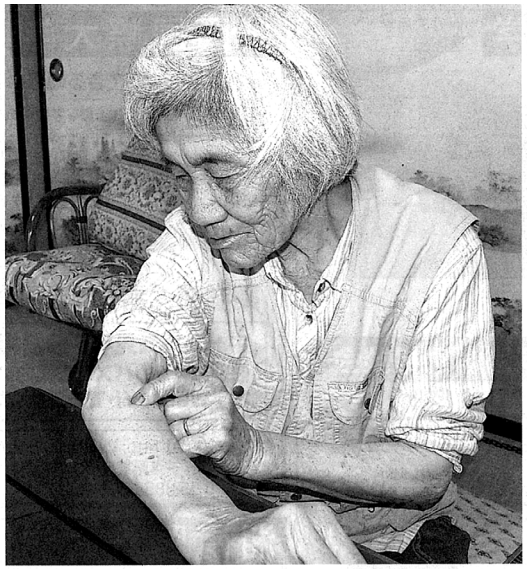
関東軍の官舎にぎゅうぎゅう詰めの避難生活は、冬の寒さと飢え、発疹チフスなどの伝染病に苦しんだ。翌46年に引き揚げが始まるまでに100人もの命が失われていった。帰国できずに残留婦人になった人もいたという。

石井家は両親と満州生まれの子どもを含め7人で引き揚げたが、戦後の食糧難で故郷に居場所はなかった。引き揚げ者仲間と共に「第三の故郷」として浅間山ろくに入植した。父は撃たれた傷の影響で入植間もない49年に45歳で亡くなった。「満州で死ぬんじゃない。ここまで連れてきた。勘弁してくれ」。先に逝くことをわび「開拓だけは続けてくれ」と遺言した。家族は義手で働く母を助け、原野を切り開いていった。

「地獄で生かされた」というちゃう子さん。ハイロンと呼ばれるようになった開拓地の小高い丘に、「海倫群馬村開拓団殉難者慰霊之碑」が立つ。あの襲撃があった9月11日には毎年慰霊祭があり、犠牲者を悼む。（柳沼広幸）

！ 中国東北部に日本がつくった「満州国」に渡った開拓移民。日本の敗戦後に殺されたり、故郷へ帰れなくなったりした人もいた。満州で何があったのか。戦後をどう生きたのか。悲劇の体験者は少なくなった。家族の歩みをたどりながら、戦後75年を考える。

浅間山を背にして立つ海倫群馬村開拓団殉難者慰霊之碑＝長野原町北軽井沢


藤川ちゃう子さんの右腕には75年前に撃たれた散弾の痕が残る＝長野原町応桑

満蒙開拓

1932～35年は試験移民で在郷軍人らの武装移民。国策後の37年からは県や町村で送り出す「分村・分郷」で大量に渡った。15～18歳の満蒙開拓青少年義勇軍も合わせると約27万人。うち群馬県は約8780人。敗戦後の抗日武装集団の襲撃や集団自決、寒さや食料不足、伝染病などで約8万人が亡くなった。中国側は満州を国と認めず「偽満州国」とする。

■満蒙開拓に関わる主な出来事

1905年	日露戦争後、日本が満州の鉄道利権を得る
12年	辛亥（しんがい）革命で中国の清王朝が倒れる。最後の皇帝、愛新覚羅溥儀は、後の満州国皇帝
28年	満州に展開する日本陸軍の関東軍が軍閥・張作霖を爆殺
29年	世界恐慌が始まる
31年	関東軍は南満州鉄道爆破の柳条湖事件を発端に満州全域を占領
32年	満州国建国。「五族協和」「王道楽土」をスローガンとしたが、日本が実権を握る傀儡（かいらい）国家。満蒙開拓移民が始まる
36年	関東軍の「満州農業移民」計画が国策に。20年間で100万戸、500万人を送る計画。対ソ連の国境防衛のほか、国内では疲弊した農村の経済立て直しの狙い
37年	盧溝橋事件を発端に日中戦争が始まる
41年	太平洋戦争が始まる
45年	戦況悪化で開拓団の成人男子は「根こそぎ動員」。8月9日、ソ連軍が満州に侵攻。15日、敗戦。開拓団の逃避行が始まる
46年5月	引き揚げが始まる。中国人に子どもを預けたり、結婚したりして残留孤児・婦人となった人も
72年	日中国交正常化
81年	残留孤児の訪日調査開始

死線越え帰国 開拓に尽力

召集・捕虜・抑留 波乱の人生

戦後75年

群馬と満蒙開拓 2

長野原　柴崎三郎さん(94)

庭に立つ柴崎三郎さんと石碑。裏側に波乱の人生が刻まれている＝長野原町北軽井沢

「なぜ、浅間山のふもとにたくさんの開拓地があるのか」。長野原町は小学3、4年生が学ぶ副読本で「田や畑を切り開いた人びと」を取り上げ、開拓の歴史や先人の苦労を子どもたちに伝えている。

お盆を前にした11日、同町北軽井沢の大屋原地区で地域の共同作業「お天馬」があり、共有施設の草刈りをした。満州（現中国東北部）での死者を悼む「群馬満蒙拓魂之塔」の周りも夏草を刈り払った。

大粒の汗を流した柴崎弘光さん(59)は、町立応桑小学校の校長。大屋原の開拓農家の三男として生まれ育った。副読本の編集委員を務め、改訂に携わった。

北軽井沢の開拓は戦後の1946～49年に193戸が入った。多くが満州で開拓をしていた人たち。「命からがら体一つで引き揚げてきた」と副読本は教える。大屋原、ハイロン、甘楽、群高、アテロ、下小菅と開拓地が広がった。

開拓農家の一人が柴崎さんの父、三郎さん(94)。木瀬村（現前橋市）から、村出身者が入植した満州国吉林省磐石県の**駅馬開拓団**を43年4月に訪れた。「半年の慰問」のつもりが**清水圭太郎団長**に見込まれ、引き留められた。報国農場の指導員助手として内地から来る人に大陸の農業を指導した。

戦争の激化で満州各地の開拓団の男は「根こそぎ動員」された。45年5月、19歳の三郎さんにも召集令状がきた。ソ連との国境の最前線、黒河省（現黒竜江省）山神府に歩兵として送られた。敗戦でハルビンで武装解除され、捕虜となった。ソ連の収容所に抑留され、シベリア鉄道の保線作業をさせられた。

極端な食料不足による栄養失調、過労、寒さで衰弱した。下痢と血便で体重は30㌔と骨と皮ばかりに。入院し、2カ月かかって回復した。「運が良かった。病院に入れなければ死んでいた」と三郎さん。48年5月の引き揚げ船で帰国した。

先に引き揚げ、大屋原で開拓していた元団長の清水さんに誘われ、リュック一つで入植した。50年結婚。唐松林や笹原を切り開いていった。「本当に貧しかった。初期の開拓者の子どものお昼はトウモロコシ3本なんてこともあった」

標高1100㍍の火山灰のやせた土地。高冷地は作物が育ちにくい。アワやキビ、大豆など様々な作物を試した。草はよく伸びるため、酪農を導入し、徐々に生活が楽になっていった。

酪農を導入したころの大屋原の開拓の様子＝柴崎三郎さん提供

柴崎家の庭から浅間山がよく見える。巨大な石碑に「柴崎家由来と自叙傳」を刻んだ。柴崎家の来歴、満州での開拓、シベリア抑留、戦後開拓。波乱の人生を記し、短歌も残した。

命ながらえ辿り着きたり北軽に風雪しのぎし笹小屋の開拓地

（柳沼広幸）

駅馬開拓団と清水圭太郎団長

駅馬開拓団は敗戦直後の8月20日、避難途中で匪賊（ひぞく、武装集団）に襲われ、36人が死亡。清水圭太郎団長は「処刑」を告げられたが、満州人が「殺してはいけない」と嘆願し、助かった。伝染病などもあり、引き揚げまでに100人以上が亡くなった。引き揚げ者の一部は北軽井沢に入植。「草をつくる、牛をつくる、土地をつくる、村をつくる、人をつくる」の5原則を掲げ、酪農などを成功させた。1967年度の朝日農業賞を受賞。

被害者でも 加害者でもある

祖父の体験に学ぶ 真の歴史

戦後75年

群馬と満蒙開拓 3

前橋 小池安好さん(94)　孫の法政大3年・豪樹さん(21)

赤城山の南に広がる前橋市東金丸町の開拓地の野菜農家小池安好さん(94)は今年7月、長野県阿智村にある満蒙開拓平和記念館を訪ねた。次男の春雄さん(67)、孫の豪樹さん(21)も一緒だった。

満蒙開拓には全国から約27万人が送り出され、長野県は約3万3千人と突出して多かった。開拓生活、ソ連軍の侵攻と敗戦、開拓団の集団自決、逃避行中の悲劇、残留孤児と残留婦人、引き揚げ後の生活。何があったのかを伝えている。

小池さんには展示や証言の一つひとつが人ごとではない。満蒙開拓、兵役、シベリア抑留を経験した。

木瀬村（現前橋市）出身で1942年春、両親と子ども7人の家族で渡り、吉林省磐石県の駅馬開拓団に入った。小作農を脱し、「10～20㌶の農地がもらえる」と新天地にあこがれた。

開拓は長くは続かなかった。戦況の悪化で44年10月に「繰り上げ召集」され、ソ連軍とにらみ合う黒河省（現黒竜江省）山神府でタコツボ（塹壕）掘りに明け暮れた。45年8月9日、ソ連軍が攻めてきた。

15日の終戦を知らされないまま20日に戦闘が始まった。ソ連軍の戦車を迎え撃つが、日本の対戦車砲にはビクともしない。塹壕の隣で応戦していた戦友は鉄かぶとを弾が貫通して戦死した。「鼻と口から脳みそのような黄色いものが吹きだしていた」

戦闘は3日続いた。塹壕で泥水をすすってしのいだ。ソ連軍の迫撃砲は小池さんの最前線の塹壕を飛び越え、後ろの日本兵が犠牲になった。中隊の2割が戦死した。別の隊では爆弾を胸に抱えて戦車に飛び込む特攻「肉攻手」が行われたという。

捕虜になり、ハバロフスク近郊の収容所に抑留され、石炭掘りの補助作業などに従事した。栄養失調と寒さで戦友は次々と亡くなった。「若かったから生き残れた」と小池さん。収容所で最後の49年8月に引き揚げた。先に帰郷できた両親は赤城山ろくの開拓を始めていた。

あこがれて渡った満州とは何だったのか。

「大和民族は優秀だから指導的立場にある」と、日本人は特権的に振る舞った。住民から土地や家屋を安く取り上げた。暖房や炊事に欠かせない木を切るのも日本人はノコギリを使えるが満州人はナタなどに制限したという。「指導民族」の教育を受け、当時は当たり前だと思っていた。

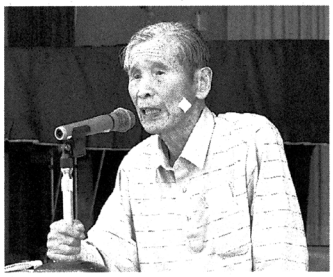
戦後に民主主義を学び、「中国の人に大変な迷惑をかけた」と気付いた。開拓団が襲われたのも恨まれていたからだ。国策で渡った開拓移民は「被害者であると同時に加害者でもある。侵略だった」と小池さん。

法政大3年の豪樹さんは、教科書で満州のことは習わなかった。「祖父のように『加害者』と言うのは勇気がいること。日本人が行く前は満州人の暮らしがあり、生活や文化を日本人が変えてしまった。歴史を正しく知り、過去の過ちに学ばなければいけない」

ナチスドイツのユダヤ人虐殺などを友人と話すことはあっても、日本に不都合な話は知らなかった。だが、やがて生まれてくるだろう自分の子どもには伝えていきたい。

（柳沼広幸）

群馬満蒙開拓歴史研究会が企画した開拓団跡地などを訪ねる旅に、小池安好さん（手前）は親子3世代で参加した＝2019年6月、中国・ハルビンのスターリン公園、小池さん提供



群馬満蒙開拓歴史研究会で戦争体験を語る小池安好さん＝22日、前橋市河原浜町の大胡公民館ホール

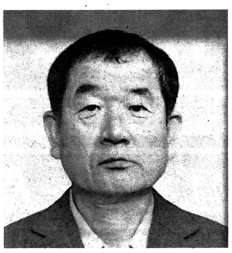
谷底目がけ妹の死体投げた

父の詩残すべき 子らが出版

戦後75年

群馬と満蒙開拓 4

左 青木覈さんの長男の暁さん、妻の和子さん、長女の赤石はるなさん（左から）。詩集と遺影を持って＝渋川市中村



青木覈さん

左 「妻への手紙―あおきあきら全詩集―」

今年6月、一冊の詩集が出版された。「妻への手紙―あおきあきら全詩集―」（群馬詩人会議）。著者は渋川市中村の青木覈さん。2017年に81歳で亡くなった。生前、全詩集の出版を願っていた。

印刷見習工の若き日の詩作、仕事や生活に根ざした作品、愛する人への思い。

渋川 故青木覈さん

市井に生きた人柄が伝わる。そして満州（現中国東北部）で戦災孤児になった時のつらく悲しい詩は、歴史の証言になっている。

青木さんは1944（昭和19）年、両親と妹2人の家族5人で満州に渡った。北安省（現黒竜江省）克東県の前橋郷開拓団。翌45年8月、敗戦で日本人と満州人の立場は逆転した。度々、匪賊（武装集団）に襲撃され、殺されたり自決したりと犠牲者が続出した。ハルビンを経由して撫順炭鉱に逃れたが、そこでも栄養失調と伝染病で次々と亡くなった。

「オマエ ステテコイ／旦那が妹を抱き上げた。／ステテクレバ オカネヤル／かみさんがぼろ毛布にくるんだ。／トンネルノムコウ ヤマノナカニステロ／満人夫婦が麻縄でおれの背中に縛り付けた。／妹は人形のように軽かった」（「雪だるま」の一部）。

戦後の記録などで、青木さんは父を45年12月に発疹チフスで、翌年2月には衰弱した母と妹を相次いで亡くした。3月には満州人に託した下の妹が亡くなり、杉林へ捨てに行かされた。

「峠のてっぺんから／谷底目がけて／おれは妹の死体を投げた。」

10歳で敗戦を迎え、孤児になりながら避難生活を耐え抜き、46年夏に引き揚げた。豊秋村（現渋川市）の祖父母宅に身を寄せ、中学を出て横浜で印刷見習工になり、横浜文学集団で詩作に励んだ。印刷技術を身につけて帰郷し、前橋市の印刷会社に勤めた。

「かあちゃんが死んだら／歯医者さんを呼んできなさい／そして金歯を抜いてもらいなさい。／それを売って黒パンを食べなさい」「おまえはどんなことをしてでも日本に帰るんだよ／日本に帰ってお線香をあげておくれ／それからかあちゃんの大好きな／大福とぼた餅もあげておくれ。」（「黒砂糖」の一部）。

半世紀後の97年、中国に慰霊の旅をした。妹を捨てた杉林にはビルが立ち並んでいた。焼香し、父には群馬の地酒、母には大福餅、妹にはリカちゃん人形を供え、念願を果たした。

詩を書くのが生きがいだった。生前出した4冊目の詩集のあとがきに、家族への感謝と、「八十歳まで生きることが出来たなら、全詩集を出版したい」と書いてあった。

亡くなって1年後、机の引き出しから校正途中の原稿が見つかった。妻和子さん（84）へのラブレターのようだ。長女で保育士の赤石はるなさん（57）と長男の会社員暁さん（51）は「父の夢を形にしたい」と動いた。生前の4詩集と未発表作品、妻への手紙を一冊に編み、誕生日だった6月1日に出版した。

家族に満州の苦労話はしなかった。「父の詩は暗い体験が書かれ、読むのがつらくて避けてきた。しかし、戦争を風化させないためにも残すべき大切な詩だ」とはるなさん。「平和への願いを込めて表現したんだと思う」と暁さん。

「生きた証しになった」

和子さんは「いろんな苦労がありましたが、覈さんと人生を送ることができてよかった」。お盆には、墓前と仏壇に、好きだった焼酎を供えた。（柳沼広幸）

満州で離別 弟2人どこに

兄が迎え「残留孤児」免れる

戦後75年

群馬と満蒙開拓 5

長野原　湯本啓子さん(88)

「あの時、兄が迎えに来なければ、残留孤児になっていたかもしれない……」

長野原町北軽井沢の湯本（旧姓秋南）啓子さん(88)は75年前、満州（現中国東北部）で両親と5男1女の家族が離散した。いまも弟2人の消息はわからないままだ。

前橋市で暮らしていた一家は、先に満州に渡った父と長兄を追って1944（昭和19）年9月、北安省（現黒竜江省）克東県の前橋郷開拓団に入植。開拓に従事して1年足らずで、45年8月15日の敗戦。環境は一変した。集落が襲われ、弟の手を引いて自宅の窓を飛び出し、雨でぬかるんだ道を裸足で逃げた。着の身着のままの逃避行が始まった。

ジャガイモなどで命をつなぎ、撫順炭鉱の収容所に逃れたが、そこは栄養失調と伝染病が蔓延。「朝起きると誰かが死んでいた」

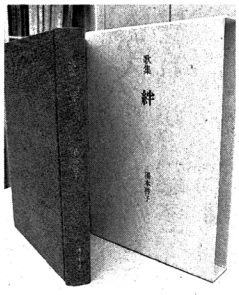
無一物となりて引揚（ひきあげ）待つ冬を弱き者より倒れゆきたり

戦後に短歌を始めた啓子さんが、満州を思いながら詠んだ歌だ。45年12月、発疹チフスで父が逝き、母も病に倒れた。啓子さんは炭鉱で働いていた中国人の夫婦に養子に出された。

養父母のもとへ行けとぞ母上がわれに手合す病の床に

母は中国人からお金を受け取った。「今のお金で900円ぐらい。あわ餅1枚が10円だから何日もは食べられない金額だった」

満州を詠んだ短歌の原稿と湯本啓子さん＝長野原町北軽井沢



湯本さんが出した歌集「絆」。満州を詠んだ短歌も収められている

養父母が母に渡せしわづかなる銭もて弟らの飢凌ぎしか

悲しくて泣いたが、「生きるためにはどうすることも出来なかった」。間もなく亡くなった母の死に目には会えず、次男と四男の弟2人も相次ぎ早世したことも、生き延びた二つ上の長兄から聞いた。

46年6月、「日本人は引き揚げる」と兄が迎えに来た。よくしてくれた養父母に、あいさつもせず黙って出てきてしまったのが今でも心残りだ。

葫蘆島（ころ）から引き揚げ船に乗り、京都の舞鶴港に着いたのは7月。たった一人で長野原町の養狐（よう）業の祖父宅にたどり着いた。兄は遅れて9月に帰国した。

三男と五男の弟2人とは生き別れた。後に残留孤児の調査が始まっても、弟らしき人は見つからなかった。「生きているとしたら、どんな暮らしをしているのか……」

生かされし兄とわれとの負目（おいめ）なる弟を思ひ苦しみて来し

満州のことは「思い出したくない」と、人にもあまり話さなかった。半世紀後の96年、長年続けた短歌の歌集を出した。自然詠などが中心だが、満州と家族への思いを込めた歌20首も収めた。「私の悔恨と、亡き者たちの供養に」。歌集のタイトルは満州の歌につけた「絆」からとった。

（柳沼広幸）

中国残留婦人と日本人孤児

敗戦で中国に取り残された日本人のうち満13歳以上の女性が残留婦人、13歳未満の子どもが残留孤児と呼ばれる。厚生省（現厚生労働省）は当初、残留婦人は自らの意思で残ったとして援護の対象にしていなかった。1993年に残留婦人12人が自費で集団帰国したのを機に支援するようになった。

中国人に預けた妹 心残り

歴史の重み 若者に伝えたい

戦後75年

群馬と満蒙開拓 6

高崎　飯島治起さん(83)

1997年、少年期を過ごした少数民族の村にある義父の親戚宅を訪ねた飯島治起さん（右）＝飯島さん提供

週末に訪ねてくる長男（中央）や日本で再婚した妻（左）とのだんらんを楽しむ飯島治起さん＝高崎市北久保町

満州（現中国東北部）に生活の糧を求めた父の決断で、飯島治起さん(83)の一家は辛酸をなめた。父と弟を亡くし、中国人に預けた妹はいまだ行方知れず。戦争の悲劇は続いている。

飯島さんは現在、高崎市北久保町の県営団地に住む。4歳だった1941年、館林市出身で大阪市で理髪店を営んでいた父に連れられ、秋田県出身の母と2男2女の家族6人で興安東省（現内モンゴル自治区）阿栄旗に渡り、大阪開拓団に加わった。2㌶の畑で大豆やトウモロコシを栽培したが、農業は素人で収穫が少なく、食べるのに困ったという。

病弱な父は農作業に耐えられず帰国を決心した。45年、荷物をまとめて離団したが、戦局の悪化で列車の切符を買えなかったばかりか、父が急死。母子は開拓団に戻った。

敗戦で、開拓団はチチハル駅からの帰国を目指したが、ソ連軍の占領で難民になった。学校の校舎に収容され、酷寒と飢えで死者が続出。当時7歳の弟も犠牲になった。母も病に倒れ、やむなく4歳の妹を中国人に預けた。その年の暮れ、母は「親子の命を永らえるには」と中国人と再婚。飯島さんは義父の子、何始起（シチ）と名を変え、死を逃れた。

中国に十数万人の少数民族「ダフール族」の村だった。家は貧しかった。畑の収量は少なく、衣食にも事欠いた。それでも「九死に一生の恩人」と、学校を休んで義父の農作業を手伝い、家畜の世話をした。

「居候の身。わがままを戒めて我慢した」。登下校や農作業の合間にも教科書をむさぼり読んだ。成績優秀で、家でもよく手伝うと評判になった。上級学校への進学に反対だった義父を先生や村人が説得してくれた。中国共産党傘下の全国組織・少年先鋒（せんぽう）隊の隊員になるなど、模範生だった。

地元の農業学校を経て国営牧場に就職。定年の60歳まで勤め、牧場トップの党書記も務めた。

94年に義父が亡くなると、母は「日本に帰りたい」と望んだ。貧しい農家に嫁がされて苦労した姉が95年、父ゆかりの群馬の高崎市に永住帰国。母は翌年、姉を頼って帰国、同居した。95年に妻を亡くした飯島さんも「苦難を乗り越えてきた母と姉と残りの人生を一緒に過ごしたい」と定年翌年の98年に帰国した。一緒に帰国した長男の家族らが足しげく訪れ、平穏な老後を送る。

心残りは満州で預けた妹のことだ。いまだに消息不明。2016年に102歳で亡くなった母は、死ぬまで預けたことを後悔していた。飯島さんは「必ず生きていると信じている。会いたい。日本に帰国させてあげたい」。

大阪で生まれた飯島さんは、人生の大半を中国で暮らし、群馬で晩年を送る。「戦争によってもたらされた。自分で決めたわけじゃない。おかげで波瀾（はらん）万丈の人生となり、困難を乗り越えて成長する力がついた」

若い人たちには過去の出来事を知ってほしい。戦争の犠牲者、生き証人として高校で体験を語る。若い世代が歴史の重みを感じ取ってくれることが、飯島さんの願いだ。

（野口拓朗）

帰農開拓団

満蒙開拓は農業移民が中心だが、都市部の商工業者らが満州で農業に従事する帰農（転業）開拓団もあった。後から渡った開拓団ほどソ連国境寄りに送られた。日本で空襲が激しくなると「疎開開拓団」として渡る人もいた。終戦間際まで開拓団は送り出され、戦況の悪化は知らされていなかった。

中国の家族と 祖国日本へ

親族探せぬまま永住帰国

戦後75年

群馬と満蒙開拓 7

原淑江さん（左）と静子さん＝いずれも前橋市西善町の「常楽園」

前橋　原淑江さん(77)

自分の本当の名前を知らない。いつ、どこで生まれたのか。両親は何をしていたのか。前橋市広瀬町の原淑江さん(77)は、覚えていない。中国残留孤児だった。

75年前、敗戦後の混乱で満州（現中国東北部）のチチハルで親とはぐれた。食べ物を求めて街をさまよい、疲れて横たわっていると、通りすがりの中国人の少女が饅頭（蒸しパン）をくれた。傷だらけの体でボロボロの浴衣姿。少女について行った。「なんで日本人の子どもを連れてくるんだ」と、少女の両親は家に入れてくれなかった。行くところがなく、街で「日本鬼子」と中国人の子どもたちにいじめられた。結局、見かねた少女の両親に引き取られ、張淑清と名付けられた。

後年、養父母や少女から聞いた話だ。

養父は戦時中、日本人の会社で働いていた。饅頭をくれた少女は18歳。下に16歳の少年もいた。兄になった少年は勉強を教えてくれた。養父母は中学、専門学校と進学させてくれた。卒業後、牡丹江市の国営企業で会計士として働いた。

「とても親切で、よくしてもらった」と養父母に感謝する。日本人孤児の中には子どもの頃から働かされ、学校に通えず名前も書けない人もいる。「私は運が良かった」

原淑江さん（右）が一日の大半を過ごすデイサービス施設

残留孤児の調査で1986年に来日し、親族を探したが、見つからなかった。「日本人なので日本に帰りたい」。87年、中国人の夫と長女、次女を連れて家族4人で永住帰国した。身元引受人の関係で北九州市に、後に前橋市に移った。

家族もまた苦労した。長女の静子さん(49)は、母が日本人だとは知らなかった。日本に来た時は17歳。日本語が分からず中学校に通わされた。言葉が分からない無力さ、習慣の違い、孤独感。円形脱毛症にもなった。

転機は夫となる一文さん(52)との出会いだった。中国の医科大に通う父方の親戚だった。21歳で結婚。楽天的で積極的な一文さんにつられるように、静子さんも笑顔を取り戻していった。

一家の永住帰国から30年余り。淑江さんは、一日の大半を前橋市西善町のデイサービス施設「常楽園」で過ごす。静子さん夫妻が2013年に開いた。

淑江さんは、日本語の演歌をカラオケで歌ったり、健康体操をしたりして過ごす。中国語が話せるスタッフもいて心強い。

残留孤児で高齢の帰国者は、淑江さんも含めて日本語が話せない人が多い。病院にも行けずに孤立し、自殺を図った人もいる。「大変な苦労をしてきた。老後は笑って過ごしてほしい」と静子さん。

施設の定員は現在10人。さらに充実させるため、残留孤児の引き揚げ者に限らず、利用者を地域に広げてきた。静子さんは市内の看護学校に通い、若者に交じって資格をとる勉強もしている。「認知症や精神疾患などの医学的な知識を学び、介護に生かしていきたい」

（柳沼広幸）

＝終わり

永住帰国

厚生労働省の7月末までのまとめで、中国残留孤児と分かったのは2818人。このうち身元が判明したのは1284人。日本に永住帰国を果たしたのは、残留孤児が2557人（家族を含めた総数9381人）、残留婦人などが4167人（同1万1530人）。

しんぶん赤旗（2020年8月22日付）より転載

土曜ワイド

戦後

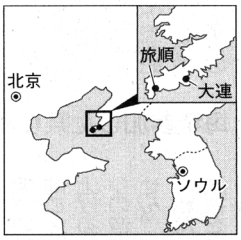
見学旅行で知った〝母国〟との違い

記憶のなかの「満州」（上）

川本サチさんのふるさと

1924年12月生まれの川本サチさんは今年6月、95歳で永眠しました。戦争の惨禍を体験した世代。お話を伺ったのは92歳の時。何度も「いやねぇ、記憶がはっきりしないわ」とため息をつきました。無理もありません。70年以上も前のことですから。ただ、サチさんが生まれ育った懐かしい故郷は、日本の傀儡国家「満州国」（現中国東北部）だったのです。サチさんの記憶に残る「満州」の暮らしとは―。

（青野圭）



サチさんの父親は、大学卒業後、奉天にあった国策会社「東亜煙草」に就職。その後、旅順に置かれた日本の統治機関「関東庁」の専売局に勤めた公務員でした。サチさんは5人姉弟の次女でしたが、長女は17歳、弟は生後6カ月で亡くなりました。

母が家庭教師に

生まれたのは母の実家（愛媛県）。実家でお産する方が楽でしょ、実家に帰って産んでくる人も多かったのかな。

サチさん（中央）の一家。大連で（親族提供）

旅順の住まい（官舎）は、通っていた小学校から約1キロの所。真ん前に粛親王の邸宅があってね。内地の小学校で教員をしていた母が、家庭教師で日本語を教えてたの。粛親王のおうちじゃなくて、少し離れた所に第4夫人がいたらしいの

清朝の有力皇族だった粛親王の邸宅跡（深見史さん撮影）

ね。いつも着物を着てた母が、洋服着て茶色の中ヒールの靴をはいて出かけたの。

当時、映画館や喫茶店は「監視する役の人がいて」なかなか入れなかったようですが、子どもたちは元気に遊んでいました。妹の敦子さんの手記に「母は夏休みになると、旅順港の中に作られた海水プールに…毎日のように連れていってくれました」とあります。

小学校の校庭の真ん中に蛇口があって、冬の朝、〝小使い〟さんが校庭に水をまくの。きれいなスケート場ができた。

旅順は学校と役所ばっかりの街でね、バスで1時間の大連はにぎやかな商業都市なの。「満州国」（32年）ができあがって関東庁が、ちょっと小さな関東州庁になって大連に移ったから、尋常小学校の5年生までいた旅順から大連に引っ越した。

大連の官舎はレンガ造りの2階建てで、1階と2階に6畳間が二つずつ。ペチカ（暖炉）のほか石炭スチーム（蒸気）で家全体が温まった。どの学校もスチームだったわ。

普通の家でもクーニャン（若い女性）とかボーイとか、中国人を雇おうと思えば、いくらでも雇えた。日本語ができなきゃ働けないけど、中国人は日本語ができるもんだと思いこんでね。うちは女の子が3人いたから雇わなかったけど。

「同じくらいのとしの子」の満蒙開拓青少年義勇軍を大連港のふ頭で迎え、「頑張ってー」と大連駅で見送ったこともありました。

試験受けず入学

官立の高等女学校は入学試験があったの。正月に〝受験を取りやめた、内申だけでいい〟ということになって〝試験受けずに、私たち得したね〟って喜んだけど。戦争が激しくなってきてたのね。女学校では俳優のブロマイドを買うのがはやってね、デパートのブロマイド売り場にいって、原節子、上原謙とか集めたわ。

女学校は1学年5クラス（松、竹、梅、菊、桜）、1クラス50人だけど、1クラスに1人ずつ中国人がいたわね。親日家で金持ちの娘。休み時間には、クラスをこえて廊下でよくおしゃべりしてた。ああ、中国人同士、おしゃべりしたいんだなって思った。

2010年6月13日、妹の敦子さん（中央）が旅順の生家を訪問。ホテルで手配した車は「粛親王邸の真向かいへ」で着きました。子どものころ〝大きな家〟と思っていた家は平屋3DKの長屋。運転手の男性（左端）に手振りと筆記で事情を説明。男性が住人（右端）に話すと、快く家の中を見せてくれました

4年生になると、母国見学旅行と呼ばれる修学旅行が。23日間かけて下関から京都、東京など、各地の観光名所を軒並み巡ったといいます。戦争が激しくなり、サチさんたちが行ったのが最後に。

新調の外套（実は母親がリフォームしたもの）、革靴を履いて下関に上陸したら、ヨレヨレの服を着た中学生が素足に下駄で歩いてて本当にびっくりした。女の人が道路工事してたり、人力車を日本人が引いてたりーとても乗れない。中国人なら平気で乗ったよ。伊勢神宮の鳥居の下で日本人が乞食をしているのを見て、〝先生、日本人が乞食しています！　なんで日本人が〟って。

（つづく）

記憶のなかの「満州」（下）

川本サチさんのふるさと

サチさんが神明高等女学校４年生の夏。桜組で記念撮影＝1941年、夏河家子（かかかし）海岸で（親族提供）

「満州」の高等女学校は5年生までいくことができましたが、川本サチさんは4年で卒業して、「女専」と呼ばれた〝花嫁学校〟に進みました。旅順でも大連でも熱心に教会に通い、1941年には洗礼も受けたクリスチャンでした。

戦争が終わり

男の健康診断書を取って結婚しなさい、男の人も純潔な人を選べって散々言われた。あのころ、兵隊にいったら純潔じゃないわけよ。行く先々で女の人を与えられて。

終戦の半月前、7月31日に20歳で結婚したけど、うちの旦那は兵隊でフィリピンにいってた。何かの折に〝オレは6カ国の女を知ってきた〟と自慢げに言うのよ…。

夫が奉天郊外にあった満電（満州電信電話）の独身寮で寮監をしていたため、終戦は同地で迎えました。

戦争が終わって最初に見たのは、蒋介石の兵隊だった。日本語が上手でね、〝蒋介石は日本の陸士を出ている、だから僕たちは親日だ〟っていばってたよ。次に来たのが新四軍（前身は中国共産党の紅軍）。同じ中国の兵隊でも話すことが全然違ってた。その人たちが帰った後、ソ連兵がきた。

シベリアに流された〝罪人〟が入ってきた。あれはひどかったねぇ、けだものだもんね。本当は露助なんて言ったらいけないのにね、そうとしか言いようがないわけよ。

周りの女性は〝丸坊主か断髪。女性の格好で外を歩かなかった。寮で1人で洗濯してた時、ソ連兵が2人入ってきた。撃たれるか、捕まって犯されるか、どっちかしかない。とにかく逃げなきゃと思って、私飛び出したの。入り口にいた1人を突き飛ばして、寮母さんがいる隣の棟まで逃げた。

別の日、〝楽器を譲ってくれ〟ってロシアの士官が交渉にきたわけ。ごく当たり前の将校だった。へー、同じロシア人でも、〝丸坊主の罪人〟とは違うんだって見直した。

寮の近くに関東軍がいて、憲兵だったという2、3人が、それこそ匍匐で逃げてきたの。すぐ軍服を脱がして、頭もそれっぽくして寮生のなかに紛れ込ませてね。持てるだけの物を持って、家財道具や家はそのままにして。家の前に中国人がたくさん待ってて、私たちが1歩玄関から出たら、押しのけるようにして入ってきた。〝あーっ、こんなことするんだ〟って思いながら、振り向きもせずに帰ってきたけどね。

「満州」では、朝鮮銀行発行のお金を使って生活してたの。引き揚げの際、日本の紙幣と交換してくれるのが、1人1000円、1回だけなのよ。何回も換金する人もいたわ。みんな、リュックしょって、水筒さげてくるわけでしょ、換えたお金を空の水筒に詰め込むの。

遼寧省の西端、港湾都市・葫蘆島の港から引き揚げたのは、46年6月でした。収容所で約10日過ごして順次、引き揚げ船に乗りました。

私たちが上がったのは呉。なにもない内地を見て、私たちの暮らしとはずいぶん違うのでびっくりしたわね。

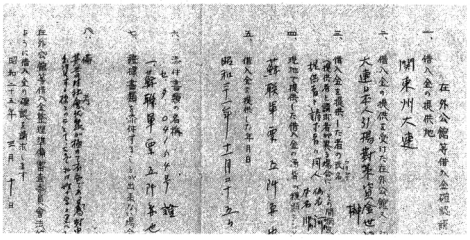
サチさんにとって「満州」は故郷でした。しかし、そこには、ずっと以前から暮らす多くの人々がいました。話を終えようとしたころ、サチさんがつぶやきました。

日本人が偉そうにしてたのは事実よね。私たちは向こうで生まれて育ったから、それが当たり前だと思ってた。

（おわり）

戦後75年

地べたをはうように逃げて



引き揚げ費用に充てる?!
国が在留邦人から借り入れ

サチさんの父親が1950年３月、松山市役所に提出した「在外公館等借入金確認請求書」（写真、部分）。そこには、46年に「ソ連軍票5000円」を提供したこと、提供者名に生後６カ月で亡くなった息子の名前を使った旨、記しています。その理由を〝当時は社会状態が極めて不安であって…必要であれば住所姓名を偽っても出資する様とのことでしたので〟としています。政府は49年、〝引き揚げ費用などに充てるため〟として在留邦人から国が借り入れをする法律を制定。その３年後には借入金を返済する法律を作りますが、換算率は日本円１円に対してソ連軍票は10円（47年３月以前分は1.6円）でした。

振り向かずに

日本への引き揚げは、引き揚げ者の連盟から〝何月何日何時の汽車に乗ってください〟って連絡があるわけね。持てるだけの物を持って、家財道具や家はそのままにして。家の前に中国人がたくさん待ってて、私たちが1歩玄関から出たら、押しのけるようにして入ってきた。〝あーっ、こんなことするんだ〟って思いながら、振り向きもせずに帰ってきたけどね。

「満州」では、朝鮮銀行発行のお金を使って生活してたの。引き揚げの際、日本の紙幣と交換してくれるのが、1人1000円、1回だけなのよ。何回も換金する人もいたわ。みんな、リュックしょって、水筒さげてくるわけでしょ、換えたお金を空の水筒に詰め込むの。

遼寧省の西端、港湾都市・葫蘆島の港から引き揚げたのは、46年6月でした。収容所で約10日過ごして順次、引き揚げ船に乗りました。

私たちが上がったのは呉。なにもない内地を見て、私たちの暮らしとはずいぶん違うのでびっくりしたわね。

サチさんにとって「満州」は故郷でした。しかし、そこには、ずっと以前から暮らす多くの人々がいました。話を終えようとしたころ、サチさんがつぶやきました。

日本人が偉そうにしてたのは事実よね。私たちは向こうで生まれて育ったから、それが当たり前だと思ってた。

（おわり）

朝日新聞（2020年11月27日付）より転載

日中のはざま 残留孤児3代の物語

中国残留日本人孤児を祖母にもつ3世が、自叙伝的長編小説「不確かな血」（文景坊出版）を出版した。戦争に翻弄（ほんろう）された「おばあちゃん」の人生と、日本と中国という二つの国を背負って生まれた「僕」が抱えてきた葛藤の体験をもとに書かれた。根底にあるのは、歴史を受け継いでいきたいという強い思いだ。

なぜ自分はいまここに…孫が小説出版

佐藤昇さん（左）と祖母の美和子さん＝東京都江戸川区

著者は、東京都江戸川区在住の会社員佐藤昇さん（31）。祖母の美和子さん（76）は幼いころ、軍人の父ら家族と中国に暮らしていた。敗戦前後の混乱で中国人に預けられ、家族と離ればなれに。中国残留孤児となった。1983年に肉親捜しのための訪日調査に参加。2年後、日本に永住帰国した。

美和子さんの長女である母と、中国人の父との間に生まれたのが佐藤さんだ。小学校入学前から、自分の家が違う文化をもっていることを意識し始めた。「恥ずかしくて、いやだった」

自分の意思で12歳のときにハルビンの小学校に留学。「中国語がわかるようになれば、両親と深く話せるようになるのではないか」との思いもあった。

当初は「日本鬼子」「日本に帰れ」などといじめられた。歴史の授業では中国に侵略した日本軍の行為を繰り返し教わり、頭の中が真っ白になった。

15歳で日本に戻り、その後、再び中国に渡って北京外国語大学で学んだ。そこには自分と同じく日中の文化を背景にもつ人たちがいた。「自分のルーツを知らないのはもったいない」との思いが生まれた。

なぜ自分はいまここにいるのか――祖母や両親、日本の親類などにそれぞれの人生や体験してきたことを聞いた。中国に取り残された祖母の思いや両親が苦労して日本での生活を築いたことを知った。

作品は、祖母と自分の体験を元に、戦争の歴史と残留孤児とその子孫が背負わされたものをたどりながら、両国のはざまで生きる3世の葛藤を描いた。自身が北京留学中に体験した尖閣諸島をめぐる反日デモなどの様子も盛り込んだ。

佐藤さんは言う。「国と国とのいざこざや戦争が起こると、そのはざまの人たちがどんな思いを抱え、どのような体験をするのかを知ってほしい」

「不確かな血」は640ページで、2090円。

（編集委員・大久保真紀）

方正日本人公墓が私たちに問いかけるものとは・・・

―「方正友好交流の会」へのお誘い―

1945 年の夏、ソ連参戦に続く日本の敗戦は、旧満洲の「開拓団」の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒のなか、飢えと疫病によって多くの人たちがハルピン市郊外の方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人の松田ちゑさんは方正県政府に、「自分たちで埋葬したいので許可してください」とお願いしました。その願いは方正県政府から黒竜江省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、「方正地区日本人公墓」が建立されました。

1963 年、まだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない時期、中国政府は、中国人民同様わが同胞も日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ 5000 人近い人たちが祀られているこの公墓の存在は、未だ多くの人たちに知られておりません。

私たちは、民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって維持管理されている公墓の存在を、多くの人たちに知ってほしい、そして旧満洲における日本国家と日本人の中国への加害と被害を多くの人たち伝えていこう、国家や民族を超えた民衆レベルでの友愛精神を広めていこうと「方正友好交流の会」を設立しました。ぜひ皆さま方のご支援ご協力をいただきたいとお願いする次第です。どうぞよろしくお願いいたします。

個人会費　一口　1,000 円　団体・法人会費　一口　10,000 円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101-0052　東京都千代田区神田小川町 3-6　日中科学技術文化センター内

電話　03-3295-0411　FAX　03-3295-0400　Email:ohrui@jcst.pr.jp

郵送振込口座番号　00130―5－426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス　http:/www.houmasa.com/

＜報告＞　　ありがとうございました！

前号の 30 号入稿後、2020 年４月以降にご送付いただいた会費及びカンパされた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、2020 年 11 月末までの分です)

福久一枝　貞平浩　前川よしえ　土川克広　高木昂　大久保勲　村上弘充　菊田真紀子　渡辺保雄　加藤まり子　榎戸吉定　野村芙美子　柳生じゅん子　大和清一　肥後茂樹　広田彰夫　阿部則司　竹中一雄　藤原作弥　清野浩志　長尾寿　小倉光雄　奥村信子　畑修三　大山茂　百瀬享　高橋守男　小柴玲子　藤井盛　山口真　小出公司　光川澄子　井上定彦　山川禎一　大西広　田澤仁　山田敬三　亀山英雄　さいたま市大宮日中友好協会事務局　新宅久夫　塚田恵子　奥田俊夫　椎名鉄雄　石井昭男　田平正子　中井詔太郎　（有）正盛設備　十時哲哉　阪田和子　依田高明　先﨑千尋　高橋甫子　山本義輝　根田春子　清嶋一順　由井格　佐藤すみ江　平沢千恵子　宗重勇　阿石定子　網代正孝　藤後博巳　早川浩市　田中丸邦彦　岩下壽之　塚原常次　中島紀子　新谷陽子　伊藤昭　大島満吉　小林淨子　高田京子　久保和男　石金楷　富田恵子　柳瀬恒範　篠田金二　樗沢仁　田中正昭　望月信隆　桐山貞夫　松村静子　野崎朋子　木戸冨美江　森博勇　岩間孝夫　吾孫子隆　樋口貴教　小坂井和夫　江藤昌美　村田和代　米濱泰英　田井光枝　小玉正憲　﨑山ひろみ　北原武司　片山静江　白井豊富　長澤保　中澤道保　柳澤永一　山口榮一　田島正夫　團野廣一　甲斐国三郎　吉岡孝行　掛谷敏男　安川壽之輔　堀泰雄　川田明良　澤岡泰子　川合継美　深山信雄　松村岩雄　杉田春恵　東海林次男　中島幼八　平良長政　栗原彬　瀧亀久男　鈴木幸子　松田信義　福地桂子　渡辺一枝　横沢活利　春日井治　秋吉任子　神田さち子　谷川弘　及川康年　竹井成範　大里浩秋　野中酉夫　高橋健男　篠原淳子　山本武　大野正夫　栗林稔　千島寛　落合智恵子　小野寺喜一郎　（株）シー・アイ・シー　久保孝雄　木村護郎クリストフ　大浜敏夫　東海林敬子　木村美智子　篠原孝　山内るり　上野千鶴子　寺本康俊　伊東秀子　守屋アツコ　山本寛　片岡祐子　神田秀一及川淳子　富田宗廣　大澤大介　塩谷茂和　末広一郎　松島赫子　黒木皆夫　小林勝人　清水醇　高橋紀代子　瀬部明子　坂本茂三郎　小関光二　中島俊輔　酒井武史　西嶋拓郎　櫻庭ゆみ子　山田弘子　矢野光雄　瀬々倉卓治　トレヴァー・マーフィ　森清多美江　公益社団法人日本紅卍字会　飯田弓子　山田浩　矢島敬二　北澤吉三　水野恵子　小林彰彦　今徳芳子　丹野雅子　牧野八郎　林郁　宮下春男　加藤毅　乃村晃　川添緋砂子　石井妙子　柳田正子　千田優子　齋藤忠雄　黒岩満喜　出口孝樹　柳瀬文恵　仁木茂　山崎八重子　湯川誼　宮城恭子　小田淑代　松本嘉子　松成亮太　湯本信幸　渡辺芙美子　田辺実　藤岡信照　藤川琢馬　名取敬和　小池イヨ子　藤村光子　山野裕　近藤和子　今井和江

≪編集後記≫

まず寄稿していただいた方、また参考資料として関連の新聞記事を送ってくださった方々に感謝いたします。ありがとうございました。最終の原稿チェックには、いつもように森一彦さんを煩わした。寄稿されたご本人も読み直したであろうし、また編集人である私も、原稿を読んでみて誤字脱字はないと思っていても、森さんがまたチェックすると間

違いが出てくる。もうこれで間違いはないだろうと思っていても誤字脱字が見つかるかもしれない。また写真を入れるために原稿を短くしていただいたり、締め切りぎりぎりに入稿された原稿があまりに長く、次号に回していただいたのもある。何卒ご寛容のほどお願いします。本号の内容はいかがだろうか。率直なご感想をいただきたい、

さて、この８月 29 日 30 日の両日、関東エスペラント連盟の大会が東京郊外の調布市で開催された。その分科会の一つに「満蒙開拓団」というテーマで大類が講演をしろという企画を堀泰雄さんが提案され、40 分ほど話す機会があった。堀さんは群馬県前橋市在住で、本誌に転載した朝日新聞群馬県版＜群馬と満蒙開拓＞シリーズの記事を送ってくださった方でもある。

堀さんは元高校の英語教師だった。40 歳の時、父親が熱心にエスペラントをやっていることを思い、自分もやってみるかと始めた。私と違うのは、毎日 20 分エスペラントを読むという自分に課した勉強を続けて、エスペラントをモノにされた方であり、今ではエスペラントを駆使して、その後の東日本の被災状況を世界のエスペラント界に発信し、またエスペラントで本を書かれるなど、日本のエスペランティストとして世界のエスペラント界で有名な方である。また本会の会員でもあり、大変頼もしい方である。

分科会の時間は 50 分である。最初の５分ほどは、エスペラントで自己紹介した後は、日本語で 35 分ほど、「星火方正」を出すようになった経緯や、会報によって方正日本人公墓の存在を知った羽田澄子さんが記録映画『嗚呼　満蒙開拓団』を制作した話などをした。会場には 20 人、オンラインで参加された 40 人、総勢 60 人の方々が私の話を聴いてくださった。

自画自賛になって気が引くのだが、好評だった。話を終えた後、10 分間の質問時間に移ったが、ロンドン在住の藤田喜久さんからは、すぐに会場に電話をくれ、「大変感激した」というコメントをくださった。また他の方からも好評で、帰途、佐々木照央さんというロシア中世史の研究家からは「大類さん、いつまでも方正を伝えてください」と言われた。参加された方の中には旧知の方もいたが、改まって方正日本人公墓の建立経緯などを話していなかったこともあるが、皆さん真摯に聴いていただき好評だったのは嬉しい限りだった。

また最近、新たに本誌を知ったという方々からの電話やメールなどが相次ぎ、またカンパなどをいただき、恐縮している。ありがとうございます。

本誌は基本的に会員、非会員を問わず誌面を開放しています。どうぞ本誌に相応しい原稿だと思われるものはどんどんお寄せいただきたい。基本的には、ワードで左右 30ｍｍ、主文は 10・5 ポイント、長くても 10 頁以内でお願いします。お待ちしています。（大類）

表紙写真撮影・大類善啓

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第 31 号）2020 年 12 月 12 日発行

発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町 3－６　日本分譲住宅会館　４Ｆ
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会